
著 東出祐一郎
イラスト 中央東口
原作 propeller
Bullet Butlers
バレット・バトラーズ
虎は弾丸のごとく疾駆する 1
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

Bullet Butlers

～虎は弾丸のごとく疾駆する～ １

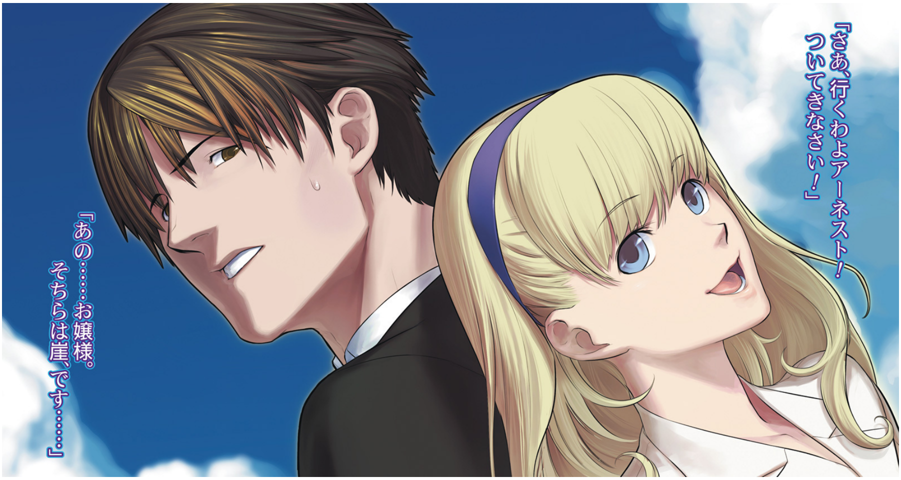
東出祐一郎

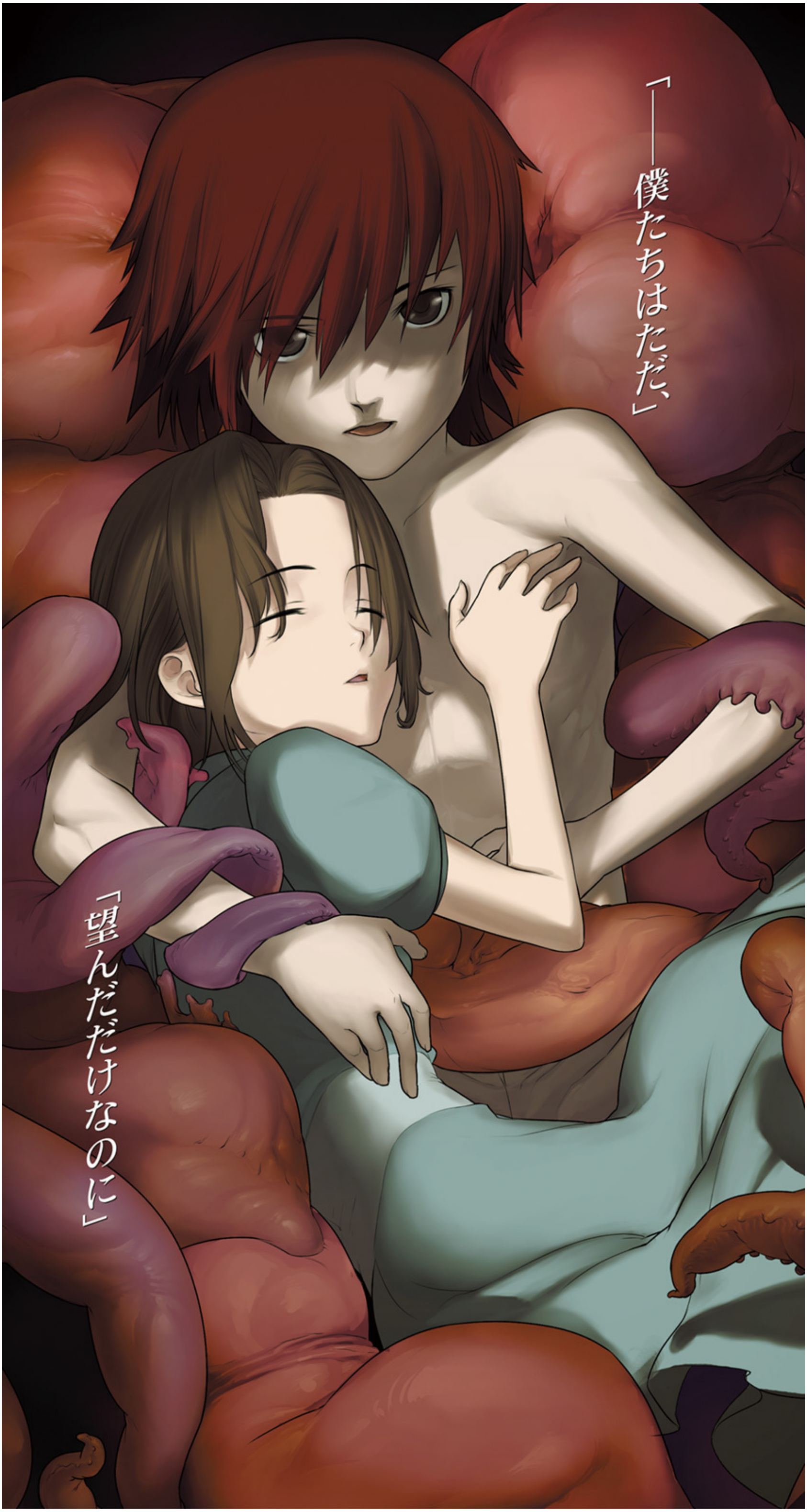
原作　propeller

イラスト　中央東口


Bullet Butlers
バレット・バトラーズ
虎は弾丸のごとく疾駆する 1
著 東出祐一郎
イラスト 中央東口
原作 propeller

contents


「さあ、行くわよアーネスト！
ついてきなさい！」
「あの……お嬢様。
そちらは崖、です……」


「——僕たちはただ、」
「望んだだけなのに」

目次

——退屈なときは、異なる世界の話をしよう。
我々とは森羅万象の法則が異なる世界、違うものたちが生きる世界のことを。
かつて竜の少女と、その執事の話を三度語ったように。
今から語るは、少し臆病な虎のお話。
その虎と、恋というにもまだ早いような少年少女の淡いお話——。

序　章

――――英雄暦１９３９年篭こ手て月づき（７月）ノ14日

　唸うなるような風の声と、吼ほえるような雷いかずちの声、泣き叫ぶような波の声。悪鬼の咆ほう哮こうは未だ止まず、彼らの安息の場所を蹂じゅう躙りんし続ける。

　ぐるんぐるんと世界が揺れ、回り、時に落ち、時に浮き上がり、そのたびに人々は容た易やすく振り回された。

　母は自分の恐怖を抑えつつ息子をなだめ、父は泣きじゃくる娘を抱きしめた。恋人は不安そうに寄り添い、老夫婦は不安げに顔を見合わせている。

「落ち着いて下さい、皆さん落ち着いて下さい！　どうか！」

　船員が必死になって、大広間から逃げ出そうとする乗客を押し留めていた。大広間及び一等客室には、〝要よう塞さい構築〟の魔法が掛かっている。水が入り込むことはないし、外部の衝撃で物が壊れることもない。

　船員は繰り返しそう説明し、闇やみ雲くもに外に出てボートに乗ろうとする彼らを抑えつけていた。今のところは、それが成功していた――この船のイメージがその信頼感を後押ししていたに違いあるまい。

　客室もまたそれと同じ。船員たちが駆け回り、部屋の外に出ないようにと命じると、全員が大人しくその指示に従った。彼らは信じていた、この嵐は一時的なものであり、すぐに収まると。あるいは、船員の的確な操そう舵だによってすぐに抜け出せるであろうと。

　結論から述べると、それは間違いだった。全乗客が闇雲に救命ボートに乗り込んで外へ飛び出すべきだった――もっとも、その選択とて同じ道を辿たどる可能性は極めて高かっただろうが。

　災さい厄やくに巻き込まれたこの船の名はディルビック号という。グリムスター造船会社が、その総力を結集して作り上げた豪華客船。

　最新の造船技術と、最高の魔法技術、世界中からスカウトされた一流の船員、そして潤じゅん沢たくな資金、一つとて足りぬものはない。

『神が乗るべき不ふ沈ちんの船』と褒ほめ称たたえられたのも当然といえよう。

新聞とラジオはこぞってこの船を報道しては褒め称え、この船に乗ること自体に何かしらの『幸運』があるのではないか、と乗船を唆そそのかした。

出航は篭こ手て月づきの７日。恐ろしいほど航海は順調だった──強しいて言うのであれば、乗客の何人かが馴なれない船旅に吐き気けを催もよおしたことと、三等客室の乗客たちがつまらないいざこざを起こして軽傷を負った程度だ。

ニヴェンを出航して七日目の夜。突如として海が荒れ狂った。

丁ちよう度ど、大広間で開かれていたパーティに出席していた一等客室の乗客たちは揺れ動く船に、今いま更さらながら、自分たちが海上に居ることを思い出し──二等、三等客室の乗客たちは、あまりに激しく動く船に耐え切れず、嘔おう吐とした。

だが、彼らが耐えられないのも無理からぬことだった。船体は恐ろしいほど大きな嵐によって木この葉はのように海を漂流していたのだ。

もっとも、正確に言えば漂流ではなかったのだが──この、猛たけり狂う暴ぼう虐ぎやくに耐えつつ船をコントロールしようとしている船員たちには、それを認識する余よ裕ゆうはない。

「こんな前触れもなく、どうして……！」

機関士の呟つぶやきに、全員が心中で同意した。本当に突然だった。夜空は澄み渡り、千ち切ぎれた雲に雷雨の兆候などこれっぽっちもなかった。時し化ける気配など皆かい無むだったのに、ほんの一瞬で、この有様だ。

もちろん、海にそういう気まぐれがあるのは熟練の船乗りならばよく理解している。だが、彼らの全てがこれほどの嵐に遭あうと察知できなかったのもまた考え難い事だった。

「信号弾をもう一度打ち上げろ！」

船員の言葉に、慌あわててもう一人が信号銃を片手に甲板へと駆け上がり、空に向けて銃ひき爪がねを引いた。眩まばゆい光がほんの一瞬、彼の目を刺す。だが、信号を打ち上げた男はすぐに嘆たん息そくした。空はコールタールのようにべっとりとした暗闇と、荒れ狂う風と雨で信号弾の光など六等星程度の輝きでしかない。

若い船員はすぐに中へ戻ろうとしたが、船体がぐらりと揺れた拍子に無様に転げ、手すりまで体を滑らせた。

「くそっ」

　舌打ちしながら、手すりに摑つかまり立ち上がろうとして──彼は心底おぞましいものを見た。心臓が凍りつき、足に力が入らなくなる。

（何だ、これは？）

　それは、赤黒い蔦つただった。一本だけならばまだしも、それらは枝分かれし、分ぶん岐きし、海面から次々と飛び出してくる。がたりと、また船体が激しく揺れ動く。船員は濡れて滑る手すりに必死になってしがみつく。

　改めて船体を見ると、びっしりと赤黒い蔦つたが密着していた。全長３００ｍモールの船体全て、ありとあらゆるところに！　それらが呼吸をするかのように蠢うごめく様は、最も早はや、悪夢としか形容できない。

「……ア。アア……」

　呼吸ができない。自分の置かれている状況も忘ぼう我がするほどのおぞましく、異常で、そして絶望的な美しさを持つ光景だった。

（逃げなければ、逃げなければ、逃げなければ──！）

　立ち上がる。立ち上がったこと自体が奇跡だった、だが不幸な事に──蔦は、彼が立ち上がったことを『認識』してしまった。

　船体を這はいずっていた蔦が、急速に動き出して男の背中を捕らえた。

「え──？」

　背中に何かが絡まり、凄すさまじい力で男を持ち上げた。持ち上げられた男は、蔦によって海へと引きずりこまれていく……！

「あ、が、ぎ……!?」

　強烈な痛みと熱を感じ、反射的に悲鳴をあげようとした瞬間、荒れ狂う海に潜んでいたモノを、彼は直視した。

　直視した瞬間、彼は痛みも熱も忘れ、ただひたすら恐怖のために絶叫した。

　全ての蔦を操る肉の塊かたまり──推定でも数十ｍモールの大きさ──が、海の中で蠢うごめいていた。夜の海でも隠しきれないほどの赤い光を帯び、グロテスクな赤い蔦を船体に絡ませている。その数、恐らく数千を下るまい。

男は恐怖のあまりに冷えきった、醒さめた思考で思った。

（そう、か――この嵐はこいつの仕業だ）

ずぶり、と背中に蔦が食い込んだ。先ほど感じた痛みと熱が再び襲い掛かったが、すぐにそれは掻かき消えた。いや、むしろ別の感覚が襲っていた。

（そして、ディルビック号を先ほどから揺れ動かしているのもこいつの仕し業わざだ）

最初は快楽のように思えた。だが、すぐに思い直した。むず痒がゆく、こそばゆいような、それでいて名状し難い苦く悶もんのような。

男はすぐに理解した。

（生きたまま……生きたまま、俺は変えられている。何かに変わっている、何かに化けている……ああ、ああ……）

男は持ち上げられたまま、ディルビック号を眺めた。

（何てことだ……）

蔦つたが、客室や操そう舵だ室しつに潜入し始めている。風と雨音では掻かき消せないほどの絶叫が、男の耳に届いていた。

――い……やだ……！　こんな、こんなの、いや……！

――助けて！　お母さん！　助けて！

――このっ、畜ちく生しようっ、体に、からだに、食い込むむむむむ。

――おがっ、あ、ご、ぎ、こ、えが、で、な……。

――から、だが……何て奇妙なんだ……からだが……か、らららららだが……。

――あァっ、違ウ！　チがウ！　こンなのワたしジャないィィィィ！

――イタクナイ、イタクナインダヨゥ……ソンナワケナイノニ、イタクナイ……。

「ああ……ああ、やめてくれ！　やめてくれぇ！　後ご生しようだ！　何でもする！　だから、もうやめてくれェェェェッ！」

自身に絡んだ蔦も忘れて、男は絶叫した。あの船には三千人の乗客

と船員が乗っているのだ。

　若い男も、若い女も、老人も、老婆も、少年も、少女も、赤ん坊も、富豪も、貧乏人も、一いつ攫かく千せん金きんを夢見た者も、成功して威い風ふう堂どう々どうとこの船に乗り込んだ者も、無む造ぞう作さに、そして公平に、蔦の気まぐれに凌りよう辱じよくされていく。

　空を飛んで逃げようとしたドラゴニュートやハーピィすら、蔦は素早く絡めとっていった。

　いっそ、殺された方がマシであった。単純な捕食、単純な殺意ならば男は諦てい観かんするか、諦観する暇もなく神の御許ブレシグランドへ行くことができたであろう。

　しかし、この蔦には意思がある。とてつもなく邪悪な意思が、目的が！

　男は憎悪を篭こめて、蔦を睨にらみつけた。蔦に逆らって腕を動かし、ポケットに差し込んでいたジャックナイフを取り出し、刃を剝き出した。これでは自分が海面に落下することは明らかだが、それでもこの蔦に絡まるよりは溺でき死しするか凍死するほうが幾分マシかに思われた。

　叩きつけた刃から、肉に食い込むような感触が伝わってくる。くそ、畜生！　と吼ほえながら、男はジャックナイフを振るい続けた。

　背中に回った蔦に対しては、もう出で鱈たら目めにナイフを振り回し続けた。ぷちぷちと、不快と愉ゆ悦えつが綯ない交ぜになった感覚と共に蔦が千切れていく、そして、その度に男の体は下降していく。

「くそ、くそ、くそ、くそ……！」

　男は最早、乗客たちを救うことを諦めた。苦く悶もんと怨えん嗟さ、悲しみの啜すすり泣きも徐々に小さくなっていく。それはつまり、作業が終わりかけているという証あかしなのだろう。

「くそ――！」

　男は力を絞しぼり、ジャックナイフを振るって何本目かの蔦を切断した。だが、そこまでだった。力が尽きた、ナイフを握り締めているのが精一杯で振るおうとしても腕が痺しびれて言うことを利きかない。

（俺も死ねないのか、俺もこのまま何かに変えられるのか……）

　何か。

　とてもおぞましい何か。今の自分とは絶対的に違う、何か。不思議なことに、徐々に嫌悪感が薄れている。その事実に慄然とする。

「嫌だ！　そんなのは嫌だ！　俺は俺だ！　畜ちく生しよう、俺は俺なんだ！　俺は俺だ！　俺は俺なんだ！　畜生、畜生……！」

　──変わるのは、きらい？

　突然投げかけられたその言葉に、男は啞あ然ぜんとしながら顔を向けた。

「……」

「ねえ、聞いてるじゃないか。変わるのは、嫌い？」

　声を発したのは、年端もいかない少年だった。悪いた戯ずらっぽい笑顔を浮かべながら、こちらを眺めている。



　彼の体にも、蔦つたは絡まっていたため男は、自分と同じ犠ぎ牲せい者しやかと考えたが──何故だか、それは違うような気がした。

「……」

「ちぇっ。返事もしてくれないんだ」

　不ふ貞て腐くされたようにそう呟つぶやき、少年は自分の言葉がおかしかったのか笑った。男は、ようやく気付いた──少年はこの状況に混乱も、絶望もしていない。

「おまえ、は……」

「でもね、気付いてないかもしれないけど。おじさん、もう変わっているんだよ？」

　笑顔を浮かべて、少年は男に近づいていく──近づく？

　いかなる魔法なのか、少年はまるで地面をしっかりと踏みしめているかのように、男に向けて一歩一歩、宙空を歩いている！

「おい、来るな……来るな！」

　最後の力を振り絞しぼり、男はジャックナイフを構えた──が、少年の黒水晶のような瞳に見み据すえられ、動きを止めた。

　少年はすっと指を動かし、男の眉み間けんにそっと当てた。夜の寒気、雨の冷たさに負けぬほどの寒々しい感覚が、男の全身を覆おおい尽くす。

「だっておじさん、もう自分の名前も忘れているじゃない」

「□□？」

　その言葉に反論しようとして、その言葉を笑い飛ばそうとして、その言葉が正しいと気付いたとき、男は今度こそ絶叫した。

　新たな蔦がたちまち男の背中に突き刺さり、男を一気に海面へと引き寄せる。

　海の中には、あの赤い肉にく塊かいが待ち受けている。男が最後に、真っ当に思考できたモノ──それは、この理り不ふ尽じんさに対する純粋な怒りと、憎悪と、何か残さなければという必死の思いだけ。

　この海域は危険だ、この海域に来るんじゃない。此こ処こには我々人の想像を絶するものが潜んでいる、だから、絶対に、絶対に来るな

──！

　赤い蔦が全身に絡まった。

　第七貨物艙そう──ディルビック号右う舷げん地下三階、第一金庫室。ここには四人の軍人が表情を崩くずさず、自動小銃四挺ちように加え、魔法付与した銃弾を発射する特殊銃──いわゆる魔銃を二挺ちよう携帯して佇たたずんでいた。

　しかし、ある程度じっくりと間近で観察すれば目の怯おびえ、噛かみ締め続けられて青くなった唇、少し震える軀からだから、彼らが怯えきっていることが分かったであろう。

　だが、彼らはここを離れる訳にはいかなかった。第一金庫室は、部屋の中に金庫があるのではなく、金庫そのものが部屋となっており、従ってここからは揺れ動く船と、やや混乱している声が聞こえてくる操そう舵だ室しつへの通信機以外に、外界を知る術すべは無かった。

「──どうする？」

　一人が、とうとう口を開いた。もう一人が応じる。

「命令だ。〝ガーゴイル〟は完全な管理下に置かねばならない」

「しかし」

「分かっている。ジム、金庫室を出て様子を確かめて来い。沈没の可能性が高いようであれば、こちらもそれに応じて動かねばならない」

　ジム、と呼ばれた男は頷うなずいて肩に担いでいた銃をそっと手にしながら金庫の扉を開き、外へ出た。だだっ広い倉庫はひっそりと静まり返っている。自分たち以外に誰も存在しないことを確認してから、ジムはクリアの合図を送った。

「オーケー、金庫を閉じる。幸運を」

　仲間の声に頷き、ジムは倉庫の出口に向かってゆっくりと歩き出した。だが、倉庫を出て階段を昇り、Ｂ甲板へ上がった瞬間に幸運など何の役にも立たないことを理解した。

　ジムはたちまち赤い蔦つたに絡め取られ、銃を連射しながら海面へと引きずり込まれていった。

　金庫の中にいた軍人たちはジムが帰還しないことに気付くと一人、また一人と外に出て行き──最後に残った男は誰も戻ってこない恐怖に心が壊れそうになりながらも、一人金庫室の中で待ち続けた。結果的に考えれば、彼はこの大だい虐ぎやく殺さつの最中に生き残ったただ

一人の人物であった。しかし、残念なことに彼はそれを誇れなかった。精神が崩壊してしまった彼は、絶対に金庫室の外には出ず、一人待ち続けてそのまま餓が死しした。

　──通信室。

　ジョン・ドラマー二等通信士とヘンリー・ロース一等航海士が必死になって救難信号を送り続けている。二人は既に周囲の尋じん常じようでない様子に気付き、ドアを押さえて蔦が入り込むのを防ぎながら、ひたすら近隣の船せん舶ぱくに向けてＳＯＳ信号を送り続けていた。

「まだ返事は来ないのか!?」

　ドアを頑丈なテーブルで押さえ、ガラス製の窓に向けて手当たり次第に物を当てて塞ふさぎながら、ヘンリーは叫んだ。

「駄目です！　くそ、無線が妨害されているみたいで……！」

「念話テレパスはどうだ？」

「無線に同じ。何かこう……結界のようなものが張られています」

「……まさか。召喚algiz！」

　ヘンリーは自身の武器である自動拳銃オートマテイツクの弾倉を召しよう喚かんする魔法を詠えい唱しようした。彼の呪文に応えて弾倉が出現した。

「くそ！　どういう事だ。無線は通じないが魔法は使える、だが念話テレパスは使えない。まさか、連絡する手段だけを遮しや断だんしているのか!?」

「俺に聞かないで下さいよ！　ともかく、救難信号は送れません！」

「……代わってくれ、俺が打つ」

「は？」

　いいから、とヘンリーはジョンを退かせ、通信機で素早く救難信号を打ち込むと素早く魔法を唱えた。

「──我に続け」

「〝繰り返しリピート〟ですか」

　ジョンの言葉にヘンリーが頷いた。〝繰り返し〟とは、単純な念動

力テレキネシスの応用だ。術者が望む行動を繰り返し続ける。もちろん、複雑な挙動は不可能だ。救難信号を打ち続けるくらいしかこの魔法は能がない。

「俺の等級デイグリなら、あと一時間くらいは打ち続けられる」

「じゃあ、俺たちは？」

「……一か八か、外に出て救命ボートまで突っ走るしかない。救命ボートを下ろし、一気にこの海域を抜ける」

「いけますか？」

「無理だろうな」

「じゃあ、ここで篭こもっていた方が……」

「そちらの方が、もっと可能性が低い。見ろ、この蔦つたは俺たちがここにいることが分かっているんだ。さっきから、潜り込もうとしているのはこれが原因なんだ……」

　ガラスが粉々に打ち砕くだかれた。ヘンリーは慌あわてて遮しや光こう用のカーテンでそれを塞ふさごうとする。だが、蔦が胴に絡んだ。「ちくしょう！」と叫びつつ、彼は握り締めていた銃の銃ひき爪がねを引き捲くった。千切れた蔦がピクピクと痙けい攣れんする。

「行くぞ！」

「……！」

　ヘンリーとジョンはドアを開けて、一目散に走り出した。床の蔦を踏み越え、跳ちよう躍やくしつつ救命ボートへひた走る。

　終末の日アポカリプス──二人の頭に浮かんだのは、そんな単語だった。大神エル・アギアスが自分たち人の堕だ落らくに悲しみ、滅ぼそうと決意したときに訪れるという世界の終しゆう焉えん。

　赤い蔦は大小様々で、最大サイズのものはディルビック号の船体をぐるりと取り囲んでいる。

　ざわざわと絶え間なく蠢うごめく様は、数千数万匹の蚯蚓みみずのようだ。

　絶叫しながら走った。神に祈り、天使に祈り、精霊に祈り、あらゆる者に祈った。

　不死の王ノーライフキングにすら祈った二人だったが、救命ボート

に辿たどり着く直前に足下を掬すくわれ、体中に蔦つたを巻かれ、人でない何かに変へん貌ぼうさせられた。

──一方、豪華客船の乗客、船員たちには一人残らず赤い蔦が絡んでいた。だらしなく口を弛し緩かんさせ、涎よだれを垂らし、あちこちから血を流し、否いな、血を流していない箇か所しよなどなく、呻うめき声一つあげずに佇たたずんでいた。

そして、そんなおぞましい大広間の中央に、先ほどの少年が佇んでいる。

両手を広げ、聖人が高らかに謳うたう福ふく音いんのように告げる。少年の表情はこの上もなく、歓喜に満ち溢あふれており──感動しているようだった。

「ありがとう！　ありがとう、君タチ！　君タチは！　大事にするよ！　本当だ！　本当なんだよ！　絶対に、一人一人……凄く大事にする！　本当だ！　約束だ！　約束するよ、だから、お願いだから、どうか……ぼくタチのために！」

ずん、と凄すさまじい衝撃が客船を襲う。

船体は真っ二つに裂け、そのまま前部と後部が天空を指した。そのまま、ずるずるとディルビック号は海の底へと引きずりこまれていく。その様は、まるで海という巨大な生物がじゅるじゅるとディルビック号を吸い込んでいるようにも見えた。

「生きてくれLive！」

全長３００ｍモール、総重量約５００００ｔアガラツト、材質はミスリル合金、鋼、金、銀、アダマンタイト──総工費三千億ルードとも呼ばれる巨額を投じて作り上げられたディルビック号は、かくして海の藻も屑くずへと消えた。

生存者は零ゼロ名、死亡者は零名。

行方不明者は三千四十六名であり、それは全乗客、全乗組員の合計数でもある。

船が沈むと同時に嵐は掻かき消え、雨は止み、雲は千ち切ぎれて消え──ディルビック号という豪華客船など、最初から存在しなかったかのように静かな海に戻っていた。

だが、一人の航海士がこの事件を外界に知らしめた。自身が変化したあとも彼の唱えた魔法は通信機を動かし、メッセージを送り続けていた。

—エスオーエス。

—コチラ、ディルビックゴウ。キュウジョモトム。

—エスオーエス、エスオーエス、エスオーエス……。

その繰り返しが途切れる寸前、救難信号をキャッチした船は慌あわてててディルビック号が沈んだ海域へと向かったが、海はひっそりと静まり返り、船せん舶ぱくの姿はどこにも見当たらなかった。

最初は悪いた戯ずらの可能性も考えたが、ディルビック号の通信士へ何度念話テレパスを仕掛けても、そして無線で何度連絡を送っても応答しないことから沈没したものと想定し、アーク・メリア連邦海上保安局へと連絡した。

海上保安局は直ちにディルビック号が沈んだと思おぼしき場所へと急行し、ニヴェンとも連係して一晩かけて綿密かつ大規模な捜索を実施したが、板切れ一つ見つからなかった。無論、到着予定地であるダウンロッドに到着した形跡もない。

即すなわち——ディルビック号は完全に消失してしまったのだ。しかも、ディルビック号が通信によって確認された最後の時間は、嵐が起こるたったの三十分前だ。一時間も満たぬ間に、あの豪華客船はいずこへともなく消えてしまったのだ。

捜索を担当したジム・オブライトが確信をもって言えることはただ一つしかなかった。

「こいつはどえらい騒ぎになるな」

彼の言う通り、翌朝からアーク・メリア連邦国は蜂はちの巣すを突いたような大騒ぎになった。

◇

二人は地面にぺたりと座り込んで、互いに空を見つめていた。

一人は少女。やや長めの栗くり色の髪かみ。とび色の瞳はやや垂れ気味で、彼女の内面の幼さが、そのまま現れたようだ。服はひどくうす汚れた、ぼろの布。

一人は少年。赤い髪、少し悪戯好きな猫のような表情。服はやはり、少女に合わせたようなぼろの布。

「……ねえ、ほんとう？」

不安げな、心細げな少女の声。自分ではとても手が届きそうにない

贈り物を願ったときの、子供の声だ。その声に応じて、少年は微ほほ笑えむ。

「ほんとうだよ。君の願いは、ちゃんと叶う。約束するよ」

　少女は勢いよく立ち上がり、大地を走り出した。天を見上げ、もうすぐ『やってくるよ』という少年の言葉を信じて、くるくると踊りだす。

「すてき！　もうすぐきてくれるのね！　たくさん、たくさん、たくさん！」

「……うん」

　少年は少し寂しそうな表情をした。実のところ、彼はずっと二人でも構わないと思っていたのだ。いつも二人でやってきたのだから。

　だが、それは彼女の喜びに容た易やすく覆おおい隠されるものだった。

　二人のいる大地は、樹木がなく、建物があり、生物はなく、屍し骸がいがあった。

　ひたすらに広く、ひたすらに荘そう厳ごんで、ひたすらに異い形ぎようだった。

　屍骸は幾重にも積み重なり、どろどろとした腐液と共に一つのオブジェを形成している。少年は微かな記憶で理解している──これは、〝家〟と呼ばれるものだと。

　二人のいる大地は、積み重なった骸むくろの大地だった。

　手を繋つないで空を見上げる──少年か、少女か、どちらかが「ああ」と小さく感かん嘆たんの息を漏もらした。

　ゆらゆらゆっくりと、巨大な船が墜おちてくる。船底から真っ二つに裂け、赤い蔦つたを絡ませながら、船が墜ちてくる。

　ぎゅっ、と少年の手を握る力が強まった。

「……きてくれたんだ」

　少女の呟つぶやき。彼女は、じっと空から墜ちてくるそれを見上げている。

　目に熱っぽい水が溜まり、彼女はごしごしと腕で擦こすったけれどどうしようもなかった。後から後から涙が溢あふれてくる。どれくら

い渇かつ望ぼうしたのだろう、百年？　二百年？　それくらいでは、とても足りない気がする。

　静かに泣き続ける少女の小さな小さな手を、少年はずっとしっかり握り続けていた。

　始まるのだ。

　今から、長い長い時間と想像を絶する絶望を経て、楽しいだけの時間が――。

かつて、世界を侵した戦いがあった。
大いなる神（エル・アギアス）に追放された死を司る神（ヘルダイス）が、この世の全存在を死滅させんと闘争の幕を開けたのだ。

死が死を感染させ、無数に増殖（ぞうしょく）する屍兵（ゾンビ）たち。
滅び去るかに見えた人間と亜人（あじん）たちは互いの手を取り合い、かつての神にして現世の魔王である不死の王に決死の戦いを挑んだ。
乾坤一擲（けんこんいってき）のチャンスを掴んだ彼らは、人間・エルフ・ドワーフ・リザードマン・オーク・ジャイアント・ゴブリン・ドラゴニュートから八人の英雄と一人の従者を選び出し、不死の王（ノーライフキング）の元へと送り込んだ。
十万を越える屍兵（ゾンビ）との激闘、巨大な城塞の罠（わな）を潜（くぐ）り抜けた英雄たち、そして従者の尊（とうと）い犠牲（ぎせい）をもって不死の王（ノーライフキング）は打ち倒され——世界に平和が訪れた。

——だが、不死の王（ノーライフキング）は未だ死せず——

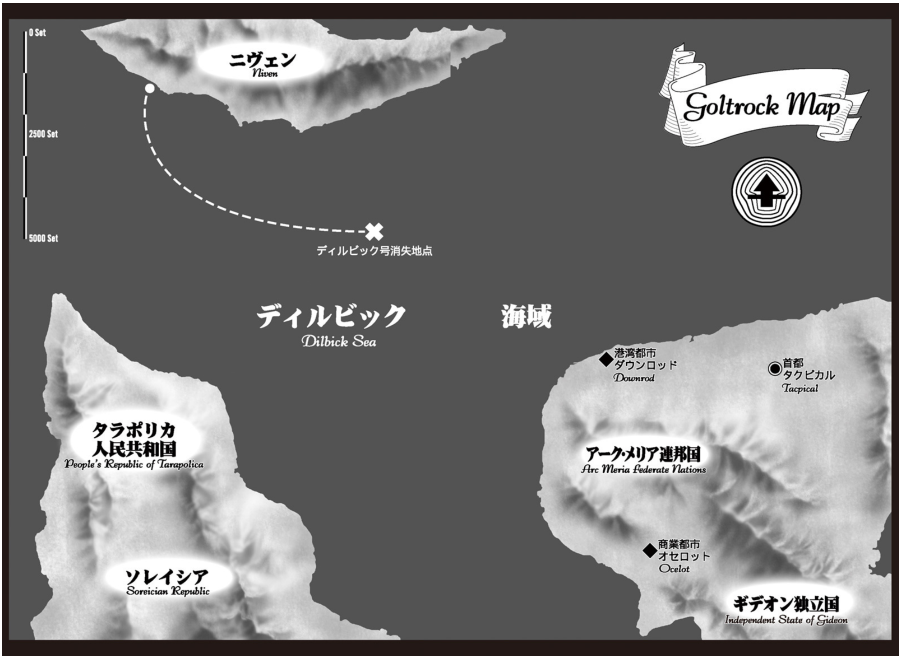
その絶望と憎悪を受け継ぐ者たちは集まって組織を構築し、〈聖導評議会（せいどうきょうぎかい）〉を名乗って、世界を相手に闘争を挑んだ。二千年が経過した現在に至っても、その暗黒の闘いは延々と絶え間なく続いていた。数多の魂を犯し、殺し、あるいは救いながら。

この大地の名はゴルトロック。英雄の魂（たましい）を受け継いだ末裔たる者たち（ミスティック・ワン）が、未だ生き続ける幻想の世界——。

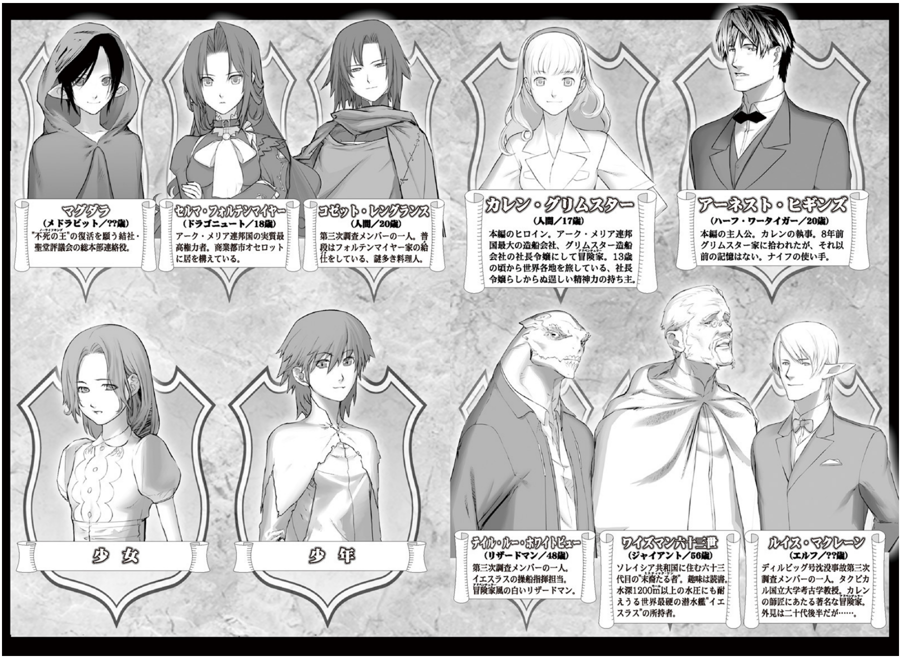
Bullet Butlers

バレット・バトラーズ

虎は弾丸のごとく疾駆する 1



Goltrock Map
0 Set
2500 Set
5000 Set
ニヴェン
Niven
ディルビック号消失地点
ディルビック 海域
Dilbick Sea
タラポリカ
人民共和国
People's Republic of Tarapolica
ソレイシア
Soreician Republic
港湾都市
ダウンロッド
Downrod
首都
タクピカル
Tacpical
アーク・メリア連邦国
Arc Meria Federate Nations
商業都市
オセロット
Ocelot
ギデオン独立国
Independent State of Gideon


マグダラ
（メドラビット／??歳）
"不死の王"の復活を願う結社・聖堂評議会の総本部連絡役。
セルマ・フォルテンマイヤー
（ドラゴニュート／18歳）
アーク・メリア連邦国の実質最高権力者。商業都市オセロットに居を構えている。
コゼット・レングランス
（人間／20歳）
第三次調査メンバーの一人。普段はフォルテンマイヤー家の給仕をしている、謎多き料理人。
カレン・グリムスター
（人間／17歳）
本編のヒロイン。アーク・メリア連邦国最大の造船会社、グリムスター造船会社の社長令嬢にして冒険家。13歳の頃から世界各地を旅している、社長令嬢らしからぬ逞しい精神力の持ち主。
アーネスト・ヒギンズ
（ハーフ・ワータイガー／20歳）
本編の主人公。カレンの執事。8年前グリムスター家に拾われたが、それ以前の記憶はない。ナイフの使い手。
少女
少年
テイル・ルー・ホワイトビュー
（リザードマン／48歳）
第三次調査メンバーの一人。イエスラスの操船指揮担当。冒険家風の白いリザードマン。
ワイズマン六十三世
（ジャイアント／56歳）
ソレイシア共和国に住む六十三代目の"末裔たる者"。趣味は読書。水深1200m以上の水圧にも耐えうる世界最硬の潜水艦"イエスラス"の所持者。
ルイス・マクレーン
（エルフ／??歳）
ディルビッグ号沈没事故第三次調査メンバーの一人。タクピカル国立大学考古学教授。カレンの師匠にあたる著名な冒険家。外見は二十代後半だが……。

第一章

　　　　　　　――――英雄暦１９３９年篭手月（７月）ノ15日

ギデオン独立国　ラ・サント遺跡

「走って、走って、走れぇぇぇぇぇぇっ！」

　少女の叫び。

　転がり続ける巨大な岩。道は真っ直ぐ、両サイドはとてもではないが昇りきれない土壁に囲まれており、枝道はなく、要するに走って走って走りまくって、遥か向こうに見える輝く出口へ辿たどり着かねばならないのだ。

　参考までに述べると岩の大きさは直径10mモール、人間が己の力で止められるような代しろ物ものではない。

「出口まで絶対に足を止めちゃダメよ！　走って、速く！」

　走っているのは二人の男女。恋人同士という間柄でないことは、服装が教えてくれる。一人はブロンドの少女。白色のハーフパンツと、魔法で耐久性を強化されたジャケットを着込んでいる。

　少女は「走れ、走れ、走れ！」ともう一人の男に叫んでいる。

「止まったら死ぬわよ！　速く、速く、速く！」

「……は、はい……分かって……ます！」

　途切れ途切れにそう応じたのは大柄な男だった、太っている訳ではなく、背丈が常人より一回り高い。口を閉じているにもかかわらず、犬歯がはみ出しているが、それより現状にそぐわないファッション――黒いスーツと白いシャツ――が目立っていた。

　飼い馴ならされることのない野生の狼のような風ふう貌ぼう。口を開けば辛しん辣らつな言葉が飛び出しそうな不機嫌そうな表情、しかし彼は必死に走っていて、穏やかな顔を形作る余よ裕ゆうなどなかったのだ。

　少女の名はカレン・D・グリムスター。アーク・メリア連邦国において伝統を誇る大手造船会社グリムスターの社長令嬢であり、ここ最近になって名前を知られるようになった冒険家アドベンチュラーである。

前ぜん人じん未み踏とうの土地、未だ誰の侵入も許さぬ遺跡に足を踏み入れ、財宝を━黄金であることもあれば、貴重な古代の資料という時もある━手に入れることを己の生なり業わいとしている。

遺跡への違法な潜入、違法な財宝取引に足を踏み入れる者もいるが、カレンの場合は極めて健全で、遺跡に入る前は必ず各所の許可を得てからと決めていた。何しろグリムスター家はアーク・メリアでもそこそこ名を知られた造船会社だ。社長令嬢が犯罪者など、洒しゃ落れにもならない。

そんな訳で、彼女は今しがた手に入れた財宝と、そして執事と共に絶体絶命の危機をどうにか乗り越えるべく走り続けている。

そしてカレンと併へい走そうしている執事━無骨そうな男の名はアーネスト・ヒギンズという。

そう、彼は執事であるが故にこのようなスタイルなのである。カレンは不便ならばいくらでも着替えていいと以前から告げているのだが、アーネストは「これが自分の流儀スタイルですので」と頑かたくなにこれ以外の服を着ようとしない。

もっとも、リザードマン以上の耐久力を持つアーネストの恵まれた体たい軀くならば、どんな服でも大抵は問題ないとはカレンも思っているのだが。

さて、この二人がどうして背後から転がる巨大な大岩に追い回されているのかというと、アーネストが腕に抱えている石せき版ばんが原因である。

先も書いたように、カレン・グリムスターは冒険家アドベンチユラーである。三日前、彼らはアーク・メリア連邦国の元植民地であったギデオン独立国を訪れた。ギデオンは少し前まで不幸な経緯によって国交が断絶していたが、アーク・メリア在住の〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟の尽じん力りよくによって、今ではどうにか国交を回復するに至った。



そして、半鎖国状態だったギデオン独立国には冒険家アドベンチユラーが欲してやまない前ぜん人じん未み踏とうの遺跡が無数に散らばっていた。たちまちこの国は、有う象ぞう無む象ぞうの冒険家アドベンチユラーがひしめく楽園となったのだ。

カレンとアーネストが足を踏み入れたのは、その内の一つ『ラ・サント遺跡』という。

悪質な罠わなを潜くぐり抜け、数百年の刻ときを経て動き出した防衛用骸骨兵士スケルトンを打ち倒し、遺跡の祭壇に祭られていた石せき版ばんを入手したところで、最後の罠が発動した。

発動した結果が、現在の状況──つまり、転がる大岩に追い回されているという状況である。どうやら、大岩には〝追尾〟の魔法付与エンチヤントでもされているのか、たとえ角を曲がっても階段を昇っても、しつこくしぶとく二人を追い回す。

グシャリ、と音を立てて先ほど倒した骸骨兵士スケルトンが大岩に潰つぶされた。速度を落とせば、自分たちも彼の仲間入りだ──もっとも、自分たちの場合は肉と血、臓物も混じって非常にべとつくだろうが。

──あの岩が追い回しているのは私たちじゃなくて石版の方みたいね。

カレンは走りながら、そう推理した。ならば、主たる自分があの石版を持つべきだ。アーネストを犠ぎ牲せいにすれば自分だけ助かる──あるいは石版を放り捨てる、などという考えはちらりとも浮かばない。

だが、とカレンは考える。

問題はアーネストはそれを許さないだろう、という事だ。彼も恐らく、石版が追跡の原因であることは看かん破ぱしている。にも関わらずそれを手放すことをカレンに進言するでもないのは、この石版こそが自分たちが命を賭けた報ほう酬しゆうだからだ。

手放して、と命令するのは簡単だ──だが、それはアーネストの誠意を踏みにじる行為でもあり、冒険家アドベンチユラーとしての禁きん忌きでもある。

だからせめて、共に走り続けるしかカレンに選択肢しはなかった──それでも、アーネストが転べば、容よう赦しやなく石版を手放すように命令するつもりではあったが。

　大岩の勢いは止まらない。鍾しよう乳にゆう石せきがガラスのように砕くだけ散っていく。逃のがれる方法はただ一つ、岩より狭いために、物理的にそれ以上の進行が不可能な出口に到達するしかない。

　弾丸のように走る──二人揃って。自然に造られたスロープを駆け上がり、地面から突き出た鍾しよう乳にゆう石せきを跳躍して乗り越える。

　カレンが転びかける、ふらついた瞬間に腰にアーネストの手が回される。ぐっと引き起こされ、彼女は体勢を立て直した。

「ありがと、助かった……！」

「は、はい……。お嬢様、出口です！」

　カレンとアーネストは共に出口──つまり、遺跡の入り口に到達した。狭い、二人がギリギリ通過できるかどうかの大きさしかない。だが、大岩は確実にここで留まるはずだ。

「三つで飛ぶわよ、アーネスト！」

「はい！」

「壱ワン、弐トウー、参スリー──！」

　文字通り勢いよく跳躍すると共に出口を抜け出す。途端に二人の目を刺す、太陽の光──。

　アーネストは巨きよ軀くに似合わぬ俊敏さで、両腕を伸ばし、カレンをその大きな胸の中に押さえ込んだ。

　地面に激突する。ドンと背中に衝撃を受けたがアーネストは気にも留めない。そんな程度で苦痛を抱くほどに脆ぜい弱じやくな体ではない。

　それよりは、カレンが傷つく方がアーネストにとっては遥はるかに恐ろしかった。ただし、カレンはアーネストが庇かばえなかったことに対して叱しかりはしない。つまりは、『執事である』という己の矜きよう持じに対しての問題だった。

　ずずず、としばらく滑ったところでアーネストの動きは停止した。カレンはじっとアーネストの瞳を見つめる──その瞳に、苦痛がないことを確認すると彼女はわずかに顔を緩ゆるませた。

　背後で、凄すさまじい破壊音が轟とどろいた。転がってきた大岩が狭い出口と激突したらしい。

　振り返る、あと一歩遅れていれば自分たちの体は確実に平面フラットなものになっていただろう──アーネストはその事実にぞっと身を竦すくませ、カレンは前向きに助かったことを喜んでいた。

　カレンは身を起こすと、ぽんぽんとアーネストの胸板に拳こぶしを当てて満面の笑みを浮かべた。

「……ふう！　最後にちょっとケチついたわね」

「死ぬところでしたが」

　カレンは肩を竦すくめる。

「いいのよ、アーネスト。私は生きている。貴方あなたも生きている。目的の品もちゃんと懐ふところに納まっている。それで充分じゃない、オールオッケーよ」

「…………確かにそうですね」

　アーネストは頷うなずき、わずかに頬ほおを歪ゆがませた。本人としては、微ほほ笑えんだつもりなのだ。彼を知らぬ者が見れば、悪鬼オーガの笑みに間違えられるかもしれないが。

「はぁ、相変わらず笑顔を作るのが下へ手たね。あなた」

「面めん目ぼくありません」

　しょんぼりと頭を掻かくと、目が情けなく垂れ下がる。この表情はこの表情で、愛あい嬌きようがあるのだけどね、とカレンは思った。

「いいのよ。さ、目的の品を見せてちょうだいな」

「はい、こちらです」

　懐ふところから、アーネストが石せき版ばんを取り出した。カレンは拡大用の片眼鏡を取り出し、大おお雑ざつ把ぱに文字を調査する。

「……うん、やっぱり古代ラルト文字の名な残ごりがあるわよ。二千年以上前、つまり八英雄時代より前に滅亡した国家の文字ね」

「はぁ……」

　どうもこの手の話は苦手だ──とアーネストは思った。まあ、それ以上にここで下へ手たに興味を持ったような相あい槌づちを返すと、怒ど濤とうの如く彼女の蘊うん蓄ちくが流れ出すので、この気の抜けた返答は実に適切なものだったが。

「興味ないみたいね、つまんないの」

　カレンは片眼鏡をしまいこむと、石版を突っ返した。

「……後でじっくりお聞きします」

　アーネストが嘆たん息そく混じりにそう告げると、不機嫌だったカレンはあっさりと機嫌を直したようだった。「仕方ないわね」などと呟きつつ、嬉うれしそうに身を翻ひるがえす。

「さ、街に戻りましょう。車が一いつ角かく犀さいに破壊されてなきゃいいんだけど」

　一角犀は巨大な角で、あらゆるものを突き破る。遺跡に向かう途中、群れの姿をちらりと見かけた。慌あわてて逃げ出したが、彼らが偽装した車を見つけていないとも限らない。狩しゅ猟りよう許可を得てない以上、彼らを狩ることは禁止されている。逃げるしかないのだ。

「徒歩で街に戻るとなると、七日は掛かりますからね」

「エル・アギアスに祈っておきましょう。私たちの車は無事、荷物もまったく盗とられていないってね」

「畏かしこまりました、お嬢様」

　二人は神に祈りつつ、歩き出した。

　──カレン・グリムスターは冒険家アドベンチユラーである。

　カレンは世界の深部に触れた快感を味わうため、今日も前ぜん人じん未み踏とうの遺跡に立ち向かう。

　──アーネスト・ヒギンズは執事バトラーである。

　カレンを守るため、今日も前人未踏の遺跡に付き合わされる──不満はない、後こう悔かいもない、大だい恩おんある主を守れたという喜びが、彼にとっては何よりの報ほう酬しゆうだった。

　神に祈ったのが幸いしたのか、それとも偽装が功を奏したのか、車は無事に元あった場所に鎮ちん座ざしていた。

「エル・アギアスよ、感謝します。あと、アーネストの偽ぎ装そうの腕にも」

「どうもです、お嬢様」

　照れたように頭を掻かいて、アーネストは頭を下げた。

　偽装を取り払って車に乗り込み、カレンは無線機の周波数を確認すると、レシーバーを手に取った。

「Ｗ６Ｃ７エリア。信号強度４。こちら、カレン・グリムスター。聞こえますかしら、教授？」

　三拍ほど遅れて、ノイズ混じりに応じる声がした。

　穏やかな男の声だ。穏やかで、力強い壮年の声だった。

「Ｃ４Ｄ５エリア。信号強度４。少し電波の調子が悪いようだ、だが問題はないだろう。首しゅ尾びはどうだったかね、カレン？」

「石せき版ばん一枚。とはいえ、古代ラルト文字らしきものが見受けられます。詳しくは、持ち帰って大学に調査を依頼したいのですが」

「古代ラルト文字とは……素晴らしい発見だ。まだ、世界でもあの文字が刻まれた石版は十枚に満たぬだろうに」

「大したことありません、その十枚に満たぬ石版を三枚発見したあなたに言われると、むしろ自分が恥ずかしくなります」

　教授、と呼ばれている男もまた冒険家アドベンチユラーだ、名をルイス・マクレーンという。カレンにとっては偉大なる先人であり、冒険家アドベンチユラーの師し匠しように当たる人物でもある。

「さて、カレン。疲れているだろうが、忠告だ。今すぐに自分の屋敷へ戻った方がいい」

「屋敷へ？　いえ、戻るのはいいのですが……何かありましたか？」

　カレンの声に緊張が含まれるのを感じ取り、アーネストも少し緩ゆるみかけていた気を引き締めた。

「まさか、お父様とお母様に何かが……？」

「そうではない。……『ディルビック号』が遭そう難なんした」

「……！」

　ディルビック号──グリムスターが総力を挙げて造り出した豪華客船。不ふ沈ちんである、とまで謳うたわれたあの船が、遭難したという。

「冗談──ではないみたいですね」

「ああ。暴風雨に巻き込まれて沈没した、という見方が強い。今のところ、生存者も死体も見つかってはいないが……」

「分かりました、すぐに戻ります」

　カレンの声はやや上うわ擦ずっていたが、次第に冷静さを取り戻していた。メディアは不沈と喧けん伝でんしていたが、沈まない船などないことはカレンもよく理解している。

　だが、とにかくグリムスター造船会社にとっては危機的状況であることに変わりはない。そんな状況下で、遺跡の探検に挑むほどカレンは無神経ではなかった。

「気をしっかり持ちたまえ。私もできるだけ早く、アーク・メリアに戻ることにするよ」

「ええ、ありがとうございます……それでは」

　無線を切ると、カレンはアーネストを見た。アーネストは無言で頷うなずき、車を発進させた。通常ならば、ホテルに戻って一日ゆっくりと休むべきだが、そうも言ってられなかった。

　二人はこのままアーク・メリア連邦国との国境へ向かうことを決断した。

◇

――――英雄暦１９３９年篭手月（７月）ノ14日

オセロットシティ・スケイルエリア

　オセロットシティは、その市民の資産や家柄などを考こう慮りよして居住地区が河川と森林によって分割されている――近年はゆっくりとその垣かき根ねも無くなりつつあるが。ともあれ、その中で元貴族（身分制度が撤てつ廃ぱいされた現在でもなお、貴族を名乗る者は後を絶たない）や富を獲得した者が住むエリアが、ここスケイルエリアである。

　そのエリアから、やや外れた場所に建っているクランブル様式建築（現代の最新建築技術を内部に取り込みつつ、外側のみ中世で流行したコロル式建築、即ち荘そう厳ごんと華か美びの両立を目指したスタイル）の屋敷こそが、アーク・メリア連邦国の実質最高権力者アンセルマ・カイキャックス・フォルテンマイヤーの住む家である。

　とはいえ彼女は最高の権力を保持してはいるが、統治する者ではない。民衆を治め、導くのは政治家の仕事であり、官かん僚りようの仕

事である。だが、彼女の一声でそれら全てが変化する。正当な理由さえ存在すれば、この国最高の権力者を即座に処断することも可能だろう。

なぜなら、フォルテンマイヤー家こそがかつて世界を救いし八人の英雄──その末まつ裔えいであるからだ。

〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟──彼らはそう呼ばれる。英雄の末裔、神と人が起こした奇跡の具現的存在。

とはいえ、〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟は血の繋つながりによって継承されるものではない。たとえば、先代であるランド・フォルテンマイヤーとセルマ・フォルテンマイヤーは血の繋がりがまったく存在しない。

彼女はただ神によって気まぐれに選ばれ、己の意思で道を歩んだだけだ──とはいえ、その道は並大抵のものではなく、苦難と絶望の道のりであったけれども。

さて、現当主であるセルマ・フォルテンマイヤーはゆったりとした夕食後のひとときを過ごしていたが、ラジオの緊急速報──『ディルビック号が暴風雨に巻き込まれ、沈没した』とぃうニュースを聞くと、大きくため息をついた。

整った顔立ちからは悲ひ哀あいが現れており、瞳は嘆なげきに満ち溢あふれている。

隣にはハーフエルフの執事が控えている。彼は、ラジオのニュースを聞いた途端、ゆったりとくつろいでいた少女の全身が強こわ張ばったのを感じて、少し哀しくなった。

彼女は〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟──他者の痛み、他者の哀しみをも受け止めなければならないのだ。

「これから何日も、このニュースが世間を騒がすでしょうね」

セルマの言葉に、傍かたわらに控えていた執事──リック・アロースミスは表情を変えずに頷うなずいた。

「そうなる事は間違いないかと。もし、本当に生存者が存在しないとなれば、近年最悪の海難事故になります」

「この事故についての情報は逐ちくーいち報告してちょうだい。合ごう同どう葬そうがあるのならば、出席しなければならないしね」

「畏かしこまりました」

「誤ご報ほうだといいんだけど……」

　そう言いつつも、少女はそんな微かな望みに期待しない方がいいと理解していた。

「それからお嬢様。誤報でなく、沈没であった場合は更に厄やつ介かいなことになるかもしれません」

　執事が口を挟はさむ。

「乗組員と乗客、合わせて三千四十六名、その中に空を翔とべるハーピィや変身可能なドラゴニュートが居なかったかどうか、調査せねばなりません。いたとしたら、なぜ逃げ延びることができなかったのかも」

「あ……」

　迂う闊かつ、というようにセルマは頭を押さえた。

「もちろん、乗組員の場合は乗客のために責任を取って船と運命を共にした、という可能性もありますが……」

「そうね。乗組員はともかく、もうすぐ沈没するという状況で乗客が辛しん抱ぼう強く船が沈没するのを待つというのは、あまりに馬鹿げているわ。暴風雨であったことを考こう慮りよしても、よ」

「飛ひ翔しようして逃げた生存者が見つかればそれでよし、もし見つからないとするならばテロの可能性も考こう慮りよせねばなりません。あるいは……」

　リックは苦々しい顔で呟いた。

「あまり考えたくありませんが、ディルビック号に構造的欠けつ陥かんが存在し、その為に逃げることもできなかった──など」

「そうなった場合、グリムスター造船会社はさらに苦しい立場に追い込まれるでしょうね」

「……一度パーティでお会いしたことがあるはずよ。娘さんがいらっしゃったわ」

　当然のことではあるが、グリムスター家の娘に罪も咎とがもない。だが、民衆は彼女が笑顔を見せることを許さないだろう。

「可か哀わい想そうに──」

「公的な場所での、グリムスター家への同情は当分の間禁じて下さ

い、お嬢様」

　リックは自身でも理解できるほどに冷たい発言をしているな、と思った。

「分かってるわ……」

　はぁ、とセルマはもう一度ため息をついた。

――――英雄暦１９３９年篭手月（７月）ノ14日

ダウンロッド

　カレンは、ダウンロッドの屋敷に戻るなり、泣きじゃくる母親ペール・グリムスターに抱き締められた。

「ああ！　ああ！　何てこと！　何てことなの！　こんな酷ひどいことって無いわ！　三千人──たった一人の生存者もいないなんて！　何て残ざん酷こくな……！」

「ああ、もう。落ち着いて下さい、お母様！　まだ沈没したと決まった訳ではないですわ！」

　カレンは泣きじゃくる母親を

「いいえ、私には分かります！　ディルビック号は沈没したのです！」

　こんな台詞せりふ、新聞記者が聞けば大変な事態になることは間違いない。

「ちょっとあなた！　悪いんだけど、お母様を寝所で休ませてちょうだい！」

　近くにいたメイドを呼び寄せ、カレンは母親を引き渡した。

　おいおいと泣きじゃくる母親の後ろ姿を見て、はぁとため息を吐いた。

「お母様、相当参っているわね……」

　グリムスター家に嫁とつぐ前は、蝶ちようよ花よと育てられた貴族の末っ子であったという母親は、何となくカレンや父よりもおっとりとしていて、逆境にはひたすら弱かった。もちろん、それ以外では充分に良い母親であってくれたし、カレンとてそれが短所にも長所にも変化することは理解していたので、特に彼女の性格を是正しようとは思わなかったが。

「レイジ様にお話を伺いたいところですが……」

　アーネストの言葉を聞いていたかのように、書しよ斎さいのドアが開いてカレンの父親━レイジ・グリムスターが飛び出してきた。

　レイジ・グリムスターはやや肥ひ満まん気味なペールと比較して瘦やせぎすであったが、陽に焼けた肌、そしてふさふさとした黒い髭ひげが、彼を大物に見せている。

「おお！　我が愛いとしき娘や！」

　そう叫ぶなり、たっと駆け出して先ほどの母親と同じようにカレンを抱き締める。

「無事でよかった……冒険の話は今度聞かせてもらいたいんだが、いいかい？」

「ええ、もちろんです。今はそれよりも……ディルビック号の現状について、教えて下さい」

　レイジは重々しく頷うなずいた。もちろん、カレンはグリムスター造船会社の経営に関わっている訳ではない。だが、ある程度の情報はカレンと共有しておくべきだ、とレイジは判断していた。「ディルビック号に関しては何も知りません」では済まされないのだ。

　既に乗客、乗組員の家族から問い合わせが殺到している。

「ディルビック号からの遭そう難なん信号を受け取ったフォルニア号は、直ちに現場に急行してくれた。信号を受け取って出来るだけ迅じん速そくに、くだんの海域に到達したがディルビックの姿はどこにも見えなかったという報告を受けている」

「一時間持たずに沈没した、という事でしょうか？」

　レイジは苦悩の表情を露あらわにして、かぶりを振った。

「そういう事になる……だが、いくつかおかしい点があるんだよ」

　彼はわずかに逡しゆん巡じゆんしたが、カレンの瞳に促されるように告げた。

「まず、一つ目。ディルビック号から一番近かったフォルニア号は信号を受け取る少し前に、突然の嵐に巻き込まれたそうだ」

「嵐……ですか？」

「うむ。……フォルニア号で一番古参の乗組員にも読み取れないほ

ど、突然の天候変化だったそうだ」

　──ならば、それが原因なのか？

　アーネストは無言のまま、ぼんやりとそう考える。だが、とアーネストは思い直す。出航の際、カレンとアーネストは共にディルビック号の見送りに向かった。

　あの巨大な船が、嵐で沈没──？

　とてもではないが、アーネストには信じられなかった。あの威容を誇る船が沈没するイメージが、どうしても湧かなかった。

「二つ目におかしい点。船員、そして乗客にドラゴニュート、そしてハーピィも乗り込んでいたはずだ。魔法使いも、空を飛ぶ使い魔を引き連れていたはずなのだ」

　ここで、レイジは大きくため息をついた。

「にも関わらず、ただ一人の生存者も見つからない。ということは、彼らが空を飛ぶ余裕もないほどにわずかな時間で沈没したという可能性もある」

　この言葉の意味するところにカレンは気付き、ゾッとした。船体に穴が開いた程度ならば、数時間はもつはずの船がそれほどわずかな時間で沈没したということは──。

　何らかの強力な外部的要素が加わったか、あるいはディルビック号に構造的欠陥があったか、だ。

　もし、後者の場合──恐ろしくて想像もできない。どれだけ用心を重ねても、そういうもの──つまり、誰もが置き去りにしてしまった欠点──があの船にあったということだ。

「いずれにせよ、私は三千人の命の責任を取らなくてはならない」

　父の言葉には、深い苦悩が見て取れた。三千人の命は──あまりにも膨ぼう大だいすぎる。

「生き残りは……いなかったのですか？　フォルニア号が見逃した可能性は？」

「それを考え始めれば切りがないが、フォルニア号の経歴から考えてもその可能性は低いと私は思っている……彼らは粘ねばり強く捜してくれたようだ」

「実は信号は間違いで、航海中という可能性は……」

「そうであったらいい、とは思うんだが……」

　レイジはゆっくりとカレンの頭を撫なでた。

「私とペールは、これから色々と忙しくなる。お前も、しばらく人前に出るのは避けなさい。私たちはともかくとして、お前には何の関係もないことだからね」

「そんな、お父様……関係ない訳ありません。私は、あなたの娘ですから」

「既に君はひとり立ちしている、私はお前にお小遣いを与えている訳でもないからね。いざという時は……母親の姓を名乗りなさい。グリムスターを名乗るのは不都合となるかもしれない」

「お父様……」

「済まないね、忙しいだろうに急に呼び立てて。今日はもう眠りなさい。何か分かったら、すぐに知らせるよ」

「旦だん那な様、お電話です。モンブラッシェ様から――」

　メイドの言葉に、レイジは「すぐに出る」と応じた。

「電話だそうだ。それじゃ、ハニー」

　子供にするような呼びかけに、カレンは一瞬嬉うれしそうな笑みを浮かべた。だが、その笑顔も父の背中を目で追う内に消えていった。

　自室に戻り、カレンは夜着に着替えてからアーネストを再び呼び出した。

「どうかなさいましたか、お嬢様？」

「ええ、悪いのだけどちょっと付き合ってくれない？」

　カレンはウィスキーの酒さか瓶びんとコップを二つ、取り出した。アーネストの眉まゆがわずかにしかめられた。

「お酒は苦手なんですが……」

「知ってるわ。でも、たまにはいいじゃない」

　不ふ貞て腐くされたように告げるカレン、アーネストは嘆たん息そくしつつ覚悟を決めた。彼女が酒を飲もうとすること自体が珍しい、翻ひるがえって言えば酒に頼りたくなる気分なのだろう。

アーネストはカーテンがきちんと閉まっているか確認すると、コップを受け取った。

コップに注いだ琥こ珀はく色の液体を、カレンは一息に飲み干した。アーネストも続けて、ウィスキーを口にした。だが、含んだ瞬間、圧倒的に豊かな風味が口の中で膨ふくらみ──破裂した。

「……っ」

「だ、大丈夫？」

涙を目元から滲にじませながら、アーネストは何度も頷うなずき、焼けるような味わいの酒をどうにか飲み干した。

「ごめんなさい、強かったみたいね」

「いえ……」

それからアーネストはちびちびと、少しずつ飲み始めた。それでも咽いん喉こうに絡むような感覚に耐え切れず、とうとう彼は断念した。意識もやや揺れている。

「これから、どうなるのかしら……」

酔い始めたカレンの呟つぶやき、アーネストは暗あん澹たんたる気分を抑えることができない。

どうにかなる、と一言で済ませられないのは確かだった。いずれにせよ、三千人の命が絶望的なのは確かなのだ。

カレンは両親のことを考える。

父は会社の最高責任者として、彼らの命を背負わなければならないだろう。

いつもおっとりしていた母は、そんな父と共にあることに耐えられるだろうか？

そして、カレンは自分のことを考える。

逃げることは簡単だ、父の言う通り姓を変えて、どこか遠くの国へ行けばいい。いつでも外国を飛び回っているのだ、冒険家アドベンチユラーならば一年以上を海外で過ごすことだってある。

父もそれを望んでいるのが明らかだった。カレン・グリムスターに罪はないと、そう思っているのだ。

　けれど、逃げてはならない。耐えなければならない──カレンはそう理解している。

　自分にはそれだけの責任がある。グリムスター家に生まれたという責任がある。

　でも、自分は──これから先叩きつけられるであろう感情の奔流に、耐えられるだろうか？

「ねぇ、お願い。……眠るまで、手を繫つないでいて」

　甘えるような声、蕩とろけるような瞳にアーネストは無言で彼女の小さな手を包み込んだ。

　わずかに涙が滲む。

「アーネスト……」

　震えている。目をつむれば、悪夢を見るという確かな予感がカレンにはあった。

　それらを受け入れようとして、涙を零こぼす。

　せめて、夢の中に──頼れる執事が出てくるよう、カレンは祈った。

　アーネストはカレンが眠ったあとも、無言で手を握り続けている。

　八年前、アーネストは記憶を失った状態で放浪していたところをルイス・マクレーン教授に拾われ、彼の仲ちゆう介かいでグリムスター家が引き取った。自分のような胡う散さん臭くさい存在を保護してくれただけでなく、〝白手の学院フオレン・ソール〟への奨しよう学がく金きんまで出してくれた。

　どれほど恩を返せば、グリムスター家に尽くしたと言えるのか──アーネストには分からなかった。ほとんどうろ覚えだが、アーネストは拾われたとき体のあらゆる場所が痛めつけられ、幽鬼のようにやせ細り、その癖くせ爛らん々らんと光る瞳で周囲を睨にらみつけていたのだという。

　そんな自分を、どうして彼らは育ててくれたのか。

　金持ち特有の気まぐれ──などという考えは、アーネストの頭にはまったく思い浮かばなかった。浮かんだにしても、常にそれは否定された。

　気まぐれなどという動機では、とても一人の命を支え続けられな

かっただろう。

　アーネストは思うのだ。

　どうあれ、自分はグリムスター家のために命を賭かけなければならない。

　それがたとえ、後天的に植えつけられたものでも構わない。熱狂の内に選んだ選択でも構わないと。

　同時に、たった一つだけ不安があった。

　単純かつ素そ朴ぼくな疑問。自分は何者なのかという他た愛わいないアイデンティティーの問題。

　アーネスト・ヒギンズは稀少種族──ワータイガーと人間のハーフである。

　それを知ったとき、グリムスター家とアーネスト（アーネスト自身も、ワータイガーであることを忘ぼう却きゃくしていた）は驚きと同時に「アーネストの過去を探ることができるのではないか」という期待もした。

　世界に最も早はや百人程度しか確認されておらず、ソレイシア南西の森でひっそりと暮らしているワータイガー。だが、はるばる呼び寄せたワータイガーの精霊使いシャーマンは哀しげに首を横に振った。

　──お前は我々の一族であると同時に、一族でない。

　──お前の過去など知らぬ。お前の父母がどこで生まれ、どこで育ち、どこで赤子を産んだかも知らぬ。

　──お前と共に暮らすこともできぬ。お前は都で育った者、我々のようには育っていない。お前は、我々に合わせることができない。我々も、お前に合わせることができぬだろう。

　──忠告だ、都で育った者。過去を追うな、追えば醜みにくい傷を暴かれる。そう占いに出ておる。

　つまるところ、アーネストの過去は誰にも分からないということだった。

　だが、シャーマンの占いを信じたアーネストは、それ以来過去を思い出そうとはしなかった。

　過去を思い出そうとしない以上、彼が目を向けるべきは現在であり、未来であった。

故に、彼はカレン・グリムスターの執事として生きる道を選んだ。

否いな、選んだというよりは縋すがったといってもよい。

自分にはこれしかない。

これしかないのだ。

ナイフを握り、己の獣性を以もって敵対する悉ことごとくを打ち破る。

アーネスト・ヒギンズはハーフ・ワータイガー。

人の姿と虎人の姿を併せ持ち、切り替えることができる男。

恐らく世界にただ一人しか存在しない、種族だった。

翌日。

レイジ・グリムスターは記者会見の席で深々と陳ちん謝しゃすると共に、目下全力で捜査中であることを告げた。

新聞には遺族（生存はほぼ絶望的と見られていた）の悲哀に満ちた発言と、憎ぞう悪おに満ちた発言が書き立てられた。憎悪の対象は言うまでもない。

グリムスター邸には、昼夜を問わず群集が押し寄せた。配備した警官も、その数に圧倒されてほとんど役には立たなかった。

レイジ・グリムスターは再び記者会見を開き、ディルビック号が消失ロストした海域に調査隊を派遣することを発表した。

数日経過して、レイジ・グリムスターは再び無念の発表をしなければならなかった。だが、今回の発表には悲しみよりも、戸惑いが含まれていた。

──ディルビック号調査隊もまた、謎なぞの失しっ踪そうを遂とげる。

調査隊は三つの小型船から形成されていたが、ディルビック号が消失した海域に到達した途端、暴風雨が吹き荒れ、三隻せきが消失した。

レイジ・グリムスターは苦々しい顔で、もう一度調査団を送ることを宣言した。

前回の倍の六隻に加え、軍から借り受けた潜水艦が一隻。

慎重に慎重を重ね、海域に到達──結論から言うと、全滅は免まぬがれた。小型船一隻、そして潜水艦一隻が生き残り、成果を発表した。

──あの海域には〝何か〟が潜んでいる。

──ディルビック号の沈没は、その〝何か〟が原因に違いないことは確かだ。

グリムスター社ではなく、潜水艦に乗り込んでいたトラップ大佐の発表であったことがその発表の信頼度を高めた。グリムスター社の責任を問う声は薄れ、代わりにその海域──いつしか、ディルビック海域と呼称されるようになった──が報道の中心に据すえられた。

聖せい導どう評ひよう議ぎ会かいのアジトでもあるのではないか、滅んだはずの怪物、巨人蛸クラーケンが原因かもしれない、あの海域の精霊が暴れているのではないか、いや、海賊バイキングの亡霊のせいだ──。

様々な意見が取り交わされたが、結論を出せぬままに数日が過ぎた。

────英雄暦１９３９年篭手月（７月）ノ**30**日

アーク・メリア連邦国テアマット軍事基地　第四会議室

五十名を収容できる会議室に居たのはわずかに三人の男たちだった。一人は頭が禿はげ上がっているが、その分豊かな髭ひげを誇示しているようなドワーフ。もう一人は黒いスーツを着込んで静かに煙草たばこを吸う細身のエルフ、最後の一人は軍服のあらゆる部分に勲くん章しようをぶら下げた白髪の巨漢だった。

「……サルベージするしかないだろうな」

細身のエルフが呟つぶやいた。

「サルベージできれば、の話だがな」

禿げたドワーフが応じる。エルフはちらりとドワーフの顔を見て、わずかに肩を竦すくめた。

「〝ガーゴイル〟は是ぜが非ひでも回収せねばならない、その事はよく分かるだろう？」

「言われなくとも分かっている。サルベージが可能かどうかが問題なのだ」

「──潜水艦」

「沈没したと思おぼしき場所を測定しなければならない、それから深海の底に沈んだであろうディルビックの内部に潜り込み、〝ガーゴイル〟を奪取する――どう見積もっても、全軍挙げての大規模な作業になる」

　それは即すなわち、世界に向かって高らかに『我々は秘密兵器をサルベージ中だ』と叫ぶのと同義である。

「それに、だ。我々の潜水艦で潜れる深海にあるのかどうかが、まず疑わしい」

　ドワーフの言葉に、エルフと人間が一いつ斉せいに目を向けた。

　彼は予あらかじめ広げていた地図の、赤十字のマークを指で示した。

「遭そう難なん信号を受け取った船の供きよう述じつからすると、ここらが沈没したと推定される箇所だ。周囲の水深は平均５００ｍモールというところだが、ここは浅く広い海かい溝こうも確認されている。つまり、我々の望むモノは１０００ｍモールの海底に存在する訳だ」

「１０００、だって？」

　エルフの男の顔が青ざめた。ドワーフの言わんとするところが理解できたらしい。

「我が軍の魔法付与済最新型潜水艦ＦＧＨ□１９３８の限界が５００ｍモールだ。それも、この水深で作業することなど考こう慮りよせずに、だ」

「１０００を潜って作業も可能な潜水艦は、我が軍には存在しない、と？」

「我が軍には、ね。海軍には未だに戦艦巨砲主義がまかり通っているせいか、潜水艦に力をさほど入れていないのだ。その事くらいは知っておいてもらいたいね」

「つまり、他国にはあるのか？」

「ソレイシア共和国に住む〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟ミスター・ワイズマンが個人で所有している潜水艦が、水深１２００ｍモールを越える海底で作業を行った。先日の報道だ、新聞を読まなかったのかね？」

「この状況下ではな」

「その技術を盗み出すか、我々の技術が追いつくのを待つか、あるいは──ミスター・ワイズマンの潜水艦を盗み出すか、だ」

「全て却きやつ下かだ」

　軍人が素そっ気き無く応じた。

「最初の選択肢しと最後の選択肢はあまりに危険すぎる、第二の選択肢はあまりに未知数が多い。水深１０００ｍモールに到達するのに、一体どれだけの期間を待たなければならない？　一年か、一か月か？　あるいは十年かもしれないのに？」

「そんな悠ゆう長ちようような時間はない」

　エルフの言葉に、二人は頷うなずいた。

「では、放置しておけと？」

「莫大な予算を注ぎ込んだ〝ガーゴイル〟を、放置する？　神が許しても、政府と予算委員会は許すまいよ。何しろ、対魔銃兵装計画アンチウオーロツクウエポンプロジエクトの要かなめだからな。遺失したでは済まされない」

「〝ガーゴイル〟には我々すら理解できない、ブラックボックスが未だ存在するがね」

「それを解決するために、あのプロトタイプαアルフアーが必要なのだ。数あま多たの失敗作の中で、あのαだけがどうにか実用に耐え得る存在となっているのは何故なのか？　どうにか手に入れなければ、我々に未来はない」

「いずれにせよ、どうにかして〝ガーゴイル〟を回収しなければならない。それは三人の共通見解ということでいいのかな」

　エルフの言葉に、二人が頷うなずいた。

「だが、迅じん速そくに回収するにはミスター・ワイズマンに縋すがるしかない」

　ドワーフは一呼吸置いて続けた。

「彼は必ず目的を問い質ただすだろう。彼の目の前で堂々と震えることなく、嘘をつける自信があるかね？」

　三人が身震いした。

〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟に虚きよ言げんを弄ろうし、利用

する――幼い頃から刻まれた、彼らへの畏敬の念は、早々簡単に捨て去れるものではない。

「つまり、我々としては『正当な目的を以って、ディルビック号から〝ガーゴイル〟をサルベージすること』が求められる」

「正当な目的？　ミスター・ワイズマンがそれを秘密にしていてくれるとは思えんが」

　軍服の男はかぶりを振った。

「順を追って話そう。グリムスター造船会社は、ディルビック号の所有者であるレッドライン社と共同で第三次調査船を派遣することを発表した。彼らの深海調査に、我が軍も加わることにする」

「加わるだけか？　彼らとて、深海で〝ガーゴイル〟をサルベージする技術はあるまい」

「政治家を通して、ミスター・ワイズマンへの仲ちゆう介かいを図ろう。そこに『潜ることが可能な技術』がある以上、彼らは必ず潜水艦の貸たい与よを希望する」

　確信に満ちた表情と言葉に、二人は顔を見合わせた。

「ミスター・ワイズマンが拒絶する可能性は？」

「仮にも英雄たる者が民衆を見捨てると思うのかね、君は？」

　その言葉に、エルフの男は肩を竦すくめた。

　軍服の男が続ける。

「つまるところ、我々の危機はグリムスターとレッドラインが原因でもある。彼らにも、責任は取ってもらわねば、な」

「人選は？」

「そちらは君に任せよう。最適な人材を選出してくれると、期待している」

　軍服の男はそう言って立ち去り、ドワーフも椅い子すから立ち上がると会議室を退出した。

　後に残ったエルフの男は、煙草たばこを指に挟みながらサルベージに最適な人材を考え始めていた。

◇

――――英雄暦１９３９年篭手月（７月）ノ30日

何処とも知れぬ教会

　集まった者たちは、全員黒いローブに身を包み、顔はフードで覆おおい隠していた。

　誰も彼も、己の顔を知られたくなかった。できれば名前も知られたくなかった。さらに言うのであれば、わざわざこのような集まりを開きたくもなかった。

　彼らは聖せい導どう評ひよう議ぎ会かい――〝不死の王ノーライフキング〟に魂たましい全てを捧げることを誓ちかった狂信の徒たちだ。

「――さて。我々を呼び出したのは誰だ？」

　一人が言った。呼び出しの重要度は最高のものだった。即すなわち、この呼び出しに応じないということは、ほとんど聖導評議会に叛はん旗きを翻ひるがえすに近いものだ。病気や怪け我がも言い訳にならない。

「私ではない」

「俺でもない」

「ボクだよ」

「私では――待て、今のは誰だ？」

　その言葉に応じることなく、一人が立ち上がってフードから頭を出した。メドラビット、と誰かが呟つぶやく。

　あどけないショートカットの少女が、笑顔で周囲を見回していた――もっとも、眼前のメドラビットの真の年齢など、推し量れるはずもなかったが。

「どうも、皆さん。初めまして。聖導評議会総本部、連絡役のマグダラです。ふふふ、驚いた人も何人かいるみたいですね、ごめんなさい」

　コロコロと笑うマグダラに一同は戸惑いと警戒を隠さない。

「む、ひょっとして信用されてませんか、ボク？　じゃあ、これならどうかな」

　ローブのポケットから、彼女は円盤状の物体を取り出した。呪文スペルを二節唱えた瞬間、彼女の矮わい軀くを越える大きさに膨ふくれ

上がる。

　既に、その時点で魔法の心得のある幾人かは彼女が持つモノの正体に気付いていた。

「おお、あれは──あれこそは、〝朽ち果てし神の戦器エメス・トラブラム〟！」

「大当たりー。コイツの名前は〝惨劇の水晶体レビスタル・シエラ〟。ねえねえ、せっかくだから。誰か、威力を己の身で体験したいって気の毒な人、いない？」

　ざわついていた一同が瞬間的に静まり返った。マグダラは「むぅ、残念。脅おどしすぎちゃったかな？」などと呟つぶやきつつ、〝朽ち果てし神の戦器エメス・トラブラム〟を縮小させてポケットにしまいこんだ。

　マグダラは咳せき払ばらいを一つ、声高らかに告げる。

「総本部からの伝達です。〝ガーゴイル〟を何としてでも手に入れろ、以上っ」

　その言葉に、周囲は再びざわつき始めた。

　〝ガーゴイル〟──アーク・メリア連邦国陸軍と、国家中央情報局ＮＣＩＡが共同で開発した魔銃に対抗するための兵器。

　天才的銃職人ガンスミスであるリチャード・アーバレストが開発した魔銃は、今や世界を席せつ巻けんするに至った。無論、魔銃が開発された当初からそれに対するための兵器もいくつか考案されていたが、いずれも成功とは言い難い。

　だがしかし。

　その唯一の成功例と言われているのが強化型全身鎧リーインフォースドスーツアーマー──〝ガーゴイル〟だ。

　恐るべき運動性と、強きよう靭じん性を兼ね備えたその鎧よろいは魔銃の弾丸を撥はね返し、見事に射しゃ手しゅを打ちのめしたという。

　ところが、その〝ガーゴイル〟が最後に確認されたのは沈没したディルビック号の金庫室だ。深海１０００ｍモールから〝ガーゴイル〟を奪取するのは不可能に近い。



「〝ガーゴイル〟を手に入れることができたならば、『秘ひ蹟せき』を授けてもいい、と」

　その言葉に一同がざわついた。

　秘蹟──聖せい導どう評ひょう議ぎ会かいが擁ようする具体的な神の力である。

　聖導評議会にエル・アギアスの禁忌タブーはない。むしろ、エル・アギアスが忌み嫌うものこそが、〝不死の王ノーライフキング〟にとっての御み業わざとなる。

　たとえば、彼は忠実な信徒にとって大切な人を蘇よみがえらせた。

　たとえ幾年経とうとも、たとえ魂たましいがこの世から消え去っていたとしても、連れ戻し、肉体に戻らせた。

　たとえば、彼は忠実な信徒に若さを取り戻させた。

　九十まで生きた老人に、二十の若さを取り戻させた。そればかりではなく、〝不死の王ノーライフキング〟に忠誠を誓ちかい続けるという条件下で、二十の若さのまま、五百年を生き続けた。

　たとえば、彼は心を操った。

　信徒の想い人に、あるいは束ねるべき部下たちに、狂乱の忠誠を誓わせた。

　つまり〝不死の王ノーライフキング〟の秘蹟とは──神がのたまう倫理や道徳、規律というものを、真っ向から切り捨てるものだった。

　マグダラは続ける。

「噂うわざじゃ、第三次調査船をグリムスター社がまた出すらしいですよ。今回は、ワイズマンが所有している潜水艦も担かつぎ出すらしいから、ＮＣＩＡとしても〝ガーゴイル〟を引き揚あげる気みたいじゃない？」

　その情報の真偽は問うまでもない。幹部たる彼女がそう告げる以上、それは紛まぎれもない事実なのだ。

「じゃ、みんな頑張って下さいね。そして、ボクみたいに不老不死になろう！」

虚言なのか、真実なのか分からぬまま──信徒たちは頷うなずいた。

「あ、言うまでもないけど、ボクの手は借りない方がいいよ、ボクこれ以上手て柄がらが増えても欲しいもの、あんまり無いんだよね。心を操ってどっかの小国で殺し合いやらせるとかさ、そんなの位しか思いつかないし」

マグダラ──最も早はや、誰も見た目通りの年齢とは認識していない──はケラケラと可お笑かしそうに笑ったあと、手を振って夜闇に消えていった。

後に残された信徒たちは、早さつ速そく誰を向かわせるか決定するために話し始めた。重要なのは任務を確実に遂すい行こうすることだ。秘ひ蹟せきはもちろん、欲してやまないものだ。だが、秘蹟欲しさのあまり、我が欲よくを元に作戦を構築してはならない。

そんな作戦は必ず瓦が解かいする、そして──我欲への罰ばつが下されるだろう。

信徒は己の欲を封じ、綿密な話し合いの末に人材を選出した。潜水艦に搭とう乗じようする信徒と、海上で回収する信徒を。選ばれた信徒たちは立ち上がり、フードを脱いで顔を見せた。

「それでは──下僕われらに、王の加護があらんことを」

「王の加護があらんことを」

唱和。それが終わった途端に、信徒たちは一人、また一人と立ち去っていった。

最後に一人、潜水艦に搭乗するために選ばれた信徒が残った。

「ふーん、アナタが選ばれた人なんだね？」

唐突な声。消えたはずのマグダラが、再び姿を見せていた。……恐らく、ずっと見張り続けていたのだろう、気配も感じさせずに。

「はい」

淡々と応じる信徒の声に、動どう揺ようは欠片かけらも見当たらない。朽くちた教会で二人、マグダラとその信徒は向かい合っている。

「ま、人選は正解かな。君以外の信徒が選ばれていた場合、我欲で眼を濁にごらせたと判断して全員の首を掻かき切ったところだったけど」

──ならば、危ないところだったか。

信徒が吐いた安あん堵どの息を見て、マグダラはゾッとするような蔑さげすみの表情を浮かべた。

「何、勘違いしているのさ？　君は今から、任務に携たずさわるんだよ？　言うまでもないけど、状況から考えて失敗は即、死に繋つながる。そこらへん、分かってるの？」

信徒は、わずかに恐怖した。だが、恐怖以上の高こう揚よう感があることもまた否定できない。

「死は、素晴らしい」

彼の答えに、不機嫌そうだったマグダラはころりと機嫌を変えた。

「そうだね。うん、自己にせよ他者にせよ、死は素敵だ。ボクたちにとって他者の死はご馳ち走そうだし、自己の死は救いだからね」

「無論、失敗はしません」

「激励に、頰ほおへキスでもしてあげようか？」

信徒は苦笑しつつ、頷うなずいた。

マグダラがそっと近づき、頰に唇を寄せる。そのまま舌を突き出し、頰を舐なめた。

熱い吐息がかかり、ぬらりと頰が濡れる。信徒の耳元で、マグダラが囁ささやいた。

「王の為に、全てを捨てろ──いいね？」

冷れい酷こくな響きであり、情の欠片かけらも見当たらない口調だった。

人として生きてきた全てを捨て去れと、全てを裏切れと、マグダラはそう言っているのだ。

信徒は──頰肉を歪ませた笑みを浮かべて、頷うなずいた。

「無論です、マグダラ様」

悲しみではなく、歓喜があった。

信徒が抱いたものは、ただそれだけだった。

「いい子だ。それじゃ、ボクの力を少しだけ分けてあげる」

　少女はそう言って、信徒の耳に舌を差し込んだ。

　第三次調査隊を出そうとしたレイジ・グリムスターの計画は、困難を極めた。

　反対するレッドライン社曰いわく、既に、〝何か〟が存在することは間違いない。調査は難しい、あの海域はアーク・メリア連とニヴェンで侵入禁止区域に制定された──それでいいではないか、と。

　レイジは粘ねばり強く交渉を続けていたが、このままではグリムスター社のみで調査船を出さねばならないだろう、と失望していた。

　そして、レイジは人員の募集を開始したが、社員も含めて誰一人として志願する者はいなかった。船乗りはディルビック海域の恐ろしさをその肌で理解しており、どれだけ高額の報ほう酬しゅうを積まれても、行くと言い出す者はいなかった。

　居たとしても、報酬は前金で支払えなどと言い出し、明らかに報酬だけを狙った詐さ欺ぎ師しまがいのような者だった。

　ディルビック海域──沈没したと思おぼしき場所から、周囲10ｋｍセツトは航海禁止となり、周囲を沿岸警備隊が昼夜問わず見張っている。迂う闊かつな船が、その海域に入り込まないように。

　レイジ・グリムスターはとある友人から、こう言われた。

「良かったじゃないか、君の船が原因じゃないことは分かって。あの海域が危険だった、たまたまディルビック号はそこに行ってしまった、ただそれだけさ」

　そう言われて臓はらわたが煮えくり返ったが、曖あい昧まいな笑みを浮かべて誤ご魔ま化かした。

　このままで良いはずがない、とレイジは思っている。なるほど、自分の船の構造的欠けつ陥かんでないらしい……だが三千人の乗客と乗組員は、あの船に己の人生を託したのだ。

　死んでいることは明らかだ、そんな事は理解している。大切なのは見つけることだ、彼らの存在を、そして無念を。

　だがしかし。

　その方法が無かった。

「……どうすればいい？　私はどうすれば許される？」

　レイジは屋敷に戻って、そう言い続けた。ペールが「あなた、顔色

悪いわよ。……お願いだから、少し休んで下さい」と心配げに告げたときも、曖あい昧まいな返事しかしなかった。

　レイジの思考はぐるぐる回る。誰もが己を愚ぐ者しやだと哂わらっているような気がする。あの海域はそっとしておくべきだと、そう言われている気がする。

「ああ……造るべきでは、なかったのか」

　目を覆おおい、顔を伏せるレイジ。寄り添うペールもまた、涙を浮かべている。

　レイジが苦悩している様子を、カレンはドアの隙すき間まからひっそりと見つめていた。父に気付かれぬようそっと部屋に戻り、ごろりとベッドに横になる。アーネストがわずかに顔をしかめた。はしたないとでも思ったのだろうか、だが今のカレンにそれに構っている余よ裕ゆうはない。

　父の苦悩は、何とはなしに理解できる。

　船の構造的欠けつ陥かんであるならば、それはグリムスター社の責任であり、レイジの責任でもある。

　テロであるならば、そのテロを起こした組織の責任があるだろう。

　事故であるならば、天を呪い、弾だん劾がいするしかない。

　だが──〝何か〟とは何だ？　怪物か？　精霊か？　それ以外の何かか？

　それが如い何かなる方法で、あの最高の技術と堅けん牢ろうさを誇った船を沈めたのか？

　それが分からない限り、三千人の命は永遠に宙に浮き続けるのだ。

　カレン・グリムスターもまた悩んでいた。「自分には関係ない」──そう言うことができれば、どれだけ楽かとも思う。いや、言えるのだ。だがそれを選んだ瞬間、自分はグリムスター家の令嬢である資格を失うことになる。

　──責任放ほう棄き、厭いやな言葉だ。

「アーネスト」

「はい」

　カレンはベッドに横になったまま、虚空を見つめてアーネストへ尋

ねた。

「私が考えていること、分かっちゃったりする？」

アーネストはわずかに沈黙。大きく息を吐いて、おずおずと告げた。

「……たぶん、ですが」

「そう」

カレンはぼんやりと天井を見上げている。最初は突とつ拍ぴよう子しもないと思えた考えが、少しずつ固まってきていた。

カレン・グリムスターは冒険家アドベンチユラーである。船乗りではないが、船に乗った経験、船を操った経験も当然ながら存在する。

「……お供して、よろしいですか？」

アーネストの言葉に、カレンはしばし沈黙して彼を見つめた。

これまで自分の我わが侭ままに散々つき合わせていたが、この『冒険』だけは連れて行きたくない。カレンは無性にそう思った。

何故ならこれは冒険家アドベンチユラーとしてではなく、グリムスター家の娘としての義務だからだ。

だが、アーネストは必ず自分についていこうとする。

カレンにもそれが分かっていた。ほんの少し哀しげに俯うつむき、申し訳ないという感情を篭こめて彼女は頷うなずいた。

「…………うん、お願い」

アーネストは安あん堵どの表情を見せていた。カレンは、その表情に奇妙な罪悪感を抱いた。彼を体ていよく利用しているのではないかという疑念。それが事実であったとしても、アーネスト・ヒギンズは受け入れるであろうという確信。

この屋敷に引き取られる前の記憶がない男。

己の過去を詮せん索さくしない方がいいと警告された男。

それゆえに、自分が執事バトラーであることに固執する男。

ならば、自分はそれを利用するあくどい女だ──カレンはそう、自己分析している。

　それでも。

　カレン・グリムスターはアーネスト・ヒギンズについてきて欲しかった。力が必要だからではない、雑用を任せたいからでもない、傍にいて欲しかった。目の前から居なくならないで欲しかった。

「さて！　それじゃお父様の元へ向かいましょう。反対されるとは思うけど、是ぜが非ひでも説得しなきゃならないわね」

　むくりと起き上がり、カレンは己の頬ほおを二度叩いた。

　自分の気持ちは決まっている。

「悩むことはないか、私はグリムスター家の人間なんだから。果か敢かんに冒険あるのみ！」

　そう言ってカレンは部屋を飛び出し、真っ直ぐに父レイジが苦悩している書しよ斎さいへと向かった。

　ドアノッカーを乱暴に叩くと、樫かし木きで出来た扉越しに微かな声が届いた。

　扉を開き、母がいないことを確認する。母がいると、まとまる話もまとまらなくなりそうだったので、安心というところだった。

「お父様、お話があります」

「うむ。……急を要するのかね？」

「はい」

　レイジはやれやれとため息をつき、部屋に入るよう促うながした。アーネストは扉の前で待機する。

　漏もれ聞こえる声は、どちらも激げつ昂こうしているようで──話は長引きそうだと、彼は思った。

「何だと⁉」

「もう一度言います、お父様。私を調査メンバーに選んで下さい」

「ふざけるな！　そんな真ま似ねができるか！」

「何故ですか？」

「私の娘だからに決まっているだろう！」

「ですが、私はお父様の娘であると同時に〝冒険家アドベンチユラー〟でもあります！」

「……」

「危険は承知です。ですが、私はグリムスター家としての責任もあります。お父様が、本当に三千人の命に責任を感じているのであるならば、私を行かせて下さい。沈没の原因を、必ず突き止めてみせます」

「……ぐ、む……」

「無論、私一人では頼りないと思います。ですから……私の友人で、一流の腕を持つ者たちも呼んでみせます。船乗りが集まらないのであれば、船乗りより優れた冒険家アドベンチユラーを招しよう聘へいすべきです」

「だが、何もお前が行かなくとも……」

　カレンは首を横に振った。

「私はお父様の代理とお考え下さい。グリムスター家の人間として、これ以上の責任の取り方はないのでは？」

「……」

　レイジ・グリムスターは苦い顔をして、正論を述べるカレンを見やった。自分には調査に向かう体力も、技術も持ち合わせてはいない。行ったところで足手まといになるだけだ。

　だが、カレンであるならば。

　あのルイス・マクレーン教授が「才能がある」と見込んだカレンならば──どうにか、してくれるのではないか？

　そういう期待感は決して否定できるものではなかった。

　三十分以上、レイジは唸うなり続けた。そうして、ようやく搾しぼり出すように告げた。

「いくつか条件がある。それを飲めば、許可してもいい」

「どうぞ仰おつしやって下さい」

「一つ目。まず、海域に関する資料を読んで綿密な計画書を私──いや、グリムスター社に提出しろ」

「それはもちろんです」

「二つ目。ルイス・マクレーン教授が反対した場合、計画は全て廃はい棄きだ」

「……分かりました」

「三つ目。撤てつ退たいを恥はじと考えないで欲しい、何らかの形で犠ぎ牲せい者しやが出た時点で撤退しろ」

「はい」

「四つ目。これはお前に対する条件ではない……もし、お前が死んだ場合の話だ」

「……」

「私も、娘の命を犠牲にした責任を取ることにする」

　カレンの目が見開く。まさか、そんな。

「お父様！」

「これは私が私に課した条件だ。お前があの海域に挑もうとする限り、私もまた己の頭に銃を突きつける」

「……」

「承しよう諾だくしてくれるかね？　できなければ、お前の提案はなしだ」

　カレンはしばし逡しゆん巡じゆんした。今や、彼女の命は彼女だけのものではなくなった。愛すべき父親の命をも、その双そう肩けんに載せろというのだ。

　震える拳を見て、レイジは少し後こう悔かいした。ひょっとすると、あまりに意地が悪い提案だったかもしれない。だが、レイジはカレンが本気であの海域に挑むと言っている以上、自身の命も本気で投げ出すつもりだった。

　カレンもまた、先ほどのレイジと同じように三十分以上苦悩し続けた。

　やがて、拳こぶしの震えが収まるとカレンは真っ直ぐレイジの瞳を見み据すえた。

　悲哀の感情と共に、ある種の覚悟を秘めた瞳だった。その瞳を見た瞬間、レイジは悟った。頷うなずく必要すらなかっただろう。

「全て、了解しました。お父様の命、私が預からせて戴いただきます」

「怖いかい？」

「…………はい」

「それでいいのさ、カレン。私をよろしく頼むよ」

「はい……」

「人員を集めてくれ。私の方ももう少し各所にアプローチしてみる」

　レイジはひょいとカレンの頭に手を載せた。

　カレンは思った──節くれだった父の手は、自分の思った以上に小さかった。子供の頃は、自分の頭がすっぽりと嵌はままったような感覚さえ抱いたのに。

　レイジは思った──自分の手が小さくなったのではない、カレンが大きくなったのだ。彼女は今や、自分に意見できるほど立派な大人であり、彼女の命は彼女のものなのだ。

　万ばん感かんの想いを抱き、レイジはそっとカレンの頭から手を外した。

　書しよ斎さいの扉を開き、かたわらに佇たたずむアーネストに告げる。

「アーネスト、頼みがある」

「……はい」

「娘についていってくれ。あの娘を、守ってやってくれ」

「……もちろんです」

　無骨な男の表情は、些いささかたりとも揺らぐことはなかった。

　──それからレイジはペールにカレンの決意を話し、泣きじゃくる妻を説得した。

　交渉を再開して数日後、レッドライン社の態度が一転した。

　ある条件下でならば資金供出を約束するという申し出に、レイジは困惑しつつもそれを承しよう諾だく。

条件は二つ――一つ目は、レッドライン社が指定した十二人を、必ず調査船のメンバーに組み込むこと。十二人の経歴を見て、レイジはこれならば（これが真実の経歴であるならば、だが）問題あるまいと判断した。

もう一つの条件が問題であり、レイジは困惑を隠せなかった。

巨人ジヤイアントの〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟、ワイズマン六十三世が所有する最新鋭の潜水艦を借り受け、それで調査に向かえ――というのだ。

英雄暦１９３９年――純粋な技術では、せいぜい１００ｍモール潜るのが限界だった潜水艦は、船せん舶ぱくに対する魔法付与エンチヤント技術の伸長に合わせて劇的な発展を遂とげていった。

人造の精霊によっての出力を安定させる精霊封印式エレメンタルシールスタイルと呼ばれるエンジン。船体の耐久力を劇的に高めたミスリルと鋼はがねの合金素材、外部の衝撃から船室を保護する〝要よう塞さい構築〟と呼ばれる魔法。人間の吐いた二酸化炭素の組成を変換し、酸素に戻す錬金術の亜あ種しゆ魔法、エトセトラエトセトラ――。

それらの魔法や鉱物は、潜水艦の最大水深を一気に五倍。即ち、５００ｍモールまでに押し下げた。

ワイズマン六十三世は私費を投じて、潜水艦の改良にいそしみ――先日、試験潜行で１２００ｍモールを突破したと世界に発表した。

その潜水艦こそが〝イエスラス〟である。

現在、世界で１０００ｍモールの深度に挑むことが可能な潜水艦は彼の所有しているものだけだ。レイジの望み――海域の謎なぞを解くためには、必要な存在であることは間違いない。

だが、所しよ詮せんは一企業の社長に過ぎぬレイジにとって、〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟たるワイズマンは雲の上の存在だった。

はてさて、どうやって交渉すべきか――と考えていると、意外にも簡単に話が進んだ。まず、レッドライン社が献金している政治家が、アーク・メリア連邦国の〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟、セルマ・フォルテンマイヤーに連絡を取った。

次に、潜水艦を借り受けることに同意したセルマによってワイズマン六十三世へと連絡が届き――ワイズマンは「調査をする者たち全員で、ソレイシアまで来なさい」と返答したことで、レイジはますます

根気強く乗組員を探さなければならないことになった。

　カレンは知ち己きである冒険家アドベンチユラーに片かたっ端ぱしから連絡していた。彼らの反応は鈍かったものの、何人かは話を聞くだけ聞いてみる━という返事を貰もらうことができた。

　ディルビック海域の恐ろしさは相当に広まっているようで、カレンは期待外れの反応に酷ひどく落胆した。

　そんな折だった━ルイス・マクレーンがグリムスター邸を訪れたのは。

「教授！」

　来ることを知らされていたカレンは、アーネストに案内されてきたルイスに飛びついた。

「どうやら苦戦しているらしいね、カレン？」

　彼は、そう言って笑いながら彼女の頰ほおを撫なでた。

　艶つややかな金髪と引き締まった体たい軀く。そして、尖とがった耳。手には愛用のパイプを持っており、それを時折口に咥くわえて煙を吹かせている。

　若いように見える━とはいえ、エルフである以上、見た目通りの年齢でないことは明らかだ。

　ルイス・マクレーン━タクピカル国立大学、考古学教授であると同時に世界トップクラスの冒険家アドベンチユラーでもある。彼の論文が世に出るたびに、世界史が書き換わるとまで言われている。

　そして、カレンこそはルイスにとって最後の愛まな弟で子しである。

「はい。あの、教授がここに来たということは……期待して、いいのですか？」

「もちろんだとも、カレン。こんな老いぼれでよければ、遠えん慮りょなく雇ってくれたまえ」

　その言葉に、カレンは目を輝かせた。

「もちろんです！　ああ、良かった！　教授にまで断られたら、アーネストと二人で海域に挑むところでした！」

　それは無む謀ぼうだな、とルイスは微ほほ笑えんでカレンの頭を撫

なでた。

「私の弟子たち──つまり、お前の兄弟子たちにも当たってみたかね？」

「はい……あ、でもフィールタン兄弟にはまだです」

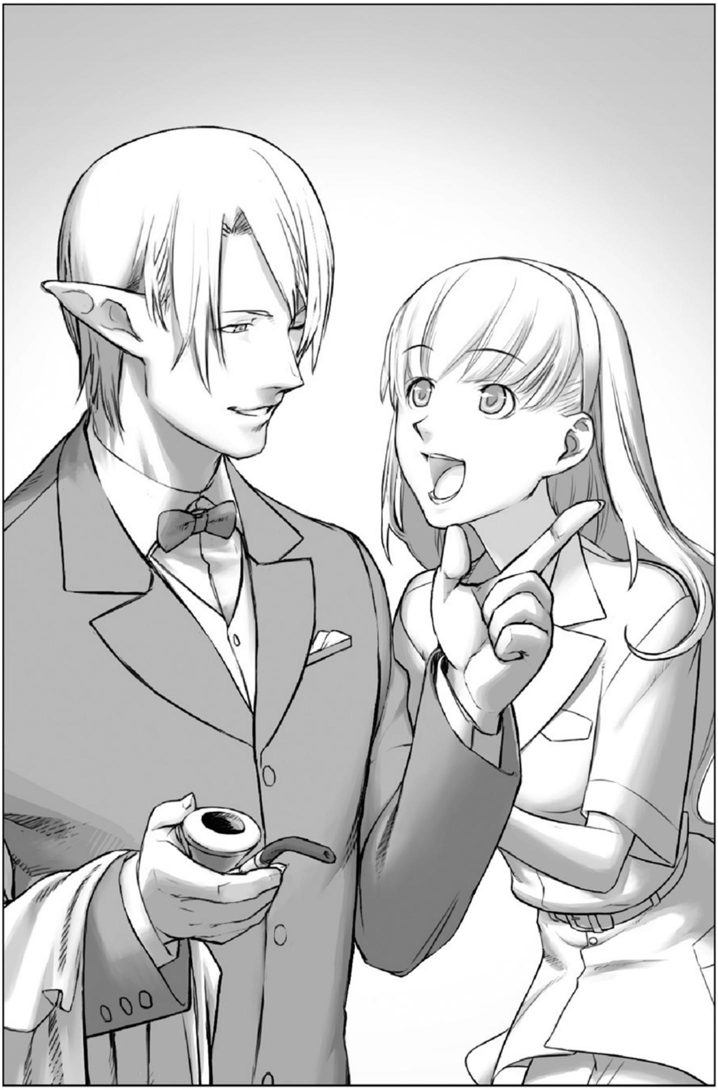
　ルイ・フィールタン（兄）とベルベット・フィールタン（弟）──ゴブリンの冒険家アドベンチユラーであり、カレンが弟子入りする少し前のルイス教授の弟子だ。

「あの二人ならば、承しよう諾だくしてくれると思う。私ももう一度交渉してみよう、先行き短い老人の頼み……と言えば、彼らも気が咎とがめるだろう」

「ふふふ……教授ってば悪い人です！」

　そう言ってカレンとルイスはくすくすと笑い出した。

「それじゃァーネスト、教授を客室に案内してちょうだい。私はフィールタンと連絡を取ってみます！」



「ああ、頑張りたまえ」

　ルイスが言い終わらない内に、カレンは自室へ走って戻っていった。アーネストは無言でルイスのカバンを持ち上げ、「こちらへどうぞ」と告げた。

「アーネスト。君も久しぶりだな」

「……はい、教授」

　ぼそぼそと喋しやべるアーネストを見て、ルイスは苦笑した。

「もう八年になるのか。あの時の少年が、こうして私の荷物を運んでいる場面を見ていると、不思議な感覚に陥おちいるよ」

「その節は……お世話に、なりました……」

　淡々と、まるで言葉を発するのも億おつ劫くうだというような口ぶりでアーネストはそう応じてから、どうにも小心者の己を嘆なげいた。別に億劫なのではない、思いつかないだけだ。グリムスター家以外の者と話すときは、たとえ長い付き合いであるルイスといえども、緊張してしまうのが常だった。

「気にするな……さて、と。私の教師としての権威が、まだ弟子たちに通じるといいのだが……」

　ルイス・マクレーンは窓を開けて、口笛を吹いた。

　彼の呼びかけに応じて、待っていたらしい白色の鴉からすが舞い降りる。アーネストはすぐにセロ、と呼ばれているルイスの使い魔であることを思い出した。

　そう、ルイスは魔法使いとしてのライセンスも会え得とくしているのだ。もっとも、魔法を極めよう、という訳ではなく、冒険に便利な魔法を覚えている程度のものだが。

「セロ、すまないが連絡係を務めてくれないか？　場所はタクピカルの──」

　セロは頷うなずき、すぐさま飛ひ翔しようした。

「対象を追跡できる分、電話より確実なんだ──まあ、少々遅いのと一方通行にしか連絡を取れないのが不便だがね」

　なるほど、とアーネストは頷いた。残念ながら、アーネストに魔法の才能は無かったらしく、弾丸を召しよう喚かんするための契約を結

ぶことすらできなかった。

　仕方なく、彼は主としてナイフを武器にしていた。もっとも、彼の扱うナイフはほとんど鉈なたに近いほどの大きさだったが。

「それでは、しばらくはここで休んでいる」

「はい。何かあれば、いつでもお呼びください」

　アーネストは深々と頭を下げた。そんな彼にルイスが声を掛ける。

「ところで、ディルビック海域には──アーネスト、君も行くのかね？」

「……はい、私もカレンお嬢様と共に」

「そうか、君が居れば心強い」

　その言葉に、アーネストはわずかに戸惑った。

「私などが、お役に立てるとは思えませんが……」

「さて、それはどうかな。何しろ未知の海域だろう？　そして、そこに潜む〝何か〟……君の力が役に立つかもしれん」

「……お役に立たせていただきます」

　そう言って、アーネストは部屋を退出した。ルイスは彼が立ち去った後、苦笑いを浮かべながらかぶりを振った。

「内気なところはまるで変わってないなァ。外見と内面があそこまで違う男も珍しい」

　ルイスの頭では、彼はいつまで経っても気弱な少年というイメージが付きまとって離れていなかった。最初に出会った頃は、それはもう兇暴だったのだが……あれは、孤独に生きてきた者特有の防衛反応だったのかもしれない。

　ルイスはしばし目を閉じ、神経を集中させた。眼前に、馴な染じみ深い男の顔が見える。

　口を開く、今頃向こうでも自分の使い魔が口を開いているだろう。

「久しぶりだね、ホロウスキー君。さて、いよいよサービスした単位の恩を返してもらうときが来たぞ？　ああ、もちろん君が断った場合はその単位はなかったことにする。十年ぶりに大学に通う日々も良いものじゃないか？」

そんな言葉で始まった交渉は、実に円滑スムーズに進んだ。

一方、カレンは早さつ速そくフィールタン兄弟に電話を掛けていた。幸運なことに、彼らは冒険の旅に出かけていたりせず、自宅でくつろいでいたところだったらしい。

「──なーるーほーどーねー」

「それで……その、どうですか？　ミスター」

カレンは受話器を強く強く握り締めている、やってきたアーネストにも気付いていないらしい。アーネストは、そんなに力を篭こめて握っていると受話器が壊れてしまうのではないか、とハラハラしていた。

「いいんじゃないかしら？」

背後から男の声が聞こえる。ゴブリン特有のくぐもった低いガラガラ声だ。まあ、受話器越しに聞こえるどちらの声も大差ないのだが。

「──まーあーねー。いいんじゃないか、だってよー」

「いいでしょう、ねえ。カレンの元気な姿も見ておきたいわ、兄さん」

「わーったよ。じゃ、いーくーぜー」

ガチャリと電話が切れた。

「どう、でしたか？」

アーネストのおずおずした問いに、カレンはひまわりのような笑顔を輝かせた。

「来てくれるって！」

そして、三日後にフィールタン兄弟が到着し──さらに、数日経ってからルイス・マクレーンの門弟や知り合いの冒険家アドベンチユラーが次々と集まってきた。

かくして、レイジ及びレッドライン社が集めた十二名と、カレンとルイス、そして二人が集めた五名が調査隊メンバーとして選び出され、ソレイシアへと出発した。

◇

────英雄暦１９３９年甲かつ冑ちゆう月づき（８月）ノ５

　ソレイシア共和国──かつて〝帝国〟と呼称されたこの国家は、破滅戦争フアタルウオーの後、植民地が次次と独立し、かつて世界に権勢を誇った姿は今はもう見るべくもない。

　とはいえ、近年になってようやく共和国としての政治・経済活動が軌道に乗り出し、長い不況から脱出したばかりであった。

　飛行機を降りた途端、肌寒い風が全身を包み、やや薄手の服だったカレンを含む何人かが身を震わせた。アーネストは、元々体温が高いせいか、特に寒いとも思えなかった。

　だが、主は寒そうだったので念のために持ってきたコートを差し出した。

「ありがと」

　分ぶ厚あついコートを羽織ると、芯しんが凍りそうな寒さはすぐに消えた。チャーターしたバスに全員で乗り込み──何人かは緊張のあまり、声も出せないらしい──一路、ワイズマン六十三世が住む屋敷へと向かった。

　身長と体重がおおよそ人間の五~六倍程度という巨人種ジヤイアントをゴルトロックで見る機会はそう多くはない。ゴルトロック全体でも一千人程度しか存在せず、アーク・メリア連邦国だとオセロットシティに十数人、カレンたちが住むダウンロッドでも三十人程度が住んでいるだけだ。

　そしてワイズマン──ジャイアントには、常に姓しか存在しない。たとえば『ボナパルト』という名前のジャイアントが居るならば、父親もボナパルトであり、妹もボナパルトだ。ただ、さすがにそれでは日常生活において多大に不便なので、大抵は~世、というように先祖から何代目かを数え続けている。

　それに加えて、男性の場合は『ミスター』、女性の場合は『ミス』、自分の父には『偉大なるグレイト』などをつけることで、呼こ称しようを成立させている。

　バスに乗って二時間も走っただろうか、カレンは飛行機の疲れかアーネストの隣でうとうととまどろんでいた。アーネストも若干の眠気があったが、それよりは外の景色に目を奪われていた。

　バスの左右に鬱うつ蒼そうと生い茂っているのは、高く黒い森だった。ルイスの説明によると、この生い茂る樹木の名は『巨王の樹』。かつてジャイアントたちだけの国家が在ったとき、彼らの王

がこの樹を植えたのだ、という。

「もっとも、単なる伝説に過ぎないと私は睨にらんでいるが……ミスター・ワイズマンの前では間違っても言ってくれるなよ？」

　ルイスはそう言って笑った。なるほど、巨人の王が植えた樹というのは浪ろ漫まん溢あふれる話だが、真実はそう面白くもない話だ、ということか──とアーネストは頷いた。

「実際には肥ひ沃よくな土ど壌じようと樹の特性の問題なのさ。あの樹は、他の樹と根を繋つなぎ、互いに栄養を共有する。お手手を繋いで、みんなで仲良くにょきにょき育ってしまった、と。だから、この森林はこれ以上増えることはない、切り倒されない限りは減りもしないがね」

「なるほど……」

　アーネストが興味深そうに頷うなずくのを見て、ルイスは満足げな笑みを浮かべた。

「さて、カレンを起こしてやってくれたまえ。どうやら、到着したらしい」

　アーネストは、その言葉に少し体を傾けて、正面の光景を見た。

　彼が見た屋敷の中で、もっとも豪ごう奢しやだったのはオセロットシティ、スケイルエリアに存在するフォルテンマイヤーの屋敷だったが、ワイズマンの屋敷はそれ以上の大きさだった。屋敷は明らかに巨人サイズのそれが中央に、その右側にこぢんまりとした──充分に巨大だが──人間サイズの屋敷があった。そして、それらの背後には広大な海が広がっている。ソレイシアとアーク・メリアの間に広がる海だ。

　特に目についたのは正門を潜くぐり抜けた先にあった玄関の扉だ。

　巨大だった。鉄で出来ているらしいその扉は、ジャイアントが潜り抜けるために作られたものらしく、とてつもない圧迫感をアーネストたちに与えていた。

「……凄すごいわねぇ、この扉！」

　ただ一人、カレンは浮かれたように飛び跳ねていた。カンカンと鉄てつ扉ぴを拳こぶしで殴なぐり、早く開かないかとばかりに催促している。

「……アーネスト。カレンを落ち着かせなさい」

　ルイスが苦笑混じりにそう言った。アーネストはカレンを背中から

抱きとめて、「落ち着いて下さいお嬢様」と言いつつ、後ろへ下がらせた。

「早く開かないかしら――――って、あれ？」

　キィ、という小さな音と共に鉄てつ扉ぴのそばの小さな扉が開いた。小さな、と言っても要するに人間サイズの扉なのだが、巨大な扉に目を奪われていてこちらに目を向ける者はあまりいなかったようだ。

「お待ちしておりました。皆様、こちらからどうぞ」

「あ――はい」

　ガックリと肩を落とすカレン、そのあまりの落らく胆たんっぷりにアーネスト以外の全員が笑いを堪こらえていた。

　廊ろう下かもやはり、扉に合わせた巨人ジヤイアントサイズの大きさだった。カレンとアーネストは二度ほどジャイアントの住む家を訪れたことがあるので知っていたが、それでも自分の身長を遥はるかに凌りよう駕がするテーブルを見て、感かん嘆たんの息を漏もらした。

　ただし、花か瓶びんのような調ちよう度ど品ひんは置いていない。テーブルもしっかりと脚が固定されている。恐らく巨人サイズ以外の来客が多いために、調度品などを置いてしまっては、それが転げ落ちるだけで大変な事態になるからだろう。

「あちらの扉はご主人様や、来客に巨人族が来たときのためのものでして」

　執事はジーバス・シーマス、と自分の名を告げた。

　驚いたことに、ワイズマンの執事はゴブリンだった。ジャイアントという種族の特性上、同じジャイアントが執事になる事が仕事をこなすために必要だとアーネストは思ったのだが。

「どうなさいました、執事殿？」

「あ、の……」

　ゴブリンの執事の問いに、アーネストはしどろもどろになりながら自分の疑問を返した。

　彼は笑いながら応じた。

「なるほど、確かにそうです。ですが、我が主は大抵のことは自分で

やりたがる性質でして。それに、ジャイアントが執事ではあなた方のように小さな方々のお出迎えやお茶を差し出すことなど出来ませんからな」

　コツコツと主の部屋に向けて歩きながら、執事は言う。

「要は適切な人材が適切な箇か所しよに存在し、適切な行動を取ること、それが理想なのです」

「……なるほど」

　アーネストが真ま面じ目めに頷うなずくのを見て、カレンはくすくすと笑った。

「それでは皆様、こちらの扉よりお入り下さいませ」

　ジーバスが扉を開き、カレンたちはワイズマン六十三世と対面した。

　ワイズマンは机に座ったまま、巨人サイズの顕けん微び鏡きょうを覗き込んでいた。

　顕微鏡のプレパラートには、人間が読むサイズの本が載せられていた。ワイズマンは巨大なピンセットで丁てい寧ねいにページを摘つまんではめくっている。その様子を見て、ジーバスは呆あきれたように言った。

「旦だん那な様さま、レイジ・グリムスター様たちがいらっしゃいました。どうか、本を読むのはお止め下さい」

「待て待てジーバス、もう少し、もう少しで犯人が……」

「旦那様が今読んでらっしゃるのは、『処刑法廷』ですな。いい加減にしませんと、トリックと犯人を今ここで喋しやべりますぞ？」

「……分かった、分かったから間違っても言うな、絶対に言うな！」

　ワイズマンの言葉は、実に腹に響く声だった。

　コホン、と咳せき払ばらいしつつワイズマンは立ち上がった。穏やかそうな白髪の老人だった、豊かな髭ひげに手を当て、こちらを覗きこむようにして見つめている──身長はおおよそ10mモールだ。

「ようこそ、我が屋敷へ。そこに皆さん用のソファーがある。座ってくつろぎたまえ」

　カレンたちは戸惑いつつ、あまりにも小さなソファーに腰を下ろし

た。ジーバスが流れるような動作で、全員分のお茶を差し出す。

「ソレイシア産の橙だいだい茶ちやだ。夕陽のようで美しいだろう？」

「ありがとうございます、ミスター・ワイズマン」

　レイジが各人を代表して、丁重に礼を述べた。

「よろしい。すまないが少し待っていてくれ、私も自分のお茶を淹いれてくるのでね」

　ワイズマンが立ち上がり、巨体を揺らしながら彼らの脇を通過していった。扉を出る直前、ジーバスが声を掛けた。

「旦那様、お茶の葉は左の戸と棚だなの奥にございます」

「うむ」

「奥を探るとき、頭をお打ちになられませんよう」

「打たんっ」

　ワイズマンは拗すねたような声で言った。ひょっとすると、何度かぶつけたことでもあるのかしら──と、カレンは思った。

「……ふう、やれやれ。圧倒されてしまって、用件を上う手まく伝えられるかどうか自信がなくなってきた」

　悄しよう然ぜんとした表情でレイジは言った。ジャイアントとはあまり交流がなかったことに加え、何よりも眼前の存在が〝末裔たる者ミステイック・ワン〟であることが、彼の精神に重圧をかけ続けているらしい。

「お父さん、私が言おうか？」

「ん、む。いや、さすがにそういう訳には……」

　レイジが口を濁にごすと、ジーバスが飄ひよう々ひようとした表情で告げた。

「旦だん那な様さまは若い女性に甘い、もといお優しいですから、何か頼みごとがあるのならば、そちらの方がよろしいかと」

　その言葉にレイジは一瞬呆あつ気けに取られたが、

「…………ふむ、そういう事であれば。すまない、頼めるか？」

「任せて、お父様」

　くすくすとカレンは笑い、自分の胸をとんと叩いた。

　同時に、ドアの向こう側から凄すさまじい衝撃音とワイズマンの「あいた⁉」という悲鳴が聞こえた。一斉に顔を見合わせるカレンたちに、ジーバスは澄まし顔で言った。

「ですから、お気をつけなさいと申したのに。まったくドジな方です」

「オホン、オホン。……それでは、君たちがやってきた理由を、改めて聞かせてくれたまえ」

「旦那様、包帯か絆ばん創そう膏こうは必要ないのですか？」

「ないっ」

　ワイズマンは嚙かみつかんばかりの勢いでジーバスを睨にらんだが、カレンが前に進み出たことで表情を和やわらげた。

「君が、カレン・グリムスターかね？」

「はい。レイジ・グリムスターの娘、カレンと申します」

「〝イエスラス〟を借り受けたい、とのことだったが？」

「私たちは、第三次ディルビック海域調査隊として──」

「それは分かっている。念のために言っておくが、あの潜水艦には兵器を搭とう載さいしているとはいえ、軍事利用させるつもりは当分ない。あくまで深海の調査が目的だ」

「構いません。戦いに行く訳ではありませんから」

「ふむ──」

「私たちの希望は、あくまで真実を知ることです」

「冒険家アドベンチユラーとしての、使命感ではないのかね？　見れば、そこにいらっしゃるのはルイス・マクレーンじゃないか」

「名前を知っていただけるとは、光栄ですな」

　ルイスは立ち上がると、優雅に一礼した。

「どうかね？　カレン・グリムスター」

「………………無い、とは言えません。未知の、そして何かの謎なぞを秘めた海域──冒険家アドベンチユラーにとって、これ以上魅力的なものはありませんから」

「それだけではないと？」

「私たちには責任があります」

「責任？」

「三千人の命を預かったにも関わらず──ディルビック号は目的地に到達すること敵わず、沈没しました。それが、たとえ第二次調査隊が言う〝何か〟が原因であっても同じことです。その責任を取るために、私はあの海域の真実を探らなければなりません」

「だが、それはグリムスターという企業の責任であり、君とは何の関わりもあるまい」

「いいえ。私はカレン・グリムスター。グリムスター家の人間です。私はただ存在するだけで、責任を負わなければなりません」

「……損な考え方だね、カレン」

「そうですか？」

「責任を負うとは、損なことなんだよ。だから、誰もが嫌がる」

　ワイズマンはゆったりとした様子で背もたれにのしかかり、優しい笑みを浮かべて彼女を見た。

「いいだろう。〝イエスラス〟はしばらく君たちに貸たい与よする。無論、いくつか条件を出させてもらうがね」

「その条件が実現不可能なものでない限り、最大限の努力をするとお約束します」

　カレンは父親のレイジと取り交わした条件を思い出しながら、そう応じた。

「一つ目。まず、潜水艦操縦に関する最低一か月間の訓練を調査隊全員が受けること」

「当然です」

「二つ目。この潜水艦の技術を流出しないようにお願いしたい。最終的に、この潜水艦の機密部分の記憶を消去することに同意してくれるかな？」

「腕の良い魔法使いをお願いします。何かの拍子で、消すべき記憶を間違えられては困りますので」

「〝九人の大魔法使いナイン・ハイウオーロツクス〟を呼ぶよ、不満かね？」

「とんでもありません」

「三つ目。沈没は許さない、何としてでも戻ってきなさい」

「……ありがとうございます。必ず帰還致しますわ」

　ワイズマンは椅い子すから立ち上がり、小指を一本、カレンに向かって突き出した。カレンはその指を握り、二度、三度と振った。ジャイアントと人間たちとの間で取り交わす挨あい拶さつだ。

　ソファーに体を沈み込ませていたレイジが、ホッと胸を撫なで下ろしていた。

「それでは諸君、行くとするか」

　ワイズマンがソファーから立ち上がるアーネストたちを見て不気味な笑顔を見せた。

「私は今から悪戦苦闘する君たちを見て楽しむつもりなのだよ。ウィスキーを片手に、カナッペを食いながらね」──と、その笑顔は言っているようだった。

　ワイズマンは屋敷から少し離れた場所にある、ドックへとカレンたちを案内した。

　カレンたちは、そこで初めて〝イエスラス〟と対面した。

「……」

「これが、〝イエスラス〟……ですか……」

「……凄すごいな」

「これに乗るのかーなー？」

「兄さん、これに乗るのよ」

「凄い──噂うわさには聞いていたが」

「我々の知っているものとは『桁けた』が違うな……」

誰もがその巨大な艦に目を離せずにいた。アーネストはようやっとのことで、視線を潜水艦から、ワイズマンに移すことができた。ワイズマンは髭ひげを指でいじりつつ自慢げに、そして声高らかに告げた。

「これが〝イエスラス〟だ！　諸君、驚いてくれて何よりだ！」

乾かんドックに、まるで高貴なワインボトルのように鎮ちん座ざしている潜水艦。潜水艦の外形で現在普及しているのは、水上航行に適した形である船型だが、〝イエスラス〟のほっそりとした円筒形の外見は、まるで巨大な葉巻を思わせた。船体の外がい殻かくに使用されているのは、鈍い光を放つ薄黒の金属だ。

彼らの内何人かは軍用潜水艦搭乗の経験があった、だが目の前に存在する〝イエスラス〟には、それまでの経験が何ら意味のないものだと思わせるほどに充分な威い容ようを誇っていた。

純然たる水中航行専用潜水艦──この観点で造られた潜水艦は、まだまだ世界を見回しても数が少なかった。

「誰か、ナイフか剣を持っている者は？」

カレンが視線をアーネストに移す、彼はゆっくりと手を掲かかげた。ふむ、と頷うなずいてワイズマンは言った。

「では、船に近寄って軽く斬きりつけてみたまえ」

「分かりました」

「軽く、だよ？」

「はい……」

恐る恐るアーネストは〝イエスラス〟に近づき、ハッチへの階段を昇って外がい殻かくに触れるほどの地点でナイフを振り上げ、軽く小突くように斬りつけた。

金属が金属を弾く際の小気味いい音がドック全体に響いた。その独特の反響音に、何人かが気付いて、愕がく然ぜんとした。一人が思わず感かん嘆たんと共に叫んだ。

「アダマンタイトだ！」

アダマンタイト、灰の銀ミスリルを越える耐久力を持つ世界最硬の金属である。同時に、ギデオンやソレイシアの一部でしか産出されない稀き少しよう鉱石だ。そして、艦の外殻全てにアダマンタイトを使うなど、現代の技術ではコストも含めて不可能に近かった。

「アダマンタイトを薄く加工する技術がニヴェンにあると聞いてね、取得するのは難しかったが、粘った甲か斐いはあったというものだ」

　ワイズマンが言うには、もし船体の全てをアダマンタイトにするとコスト以前の問題として、自重が重過ぎて、浮上すらできなくなるそうだ。

　よって、アダマンタイトはあくまで船体の耐久力を高めるための補助金属と割り切り、基本的な材料はミスリル及びミスリル合金が用いられている。とはいえ、アダマンタイトで艦全体を覆おおっている時点で『この艦は魚雷や機雷、艦砲、魔法使いの炎球などものともせずに撥はね返す』だけの耐久力を備えていることは明らかであった。

　エンジンはアーク・メリア連邦国のトップメーカー、シャルマ・モーターカンパニーと共同開発した最新型の精霊封印式エレメンタルシールスタイルエンジン。武装は艦かん首しゆに四門存在する、魔銃技術を投入した最新式魚雷。現行の潜水艦としてはまさに最新最高の存在であることは疑いようがない。

　見み惚ほれていた冒険家アドベンチユラーたちが、のろのろと視線をワイズマンに移した。ワイズマンは彼らの反応を見てから満足げに頷き、潜水艦の入り口を指差した。

「そして。今から君たちのトレーナーを務めるのが、そこにいる男だ」

　その言葉に、カレンたちは一斉に指差した先を見つめる──太陽の光を背に受けて、リザードマンの男が一人立っていた。

「ヘイ、ＹＯ！　仔猫ちゃんたち、準備はいいかね？　君たちはたかが仔猫の癖くせに、この偉大なるデカブツを操船しようとしている。並大抵の苦労じゃあないぜ！　それでもやるって言うのかい？」

　リザードマンは開口一番そう叫んだ。その言葉の意味することを理解して、血の気けが多い冒険家アドベンチユラーたちは、たちまち怒りを露あらわにした。

「カリカリするんじゃないぜ。俺がお前らの教官だ、お前らにとって教官は神にも等しい存在だ。それは理解しておけよ！」

　ルイスはやれやれと苦笑しつつパイプを咥くわえ、アーネストはちらりとカレンを見た。もし、カレンの表情に怒りが含まれていたならば、彼としてはワイズマンが選んだコーチに喧けん嘩かを売らねばならないだろう。

　無意識にぐっと、拳こぶしを握る。

　カレンは──カレンは、驚いたことにくすくすと笑い出した。

「仔猫……まぁ、私のことをかわいく愛らしい仔猫だなんて。見る目あるわね」

「お嬢様──」

　向こうはあなたを虚こ仮けにしているのではないか、とアーネストは言おうとしたが、途中でカレンが遮さえぎった。

「──とでも言うと思った？　私だって仔猫と呼ばれて喜ぶほど愚おろかじゃないわよ！」

「はぁ……」

　アーネストとしては、安あん堵どするべきか怒るべきか、戸惑うばかりだった。



「ともかく、スカすにも程があるリザードマンさん。仔猫は取り消してちょうだい！　分かりやすく言うと、ふざけんなバカ！」

「……へえ、そこの仔猫ちゃん。俺のどこがスカしてるって？」

　リザードマンはそう言って、足早に歩いてくる。アーネストが反射的に、カレンの前に進み出た。

「全部よ、全部！　何もかも！　歩き方まで全部！」

　カレンはアーネストの脇から顔を出しながら、切り返した。そうこうしている間にも、どんどんとリザードマンは近づいてくる──ようやく、顔が判別できるようにはなった。

　最初は逆光で見えなかったが、こうして近づいてくるにつれて、彼の体色が非常に特徴あるものであることが見て取れた。

　白色のリザードマンというのは、カレンもアーネストも──そして、他の者たちも初めて見る色だった。

　服装も教官にしては変わっていた。レザージャケットにこのパンツスタイルでは、ほとんど冒険家アドベンチユラーではないか。

「俺の名は、テイル・ルー・ホワイトビュー。一応言っておくが、この色は生まれつきさ、別に生なまっ白ちろい生活していた訳じゃねえ。そこんとこ間違えないようにな」

「覚えておくわ。脳細胞の無む駄だかもしれないけどね！」

「……言うねぇ。それで、執事の陰に隠れてなきゃ様になったんだろうがな」

「……って、ちょっとアーネスト！　悪いんだけど、そこ退どいて！　コイツの白い顔を真っ赤に汚してやるから！」

　アーネストは無言で首を横に振った。

　ホワイトビューと目線が交こう錯さくする……互いの目が、互いの力量を推し量り、あらゆる身体的特徴を観察しようとする。

　互いに、相手を〝特別な存在だ〟と認識した。ホワイトビューが問い掛ける。

「名前は？」

「アーネスト・ヒギンズ」

「テイルだ、よろしく。アーネスト」

　白い手が突き出された。アーネストはおっかなびっくり、というようにそれに応じる。

「ところで、仔猫ちゃ──もとい、彼女は？」

「我が主です」

「カレン・グリムスターよ。間違っても仔猫なんて呼ばないでちょうだい！」

「はいはい、それじゃベイビー？」

「ベイビーも駄だ目め！　カレンよ、カレン！」

「オーケー、ベイビー。訓練はとっても厳しいが、ついてこれるか？」

「……ついていくわ！　私だけじゃない、教授も、他のみんなも全員よ」

「ＧＯＯＤ！」

　テイルはニヤリと歯を剥むき出して笑った。白い顔に白い歯、赤い歯は茎ぐきだけがやけに目に印象を残した。

　──それから一か月。レイジ以外のメンバーは潜水艦〝イエスラス〟を操縦するための、膨ぼう大だいな情報を叩き込まれていった。

　本プロジェクト──『第三次ディルビック海域調査計画』におけるメンバーは以下の通りである。まずカレンに直接誘いを掛けられ、それに応じた者が彼らだ。ここにカレンやアーネストも含む。

　カレン・グリムスター（女／人間）。アーネスト・ヒギンズ（男／ハーフ・ワータイガー）。ルイス・マクレーン（男／エルフ）。ルイ・フィールタン（男／ゴブリン）。ベルベット・フィールタン（男／ゴブリン）。

　以上五名。

　そして、ルイス・マクレーンが誘った冒険者は以下の三名。

　バイル・ホロウスキー（男／人間）。ユウマ・ササキ（男／ドワーフ）。シェリー・ニキーティル（女／エルフ）。

　レイジ・グリムスターとレッドライン社によって雇われた冒険者は以下の十二名。

　ジャン・ジャック・ルード（男／エルフ）。サティ・モントルフ（女／ドラゴニュート）。マイケル・ソウヤー（男／人間）。フリードマン・フッカー（男／オーク）。ブライト・ゴールニウム（男／ドワーフ）。ブルース・マッケンジー（男／人間）。ジェシー・マグワイア（男／ミノタウロス）。マーティン・レーマン（男／ドラゴニュート）。エヴァ・リーフ（女／リザードマン）。フリント・イエール（男／エルフ）。ラット・ジェイ（男／ゴブリン）。ゲイリー・ブッチャー（男／オーク）。

　計二十名が今回の冒険に参加した面々だった。恐るべき謎なぞを秘めた海域に、命を捨ててでも挑みたいと考えた者たち──それが、彼らだ。

「潜水艦の操そう舵だに必要な知識を叩きこむぞ。睡眠時間は今までの半分になると思え」

「今までの栄光キヤリアは全部忘れろ。お前らはちょっといきがっているだけの若造だ。海のことを何にも知らん、無知な愚おろか者ものどもだ」

「偉大で、そして気まぐれな海を制せい覇はするなど、人類には不可能だ。俺たちにできることはただ一つ、〝彼女〟のご機嫌取り程度くらいのものだ」

　操船そのものはもちろんのこと、絶え間ないトラブルへの応対、精霊封印式エレメンタルシールスタイルエンジンの修復作業など、学ぶべき点は膨ぼう大だいであった。

　同時に、彼らは非参加者であるレイジやワイズマンも交えて、どういう風にディルビック海域を探索すべきかなどの相談も進めていた。

　ホワイトビューの訓練は厳しく、その上で冒険家アドベンチユラーは一つ思い知らされたことがあった。未知の領域に到達してもそれが地上である限り、逃げるという選択肢しを選ぶことは可能だが、海中ではそうはいかない。

　逃げ場がない。故ゆえに、徹底した訓練によって状況を的確に判断し、適切な行動を取ることが求められる。辞典より分厚いマニュアルを、徹底的に熟読し、暗記し、その上で覚悟を決める。自分が存在するのは、人が本来居てはならない場所であり──〝海〟の気まぐれで殺されても、文句は言えないのだと。

　全員が疲ひ弊へいしていたが、脱落者は出なかった。未知なる海域

への意欲が彼らの士気を保ち続けていた。カレンに至っては、ホワイトビューの言うことに従い、教えをよく学びつつも、彼が「ベイビー」と呼ぶたびに、猛烈な抗議を怠おこたらなかった。

　　　　　　――――英雄暦１９３９年甲冑月（８月）ノ20日

　そして、訓練終了の日まで半ばが過ぎた時のこと。

　個室の扉がノックされたとき、アーネストは資料の整理を、カレンはベッドに寝転がって地図を眺めていた。

「カレン、いるかい？」

　ルイスの声だ。カレンは地図から目を上げて応じた。

「教授ですか？　どうぞ」

　……が、資料を整理していたアーネストは、珍しく焦った声で叫んだ。

「……失礼！　しばしお待ちを！」

　何しろタンクトップに無地のショーツ一枚という姿である。無防備にも程がある。屋敷で何度言っても「楽だから」の一言で済ませられていたが、客人と会う場合にはそうはいかない。

　カレンを抱え上げて「あ、きゃっ。ちょ、やめなさいてばっ」――強引に服を着せた。

　一安心、と胸を撫なで下ろしてから扉を開く。

「ノックしてから随ずい分ぶんと時間が掛かったものだな。……ははぁ、大方はしたない服装をアーネストに咎とがめられたかな？」

「む、ぐぐぐぐぐぐぐ」

　ズバリと的中された気まずさからか、両手を突っ張ってぷるぷると震えるカレン。

「……」

　アーネストはため息をつくことで、ルイスの質問を肯定した。

　やれやれ、とルイスは苦笑しつつ腕を組んで閉じた扉にもたれかかった。

「むぅ……な、何の用ですか、先生？」

　少々不ふ貞て腐くされた様子のカレンに、ルイスは苦笑する。だが、すぐにその眼まな差ざしは真剣なものへと変わった。

「カレン、気付いているか？」

　応じたカレンもまた、平静を取り戻して尋たずね返す。

「……気付くとは、何にでしょうか？」

「不穏な空気がある」

　その言葉に、カレンは顔をしかめた。

「不穏、ですか？」

「レイジが雇ったという冒険家アドベンチユラーは、明らかに他の連中と格が違う。その事は、お前も分かっているだろう？」

　カレンは頷うなずいた。確かに、ルイスの教え子すら上回る実力と知識という点から、必然的に彼らはチームの中心に据すえられていた。

「彼らは調査だけでなく、サルベージも行いたいと申し出たそうだ」

　サルベージとは、沈没した船の引き揚あげ作業や運行不能になった船の曳えい航こうなどのことをいう──だが、海底１０００ｍモールで、ましてディルビック号をサルベージなど夢物語でしかない。

「……引き揚げ作業ですか？　無茶でしょう、それは」

　呆あきれたようにカレンが言った。当たり前だ、いくら〝イエスラス〟といえどもディルビック号を引き揚げるほどの馬力はない。

「一部の荷物だけだそうだ。ディルビック号に満載された貴重な美術品……それらは、海の底に沈ませておいていいものではない、というのが彼らの主張だ」

「ホワイトビューは？」

「彼はあくまでトレーナーだ。サルベージ用のクレーンの使い方を教え込んでいるよ」

「ふーむ」

　カレンはベッドに腰掛けると、ぶらりと脚を振った。

「まあ、彼らの言うことに反対はしないさ。ディルビック号に乗って

いた富豪たちが、如い何かなる美術品をどれだけ運んでいたのか……。全て引き揚あげることができれば一財産……いや、小国くらいなら買えるだけの金額になるんじゃないかな？」

　世界各国共同で制定された海洋法により、『一度沈没した船』の美術品などはその時点で廃はい棄きされたものと見なされ、要するにそれを引き揚あげた者の所有物となる。ただし、元所有者は買値の七十パーセントの金額でそれを返還してもらうことができる（この上限は下がることはあっても、上がることはない。どんなに完全な状態で引き揚げられても七十パーセントだ）。

　一億ルードの絵画の七十パーセントならば、七千万ルードで買い取られることになる。もちろん、買取による返還を拒否する場合もあるだろうし、美術品はかなりの損傷を受けている可能性も高いのだが――損傷の度合い次第では、一財産を築くことが可能かもしれない。

　しかし――と、カレンは肩を竦すくめた。仮定に仮定を積み重ねた末での金算用に興味はない。

「本来、海域の謎なぞを調査して、ディルビック号の現状を記録するのが我々の仕事なのだが……」

「でも、仕方ないかもしれません。名めい誉よだけで、お腹なかは膨ふくれませんし」

「ふむ！　……それはまあいいとして、もう一つ気になることがある」

「何かありますか？」

「連中は明らかに軍ないし警察機関などによる訓練を受けている節ふしがある」

「……元軍人ならば、冒険家アドベンチユラーとしては珍しくないのでは？」

「いや……恐らく、現げん役えきだ。むしろ、冒険家アドベンチユラーとしての経験は皆かい無むな気がする。『グリットバスの霊れい峰ほう』も知らなかったくらいだからな」

「グリットバス？」

　アーネストは首を傾かしげた。自分の知る限り、そんな山に行った覚えはない。

「アーネストは知らないんだっけ。グリットバスの霊峰っていうのは

存在しないの。でもね、冒険家アドベンチユラーはこのグリットバスの霊峰を、いかに恐ろしく素晴らしい場所だったか語るのが、一種のゲームなのよ」

　━━この間グリットバスの霊峰に行ったんだが、やはりあそこは凄すごい。俺は聖櫃アークを発見したぜ、残念ながら封印されていたものを解放すると、ただの棺ひつぎになったがね。

　━━俺なんか、あそこでとっくに絶滅したはずのシルバーキマイラに遭そう遇ぐうしたぜ。激闘の末、俺の放った銃弾が心臓を停止させたがね。

　━━グリットバスの霊峰の頂上に行ったんだ。俺があそこで見たのは、確かにスカイウォーカーの一族だったぜ、本当だよ。

「普通は誰でも知っているわ。大抵の冒険家アドベンチユラーなら、駆け出しの頃先輩に教えて貰っているはずだし」

「彼らは知らなかったよ。仕方なく、誰もが最初に通過すべき秘境だと言っておいたがね」

「という事は、彼らは冒険家アドベンチユラーではなく、軍人、ないし警察機関の人間だと？」

「あるいは……」

「あるいは？」

「あるいは、もっと特殊な機関の工作員かもしれない」

「ＮＣＩＡあたりですか？」

「そうかもしれん。だが……最悪の可能性も考こう慮りよしなければ」

「最悪？」

「聖導評議会かもしれない、ということさ」

「……！」

　カレンとアーネストは息を呑のんだ。聖せい導どう評ひよう議ぎ会かい━━その名を聞くだけで、真っ当な人間は顔をしかめ、ドワーフは唾つばを吐き、エルフは嫌悪感に顔を歪ませるという。

　不死の王ノーライフキングを礼らい賛さんし、現世の利益を追求するカルト集団。厄やつ介かいなのは、二千年もの長きに渡って闘争を

繰り返し、生き残ってきた彼らは、最早国家程度では手に負えないほどに、規模を拡大させている点だった。

「……教授、どうしましょう？」

　不安げに、カレンは身を縮めながら言った。ルイスは苦く渋じゅうの表情で告げる。

「まだ確たる証拠が無い。そもそも、本当に聖導評議会であれば証拠が出てくるかどうかも怪しいがね。彼らには、信者たる証拠の品など何も存在しないのだから」

「お父様に聞いてみれば……」

「いや、もう聞いている。レイジもまた、彼らのことはあまり知らないようだった。レッドライン社から派遣されてきた冒険家アドベンチユラー、ということしか……」

「……考えてみれば、調査を渋っていたレッドライン社が突然態度を豹ひよう変へんし、率そつ先せんして調査を行おうとしたり、わざわざ人員を派遣するのもおかしな話ですよね」

「うむ。……会社ぐるみ、という可能性が考えられなくもない」

　レッドライン社全てが──あるいは、上層部が聖導評議会？　カレンはその予想に眩暈めまいがした。

「教授。どうしましょう？」

「……私は、このまま観察し続けるべきだと思う」

「ミスター・ワイズマンや、あるいはホワイトビューには？」

「どちらに連絡しても駄目だ。……聖導評議会が関わっているとなれば、このプロジェクトは間違いなく頓とん挫ざする。少なくとも、私や君は一いつ切さい関われないだろう」

「……」

「それにだ。我々の推測はあくまで最悪のものだ。単純に美術品目当てという可能性の方が高いんだよ、カレン。もしそうであれば、我々は彼らの名めい誉よを穢けがしていることになる」

　アーネストは確かにそうだろう、と思った。聖せい導どう評ひよう議ぎ会かいのメンバーである、と糾きゆう弾だんされることはそれだけで決闘の理由足りえるほどに不ふ名めい誉よな事態だ。

　糾弾する方も、される方もまさに命いのち懸がけだ。

「では、このまま？」

「うむ……油断するな。まずはそこからだ」

　ルイスが立ち去ったあと、カレンは哀しげに顔を俯うつむかせた。涙こそ出てないものの、肩を小さく震わせる様は、必死に我慢する小さな子供を思わせた。

「お嬢様……」

　カレンはゆっくりと首を横に振る。

「大丈夫、平気よ。……私は、あの人たちを信じる」

　そう自分に言い聞かせるカレンを、アーネストは哀しげに抱きとめた。

　信じるのではなく、信じたいのだろう。それは「彼らを除くと、プロジェクトが進行しない」などという問題ではない。自分の──否いな、グリムスターの意志に賛同してくれた彼らが、裏切り者であることを信じたくないのだ。

　その点、カレンはわずかに甘かった。アーネストは甘くはない、その事実も無言で受け入れるだけだ。受け入れただけで、対策を施ほどこす──カレンのために。

「でも、私たちの目的と少しズレがあるのは事実よ。彼らの行動を慎重に観察しましょう、私とあなたで」

「分かりました、お嬢様」

「お互い、気をつけましょう……ね？」

　か細い声、普段の快活さはどこかに消えていた。

　迷った末、アーネストはカレンの頭を無骨な手で撫なでた。

「ん……」

　目をつむり、カレンはそれを受け入れる。震えは次第に収まり、カレンの両手は自然とアーネストの服の襟えりを掴つかんでいた。

　額を胸に押し当て、ごしごしと擦こすりつけする。

「三秒待って」

「はい」

「三……二……一……ゼロ！」

　カレンは勢いよく顔を上げた。両手もアーネストの襟から離し、ぱっと後ろへ飛び退く。

「んむ。何とか復活できたみたい」

　それが、空から元げん気きであることはアーネストにも理解できたが、元気だと彼女が言っている以上、その言葉を疑う訳にもいかなかった。

　アーネストは無骨で、口くち下べ手たで、肝かん心じんなときに彼女を慰なぐさめる言葉を持たない己を、今ほど呪ったことはなかった。

「さ、訓練期間も残り十五日。頑張るとしましょう！」

「…………はい」

　ドア越しにホワイトビューの声が聞こえた。

「おい、ベイビー＆アーネスト！　訓練再開だ、とっとと来い！」

「分かりました！　あと、ベイビーって呼ぶなっ！」

　　　　　　――――英雄暦１９３９年甲冑月（８月）ノ21日

「潜航開始。メインバラストタンク、前部トリムタンク、注水。潜航角度十度」

「潜航開始、角度十度！」

「アイ、サー！　潜航ダイブ、潜航ダイブ、潜航ダイブ！」

　訓練は第二期に入り、〝イエスラス〟による実際の潜航が開始された。

　艦長代理としてルイス・マクレーンが管制室に乗り込み（ルイスには帆はん船せんの船長を務めた経験があり、全員一致で彼がリーダーに選ばれた）、乗組員たちに指示を下す。ホワイトビューの指導の下、潜行と浮上を幾度も幾度も繰り返した。どんな魔法のエンジン、頑丈な船体でも、海は恐怖そのものだ。

　バルブを開放し、海水が注入される。ゆっくりと、全長80mモールの鋼鉄より尚硬い巨体が実験用に区切られた海域に沈んでいく。

　カレンとアーネストは、機関室で青白く光る精霊封印式エレメンタルシールスタイルエンジンの調子を見守っていた。

　複雑に絡み合ったパイプの内部を人工的に造られた精霊が走り回る。精霊の魔マカナはエンジンからスクリューに伝達される。スクリューは電力機関と魔力機関の併へい用ようによって回り出す。ディーゼルのような内ない燃ねん機関と違って空気を汚さない分、長期水中航行を可能とする。

　彼らのほかに、フィールタン兄弟もこちらの作業に従事している。

「後部トリムタンク注水。艦を水平に保て！」

　深度１００ｍモール──精霊は暴れまわることなく、静かにエンジンの調子を一定に保っている。水圧は十一気圧。既に、人間などの立ち入りを許す領域ではない。この水圧に耐え得るのは、呼吸器官が人間のそれとは異なった進化を遂とげている魚人マーマンくらいのものだろう。

「エンジン異常ありません、艦長代理。出力40パーセント維持」

「了解。エンジンに異常なし、出力は40パーセント維持ですよ、教官」

「オーケー。ベイビー、今から機関室そちらに行く。艦長代理、ここは頼むぞ」

　ホワイトビューの応答にカレンはもう、反発するのは諦あきらめていた。

　テイル・ルー・ホワイトビュー──正体不明の、極めて稀き少しような白色のリザードマン。

　彼の前歴はよく分からない。潜水艦のことには極めて詳しく、冒険家アドベンチユラーとしての経験も積んでいるようだ。アーネストはカレンに「あの方は強い、と思います。ミスター・ホワイトビューには、剣林弾雨を掻い潜る日常生活を送ってきたような凄すご味みがあります」と告げた。

　軍人……ではない、というのがカレンとルイスの一致した意見だった。彼の現在の性格、態度が軍人から引退後、後天的に会え得とくしたものだとしても、その歩法や動作に軍人らしさが欠片かけらも見当たらなかった。

　二人は冒険家アドベンチユラーという職業上、カレンはそれに加えてグリムスター家の令嬢として、元軍人や現役軍人に会う機会が多々

存在する。グリムスター社にも、元アーク・メリア海兵隊の男たちが何人か働いている。

　故に、軍人かそうでないかはある程度の判別がつく、つける自信はある──だが、ホワイトビューの歩き方には、そういう訓練によるクセがまるで染み付いていなかった。

　アーネストはそれでもやはりあの歩法は訓練されたものだ、と思った。

　彼の歩き方は真っ直ぐで、無駄がなく、そして上半身がゆらゆらとだらしなく動くことはない。何らかの武道、武術の類たぐいを学んでいるのではないか、とアーネストは推測していた。

　ホワイトビューにもそれとなく──とはいえ、アーネストの口下手のせいで狙いは明らかだったのだが──尋たずねてみたが、曖あい昧まいに誤魔化されただけだった。

　とはいえ、彼に関して分かっていることが一つだけある。

　彼は、ワイズマン六十三世に全幅の信頼を置かれている。〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟の審しん美び眼がんは信じるに足るものだ。ワイズマンがホワイトビューに我々とこの艦を託したのであれば、それに従うのは正しい事なのだろう。

　──正しい、事なのだろうか？

　アーネストはふと、ホワイトビューに疑念を抱いた。カレンもルイスも、彼がワイズマンから信頼されている、という一点を持って彼を信頼しているようだ。

　それは、本当に正しいのだろうか？

　英雄を信じ、英雄が信じる者を信じるというのは、思考の停止ではないのか？

　軋きしむような痛みが、頭の中を駆け巡り──アーネストは、それ以上踏み込むことをやめた。当面の問題は、レイジ・グリムスターが連れてきた十二名だ。

　ルイスの言う通り、彼らは明らかに異質だった。彼らの訓練に対する熱心さには並々ならぬものがあったが、それは一方で「十二名で艦を動かすことを想定している」ようにも感じ取れた。

　まるで。まるで、自分たちは彼らにとって使い捨てもしくは障害物に成り得るものであり、信用する訳にはいかない──そう、宣言してい

るようだった。

　だが、訓練はもう最終段階に入っている。今いま更さら、彼らを追放する訳にもいかず、そして新たなメンバーを入れる余よ裕ゆうもない。今回が最後のチャンスなのだ。

「いざという時は──」

　呼吸がわずかに乱れる。心臓が弾む、牙が震え、奥歯が軋きしんだ。血が体内を駆け巡りながら、彼の体のあらゆる部分にアドレナリンを届けていく。

「怖い顔してんね、ボーイ」

　その顔に、全身が竦すくみあがった。アーネストが慌あわてて振り向くと、機関室の扉はいつのまにか開いており、ホワイトビューがそこに佇たたずんでいた。

「え、あれ……ミスター？　いつの間に……」

　エンジンの調子を見ていたカレンが、振り返った。

「ついさっき。えーと、アーネスト……だったか？　ちょっといいか？　時間は取らせないつもりだが」

「……」

「いいわよ、今のところ大だい丈じよう夫ぶそうだし。こちらは私とあの二人でどうにかするわ」

　カレンが親指でフィールタン兄弟を指し示した。

　アーネストはホワイトビューに従い、機関室を出て無人の食堂で彼と相対した。

「何か……？」

「いや何だ。君に聞いておきたかったんだよ、俺が訓練している連中の間で微妙な雰ふん囲い気きが存在する。気付いていたかい？」

「……」

　正直に回答してはならない、とアーネストは思った。とはいえ、自分に嘘がつける才能があるとアーネストは思えず、彼は無言で首を横に振った。

「ふぅむ……気付いていなかったか」

　やや探るような目──だが、彼はポーカーフェイスを保った。瞳に現れる動どう揺ようも最小限に抑えていた。感情を篭こめて言葉を繰るよりも、こうして彫像のように、仮面のように表情を変えないことの方が、彼には得意だった。

「……まあいい。全員、訓練に対する熱意は本物だ。実際に、こうしてこの潜水艦を動かせている。ならば、まったく問題はない」

「はい……」

「強いて言うならば、あと一つある」

「……？」

「君は、一体、何者だ？」

　一言一言、区切って告げられた言葉。そこには、己を『尋じん常じょうな者ではない』と認識している節がある。半ば確信しているといっていい。

　だが、彼は自分の正体を明かそうとは思わなかった。

「……私は、アーネスト・ヒギンズ。カレン・グリムスターの執事です」

「ふむ……」

　ただそれだけしか、彼は伝えなかった。彼がハーフ・ワータイガーであることを知っている者は極めて少なく、彼らが迂う闊かつに情報を漏もらすとも思えない。

　ホワイトビューはぞっとするほど冷えた瞳で、自分を覗のぞき込んでいるように感じて、アーネストは居い心ごこ地ちが悪かった。

「オーケー、ボーイ。君がそう言うのなら、そうなのだろうね。ハハン！」

　肩を大おお袈げ裟さに竦すくめて、ホワイトビューは食堂から立ち去った。

　だが、去り際にホワイトビューともう一度目が合った。その眼に、アーネストは震えた。

　姿が見えなくなって、アーネストは呟つぶやいた。

「……敵意、だ」

彼はホワイトビューの眼に、確かに圧倒的な敵意を感じたのだ。全身が慄おののいた。

思考が凄すさまじい加速を見せる。

━戦う？　戦いたいのか？　あの男は、自分と戦いたいのか？

━勝てる？　勝てるのか？　あの男に、勝てるのか？

━蹲うずくまり、吐と瀉しゃ物ぶつを撒まき散らしたくなるほどの絶望感！

━怖い！　だが、怖いなどと言っていられない！

━もし、もし戦うのならば！　必ず、勝たなければ！

━勝つ！　勝つとも！

脳のう髄ずいを濁った殺意が支配する。おかしい━と、アーネストはわずかに残った理性と論理的な思考で思った。たかが眼が合っただけ、たかが視線を交わしただけだ。それだけで、何故これほどまでに、自分は、殺意を抱くのだ？

冷静になれ━と、アーネストはひたすら願った。自分では恐怖と殺意のコントロールが効かなかった。

「アーネスト！　話は終わったんでしょ？　早く来てちょうだい！」

「……！」

その言葉が耳に届くと同時、執事バトラーアーネスト・ヒギンズとしての心が蘇よみがえった。

気付けば膨ぼう大だいな殺意も、絶望も、何ど処こかに消え失せている。

じっとりと汗ばんだ両手の平を服に擦こすりつけ、アーネストは足早に機関室へと戻った。

「どうしたの、アーネスト？」

カレンは不審そうな表情でアーネストを見つめた。彼は動どう揺ようしているようで、しどろもどろになりながら、「何でもありません」と答えた。

（ホワイトビューに何か言われたのかしら？）

　となれば自分が彼を庇かばうべきだろうとカレンは思ったが、何を言ってもアーネストは「何でもない」の一点張りで、彼女は仕方なく引き下がった。

「アップトリム。前部トリムタンク、バラストタンク、ブロー。浮上角度十度」

　正せい操そう舵だ手しゆであるジャン・ジャック・ルードが艦長代理であるルイスの指示を復唱し、見事な腕前で潜舵を操って〝イエスラス〟を無事海面まで浮上させた。

「エンジン停止。〝イエスラス〟全箇所をチェック」

「後部操舵室、異状なし」

「機関室、異状なし」

「前部魚雷発射管、異状なし」

「クレーン室、異状なし」

「居住区域、全て異状なし」

「よろしい。教官、全て異状なしオールグリーンです」

「ふむ……」

　ホワイトビューはペンでチェックリストにさらさらと文字を書き留め、艦内放送用のマイクを手に取った。

「赤ん坊ベイビー諸君。最後の潜航ダイブ及び浮上訓練は終了した。正直に言って……まだまだ、未熟というところだ。以下、注意事項を個別に語ってやりたいが、そうするとドックについちまうな、後で聞かせてやろう」

　艦内に失望のため息が一斉に漏れた。ルイスもまた、苦い顔でホワイトビューを見つめている。

「だがまあ、少なくとも……お家の外に出てはいけません、と叱しかるほどのレベルでもないな。諸君、七日後にディルビック海域に向けて出航だ」

　艦内に満ちていた失望感が、一瞬で吹き飛んだ。

　歓声をあげる、機関室のカレンやフィールタン兄弟。アーネストも、さすがに胸を撫で下ろし、飛びついてきたカレンに笑顔を見せた。

　司令室の乗組員も、周囲と手や肩を叩きあって喜びを表現していた。

「ただし、もちろん俺もついていくぞ？　全員海底に沈んでしまったら、寝覚めが悪いしな」

「心強いですよ、ホワイトビュー教官」

　穏やかなルイスの言葉に、ホワイトビューは肩を竦すくめた。

————英雄暦１９３９年甲冑月（８月）ノ27日

　翌日が出航という日に、ワイズマンが新たな乗組員を紹介した。

「前日だというのに申し訳ないね」

　ワイズマンが紹介したのは女性だった。それ自体は珍しくないのだが、ラドリース人であるというのは彼らにとって些いささか意外であった。やや浅黒い肌、切れ長で涼やかな雰ふん囲い気きを漂わせる目、粗野ではなく、高貴でもなく、自然と共に生きているような印象を彼らは受けた。

　澄み切った綺き麗れいな声で、女は己の名を告げた。

「コゼット・レングランスです。どうか、よろしくお願いします」

「彼女はコックだ。長い船旅、料理くらいは美う味まいものを食べたいだろう？」

　悪いた戯ずらっぽい笑みでそう告げるワイズマン。大半は歓迎し、何人かはコックにしては美人過ぎることに感心し、さらに何人かは彼女の腕前を相当なものだと見抜いていた。

「それでは皆、今日は早めに休みなさい。明日の朝をよりよく迎えられるように。あなたがたのために祈ろう。──栄光Plemとse祝福restを」

「──栄光Plemとse祝福restを」

　ワイズマンの祈りに、全員が唱和した。

　その日は、一部の冒険家アドベンチユラー──フィールタン兄弟を筆頭に、ルイス・マクレーン教授の門もん下かの者たちの主催でささやかな壮行会が執り行われた。場所は客人用の屋敷の大広間。客人用の屋敷に入ることができないワイズマンは当然というべきか、残念ながら欠席である。

　アルコールは明日のために軽く一杯のみ、食事はコゼット・レングランスの腕試しも兼ねて、彼女が取り仕切った。

　ワイズマンが二本の指で摘つまんでおいたテーブルに、片かたっ端ぱしから料理が並べられていく。椅い子すはなく、誰もが立ったまま大皿に乗った料理を取り分け、舌した鼓つづみを打っていた。

「……ふむ、良い味だ。ラドリース風の味付けかと思いきや、アーク・メリアの味だな、このトウモロコシのパンは」

「私はラドリース人ですが、子供の頃はアーク・メリアで生まれ育ったので……やはり、幼い頃に慣れ親しんだ味付けになってしまうようです」

「これならあたしが作らなくても大だい丈じよう夫ぶみたいねえ」

　ベルベットが半分残念そうに、そう告げた。

「優しい味ね、コゼット」

「ありがとうございます、お嬢様……いえ、カレン様」

　カレンの言葉に、コゼットは彼女の料理のように優しい笑顔を見せた。

「ほら、アーネストも。何か言うべきことがあるでしょう？」

　肉料理に夢中だったアーネストは、そう言われて慌あわてて肉を置き、コゼットに向けて頭を下げた。

「……たいへん美お味いしかった、です」

「ありがとうございます」

「……その、あの、ええとですね、あ、いや、大したことでは……その、ないんですが」

「はい？」

　頭を掻かき、頰ほおを赤く染めつつ、アーネストはどうにか言葉を繫つないだ。

「よければ、レシピを……」

「ええ、あとでお渡しします」

　はぁ、と胸を撫なで下ろすアーネストを見て、コゼットはくすくす

と笑った。

「そう緊張しなくてもよろしいかと……。これから、長い旅に出る仲間なんですから」

「はぁ……」

　それでも照れ臭くさそうなアーネストに、コゼットがすっと手を差し出す。

「よろしくお願いします、優しそうな執事さん」

「うぇぇ!?」

「……！」

　アーネストはその言葉に、ヒキガエルが潰つぶれたときのような声をあげ、カレンも彼女の言葉に瞠どう目もくした。

「あ、あの……優しい、とは？」

　驚きよう愕がくのあまり言葉も出ないアーネストの代わりに、主であるカレンが恐る恐る尋たずねる。

「優しそうな、眼をしていますからそうじゃないかなと思ったんですが……違い、ますか？」

　小首を傾かしげる彼女に、カレンは慌てて首を横に振った。

「ち、違いません。……その、アーネストは優しいです」

「では」

　改めて手を差し出すコゼットに、アーネストはおっかなびっくり手を差し出した。アーネストは、力を入れずに──あまり強く握ると壊してしまわないかどうか心配だった──彼女の手を握り返した。

「レシピは後で清書してお渡しします」

「い、いえ、航海が終わってからでも……」

「大だい丈じよう夫ぶですよ、それほど手間ではありませんから」

「しかしそれは……」

「アーネストさん」

　コゼットはきっと眦まなじりを釣り上げて彼を見た。

「私が、そうしたいのです。……この味が見知らぬ方にも伝わるなら、それに勝る喜びはありませんから」

「……ありがとう、ございます」

「いえいえ……」

　アーネストは照れ臭そうに手を離す。

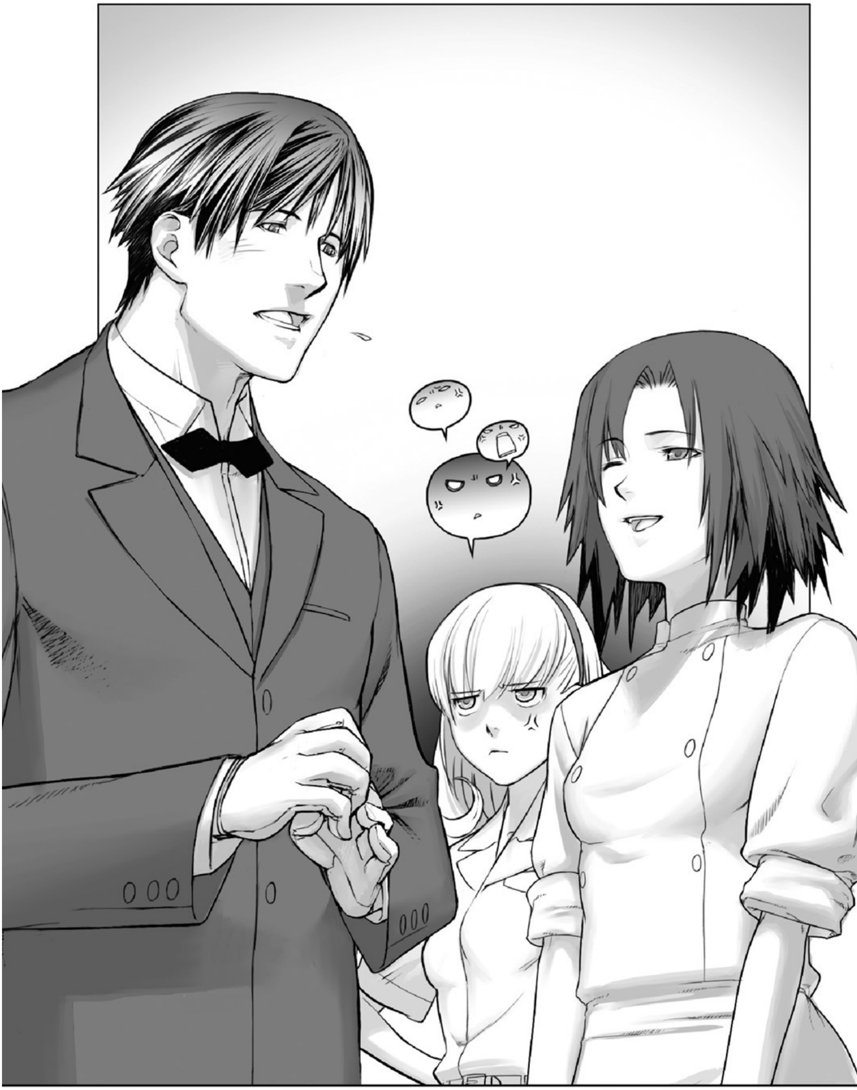
　微妙な間が二人を支配している。カレンがゴホゴホと咳せき払ばらいすると、慌あわてたようにアーネストは後ろへ退がった。

「それでは、失礼します。カレン様、アーネストさん」

　コゼットはもう一度頭を下げると、調理場へと戻っていった。

「……」

　惚ほうけているアーネストに、カレンが弱くふくらはぎを蹴けった。



「……お嬢様？」

「デレデレしてんじゃないの」

　不機嫌そうにそう告げて、カレンは皿を置いてすたすたと客人用の広間を去った。

「……お待ちを……！」

　その背中を、慌あわててアーネストが追いかけていく。

　だがカレンの健けん脚きやくはあっという間にアーネストから離れ、廊ろう下かの角を曲がったところで姿が消えた。

「……お嬢様……」

　だが、アーネストは確実に歩を進ませていく。最短で屋敷を飛び出し、真っ直ぐにドックへと向かっていった。

「……む、さすがに早いわね」

　カレンが不ふ貞て腐くされたように告げた。

「あ、あの……どうも、その……」

「安心して。……自然にあそこを離れるきっかけが欲しかっただけよ、私は」

　カレンはすっかり機嫌を直しているようで、笑顔でそうアーネストに言った。

「ええと、それじゃあ別に怒っている訳では……」

「全然。怒ってないわよ、ふふふ、照れたアーネストを見るのは面白かったけど、ね」

　カレンはアーネストを見てはいない。彼女の目は、〝イエスラス〟に釘くぎ付づけになっている。

「……」

　アーネストも、釣られて〝イエスラス〟を見上げた。全長80mモールの巨大な怪物。

「ナイフで私たちの名前でも刻んでおきたいわね」

「ナイフの刃が通りません」

「分かってるわよ、言ってみただけ」

アーネストはようやく、〝イエスラス〟から眼を離して、己の主を見た。

どこか哀しそうに、彼女は〝イエスラス〟に手を差し伸べた。もちろん、外がい殻かくに手は届かない──見ようによっては、手を振っているようにも見えただろう。

「アーネスト、私たちは明日あの船で旅立つのよ」

「……はい」

「怖い──？」

アーネストは首を横に振った。恐怖はなかった。ただ、「本当に海底へと向かうのだな」という奇妙な感かん慨がいがあった。

「そう、強いのね」

いいや、違う……とアーネストは思った。彼が怖いのは、カレンが自分のあずかり知らぬところで理り不ふ尽じんに死ぬことだった。

それだけは、嫌だった。それは、おおよそ執事にとってあってはならない事態だ。

「私は、怖いわ」

だろうな、ともアーネストは思った。怖くないはずがない、アーネストのような執事としての奇妙に捩ねじれた使命感──どうせ死ぬのであれば、お嬢様と共に。もしくは、お嬢様の命を救うためならば、不死の王ノーライフキングに魂たましいを売ってもいい──そういう類たぐいのものが、彼の恐怖を他よ所そに追いやっていた。

「でも……不ふ謹きん慎しんかもしれないけど。冒険家アドベンチユラーとしての本能かしら、ワクワクするの」

アーネストは微かすかに驚いた。冒険家アドベンチユラーとしての本能！　ルイスは口くち癖ぐせのようにそう言っていたが、カレンはついぞ、その「本能」について語ったことはなかった。

「未知の海域、ディルビック号をも沈める謎なぞの怪物……怖いし、死ぬかもしれない、その可能性は結構高いかもしれない。でも、止められないの。見てみたいの、誰も見たことのないものを。知りたいの、誰も知らなかったものを……！」

そう言って、カレンは振り向いてアーネストを見た。その瞳からは

高こう揚よう感が消え失せ、隠しきれない怯おびえがある。

「でも。……でも。いくら何でも、アーネストが付き合うことはないと思うわ」

「……お嬢様」

　アーネストの言葉に、カレンは首を横に振る。

「だって、私たちが行くところは海の底なのよ？　アーネストは凄すごく強くて、凄く頼りがいがあるわ、本当よ！　でも、海の底に住む怪物では……守りようがないじゃない」

「……それでも」

「貴方あなたはどう思っているか分からないけど……私は……私は、貴方のこと大事な家族だと思っているわ。お父様もお母様も仕事で不在の毎日に耐えられたのは、アーネストがいたからよ」

「ありがとう、ございます」

　だが、礼を言うなら自分の方だ──ともアーネストは思った。

◇

　──八年前、自分が最初に知覚したのは、足の痛みだった。

　一歩歩くたびにズキリと痛む足。わずかだが、生ぬるい感触がするのは、己の血と泥だろう。

「────あ、ア」

　次に思ったのは──何故歩いているのだろうという疑問。記憶を掘り返してみよう、と彼は思った。だが、ふと気付けば痛みを堪こらえつつ、こうして歩いていたとしか思い出せなかった。

　それだけならば、寝ぼけたのかもしれないと笑い飛ばせる。だが、そもそも「自分は誰だ？」という根源的な問いが脳のう裏りに浮かび──。

「────あ、アアアァァ」

　それに己が答えられないと分かったとき、彼は絶望のあまり咆ほう哮こうした。

　思い出せない！

まったく、なにも、これっぽっちも！

なぜここにいる？　そもそもここはどこだ？　僕は誰なのだろう？　僕はなぜここに居るのだろう？　僕はなぜ生きているのだろう？　僕は、僕は、僕は、僕は――――！

突如、彼は無防備に歩くことにたまらない恐怖を感じてしまって、怯えて蹲うずくまった。どうしたのかね？　そう声を掛けられた途端、恐怖のあまり逃げ出した。

声を掛けてくる者は敵だった、自分を見る者も敵だった、世界が敵だったのだ。

逃げ出した、路地裏に蹲り、何がしたいのかも分からずにじっと待ち続ける。

野の良ら猫ねこを追い払い、残飯を貪むさぼり、待ち続けて、待ち続けて、やがて一人の男が現れた。

――言葉は分かるか？

耳の尖とがった、金髪の男がそう話しかけてきた。

言葉は分かった。だが、話しかけてきた男を彼は敵だと思った。殺意を篭こめて睨にらみつける彼をしかし、男は平然と話し続けた。

――ついてきなさい。もし、自分が何者か知りたいのならば。

その言葉は、酷ひどく少年の心を穿うがった。

自分のことを、彼は知っているのだろうか？　知っているのならば、教えて欲しかった。従順に手を引かれ、船に乗り、車に乗った。変わりゆく景色を見ながら――生まれて初めて見る景色のようにも、昔見ていた景色のような気もする――ぼんやりと思考を巡らせていた。

ルイス・マクレーンと名乗ったその男は、自分について何も語ってはくれなかった。食事はくれたし、服も綺き麗れいなものに替えられた。

それでも、ルイスは彼について何も語ってはくれなかった。

そんな風な毎日がしばらく続き、ルイスは「到着した」と一つの屋敷に少年を案内した。

広い屋敷だった、広いだけではなく、美しかった。天国に連れてこられたのではないか、本当の自分は、路地裏で蹲って死を迎えているのではないか、そう考えた。

　けれど、いくら頬ほおをつねっても夢から醒さめなかった。醒めないなら、醒めないままでいいと少年は思った。

　一人の少女がいた。自分より少し年下……たぶん、十歳かそれより下だろう、と少年は見当をつけた。

「ルイスおじ様。……その人、誰？」

　少年はやや怯ひるんだ。ルイスとの交流で、暴力的な感覚がすっかり鳴りを潜めていた分、彼女の敵意ある眼まな差ざしに困惑していた。後で少年が聞いてみたところによると、てっきり自分を机に縛しばり付ける家庭教師か何かではないか、と思ったのだという。

　━この少年は……。

　ルイスが少女に囁ささやく。

　少女の目が驚きに見開かれ、ますますもって困惑する。

　彼女が近寄る、思わず逃げ出したくなったが、我慢した。

「よく分かんないけど。今日からうちで働くのね」

　胸を張ってそう言われた。慌あわててルイスを見ると、彼は少年に頷うなずいた。

「……名前が、分からないの？」

　その声に振り返った、少女が立っている。

　少女は手を後ろで組み、ぼけっと立っている〝己〟を覗のぞき込み、ニッと笑った。

　太陽のように眩まぶしい笑みだった。呆あっ気けに取られたまま、彼は少女を見つめていた。

　彼女の笑顔から、目を逸そらせなかった。

「……アーネスト」

　少女は囁いた。

　その言葉の意味するものが分からず、首を傾かしげていると少女は爪つま先さきだって、少年の両頬に手を当てた。

「あなたの名前は、アーネスト。私が考えたの。いい名前だと思うんだけど、駄だ目めかな？」

太陽のような笑みが翳かげる。慌てて彼は首を横に振った。いい名前だと思ったから──ではなかった、ただ、自分のせいで少女の笑顔が翳かげることだけは許せなかった。

「本当？」

本当だ、というように首を何度も大きく縦に振った。

「じゃあ、決まり。……あなたの名前は、アーネスト！」

その名前が、心に刻まれたとき──アーネストは悟った。

自分に名前などなかったのだ、自分の名前を知る者などいなかったのだ、この世に自分の過去を知る者など、ありはしなかったのだ。

ルイスは嘘うそをついていたのだ。

──ああ、だけど。

それは優しい嘘だった。彼はここまで自分を連れて来て、名前を与えてくれる存在と引き合わせてくれたのだ。まったく、何の得もないだろうに。

少女は無む邪じゃ気きに、そして慈じ愛あいを篭こめて名前の無い少年が一番欲しかったものを与えた。

それは単純に〝アーネスト〟という名前だけではない。

少女が与えたものは、彼の人生そのものだった。

そうして、人生の始まりを一歩踏みしめた彼が最初にやった事は、他の者たちが最初に人生を踏み出すときと、何ら変わりのない行為だった。

即すなわち、人目も憚はばからず号泣したのである。

名前を与えられた途端、アーネストの人生はゆっくりと、着実に正しい道──少なくとも彼はそう信じている──を進んでいった。

使用人として働くことはまるで苦にならなかった。働くことと、自分が世界の歯車となることはイコールだった。自分が世界のどこかで、小さくとも良い影響を与えている……それは、己の過去を忘ぼう却きゃくしたアーネストにとって、何物にも変え難い喜びだった。

執事バトラーとなって、カレンを守ると決めたのも、決して彼以外の意思が介かい在ざいしたのではない。むしろ、レイジやペール

は反対した──我々は、君にそんな役割をあてがうために、育てたのではない、と。

　カレンは反対はしなかった。

　だが、同時に賛成もしなかった。どちらを選ぶにせよ、アーネストはその道を選ぶことが分かりきっているからだった。

　アーネストは、執事バトラーになりたいという望みを捨てなかった。レイジに促され、カレンは自分の気持ちを素直に吐と露ろした。

「お父様、お母様。……お二人の言うこと、本当に正しいと思う。でもね、私は……私は、アーネストが傍そばにいてくれると、誰にも負けないって自信が湧わいてきちゃうの」

「私も自分の夢を追いたい。お父様、お母様。私は冒険家アドベンチユラーになりたいの。ルイスおじ様……教授の下で、経験を積んで……冒険したいの」

　レイジとペールは混乱し、反対し、説教し、説得し、嘆なげき、最後に諦あきらめた。二人は申し訳なさそうに、アーネストに告げた。

「……頼む。私たちの愛しいじゃじゃ馬を守ってくれ」

「……はい！　全身全霊で……お守りします！」

　アーネストは普段の彼らしからぬ、ハッキリとした声で高らかに告げた。

　彼女は己の意志で、冒険家アドベンチユラーへの道を選んだ。

　彼は己の意志で、執事バトラーを選んだ。己に眠る力を行使し、あらゆる苦難からカレン・グリムスターを守る道を。

　そうして、アーネストは白手の学院フオレン・ソールに入学して、執事として必要な技術を学び始めた。

　カレンもまた、ルイス・マクレーンの下で考古学とそれに伴って必要な技術を学び出した。

　アーネストは礼れい儀ぎ作さ法ほうの点でも、戦闘技能の点でも、取り立てて目立つものはなかった。強しいて言うのであれば、話術の面で評価が低かったことは否いなめない。彼はどうにも初対面の者と話すときは、焦しよう燥そうに駆られ、言葉がつかえるのが常だった。

「それを直さないと、就職先の面接で落とされるわよ？」

そう忠告したのは、最優秀の執事として学院に君くん臨りんする渡わた良ら瀬せ雪ゆきだった。女性ということで、風当たりが強かった彼女が、普通に話しかけられるのは一部の者のみで、アーネストはその一人だった。

「……就職先は、決まってる」

「へえ、許可下りたの？」

「奨しよう学がく金きんを出してくれたのが……その家だから」

その言葉に、雪はなるほどと頷うなずいた。白手の学院フオレン・ソールには二つのタイプの執事見習いがいる。

雪の場合は執事になるべく入学し、一流の技を学び、執事を迎え入れたいと願う家と面接し、執事として仕える者。

アーネストの場合は、執事の技を身につけるためにその家から送り出されたタイプだ。就職先が予あらかじめ決まっているため、きちんと学び、卒業さえすればそれで構わない。もちろん、この場合はどうしようもない三流執事が仕える可能性もあるのだが。

「でもね、それに甘えてちゃ駄だ目めだと思うわよ、私は」

少し厳しい目をする雪、アーネストはうな垂だれた。まったく彼女の言う通りだ──自分でも、この癖くせはどうにかしなければ、と思っているのだが。

残念ながら、それは叶わなかった。互いに卒業するその日、雪はアーネストに「しょうがないわね、もう」と苦笑した。その後にこう付け加えたが。

「──でも、あなたはそれでいいのかもしれないわ」

アーネストはその言葉に慰なぐさめられたものの、最後まで問題を乗り越えられなかった自分を深く恥じた。

……とはいえそれ以外の礼れい儀ぎ作さ法ほう、戦闘技術において問題は見られなかったため、彼は無事に学院を卒業し、兼ねてからの希望である派遣先も叶えられ、執事バトラーとしての正式ライセンスと共に、グリムスター家──カレン・グリムスターに仕えることになったのだ。

「お帰りなさい、アーネスト！」

「……お嬢様」

　グリムスター家に帰還したアーネストを待ち構えていたのは、少し大人びたカレン・グリムスターだった。

「執事の服、似合っているわよ」

　アーネストは照れて、恥ずかしげに俯うつむいた。十日に一度か二度はグリムスター家に戻っていたのだが、こうして改めて見ると、カレンは美しく成長していた。けれど笑顔だけは、前と変わらず太陽のようだ、ともアーネストは思った。

「お嬢様も、その……お、お、お」

「お？」

「お綺き麗れいに……なられました」

「……」

　目を見開いて、カレンは沈黙した。

「本当です」

「え、あ……その。あ、あ、あ、ありがと。嬉うれしい……かな？」

　カレンも頬ほおを赤らめて、顔を俯うつむかせた。

「……そう言えば、初めてな気がする」

「何がですか？」

「アーネストが、そういう風に私のことを褒ほめてくれたのって」

　──そう言えば、そうかもしれない。

「……白手の学院フオレン・ソールで褒ほめ言葉も教わったの？」

「い、いいえ。……今のは、私の、本心です」

「そう、だったら嬉うれしいっ」

　カレンはアーネストに抱きついた。

「これから、一いつ緒しよに冒険するんだからね。いっぱい、いっぱい、いっぱい！」

「……はい。お供します……お嬢様」

◇

　そうして、いくつもの遺跡を、秘境を、洞どう窟くつを旅し、失われた秘宝や歴史の遺物を求め続けて──カレン・グリムスターとアーネスト・ヒギンズはこのドックに立っている。

　偶然がもつれ、積み重なければここにはいないだろう。

　冒険家アドベンチユラーを目指さなければ、執事バトラーになろうとしなければ、否いな、そもそもグリムスター家でなければ、この〝イエスラス〟に乗ることはできなかったし、乗ろうとも思わなかったろう。

「……」

　苦難の旅であることは間違いない、そして命の保証もない。

　それでも、カレン・グリムスターは迷わなかった。これは彼女の家の問題なのだから。

　けれど……けれど、果たしてアーネスト・ヒギンズはそれでいいのだろうか？

　カレンの苦悩はその一点。

　アーネストにはその苦悩が分からない。自分は執事であり、彼女を守るのが仕事──いや、宿命なのだ。そう思っている。

「本当に、いいの？」

「……もちろん、です」

　アーネストはキッパリと言い放った。迷うことなく、己の意志を告げてカレンの苦悩を和やわらげようとする。

　カレンはようやく、柔にゆう和わな表情でアーネストを見た。互いの過去を振り返り、奇妙なことになったと感慨に耽ふける。

「……ねえ、アーネスト」

「はい」

「航海が無事終わったら、少しゆっくりしない？」

「ゆっくり……？」

「美お味いしい食事のお店に行って、二人でお腹なかがはちきれそうになるくらいに食べて、それから他の国を巡りましょう？　今までは行っても未開の原始林とか、遺跡とか、そんなとこばっかり行ってた

し……どう？」

「よろしいかと」

「む、嬉うれしそうじゃない」

「う、嬉しいですってば」

「本当？」

「本当です」

「……うん、信じる」

　貴婦人のように手を差し出すカレンに、アーネストは応じた。しゃがみこみ、そっと手の甲にくちづけする。

　誓ちかいのくちづけであり、忠誠のくちづけでもあった。

　立ち上がるアーネストは照れ臭くさそうだったが、手の甲へのくちづけなどに慣れているはずのカレンも頬ほおを赤らめていた。少なくともこの瞬間、カレンとアーネストから、恐怖というものは消えていた。

「じゃあ、そろそろ寝ましょうか。アーネスト」

「そうですね……おやすみなさい、お嬢様」

――――英雄暦１９３９年甲冑月（８月）ノ28日

　翌日。

　全員が、やや緊張した面おも持もちでドックに整列していた。彼らの目の前にいるワイズマン六十三世は、片膝を突いて、彼らの顔を一人一人、覗のぞき込んでいた。

「諸君。……私が出来ることはもう、存在しない。できれば、私もディルビック海域の謎なぞに挑みたかったが……あと、二十年経たないと私用の潜水艦は完成できそうにないのだ」

「……ミスター。ひょっとすると、ミスターの夢は……」

　うむ、と穏やかにワイズマンは笑った。だが、その笑みはどこか寂しそうでもあった。

「私も、深海に挑みたかったのだよ。このゴルトロックの七割を占しめるという海、まだまだ謎が多すぎる！」

　―なるほど、とカレンは思った。

　彼にとって、この〝イエスラス〟はまだまだ実験段階のものだったのだ。

　最終的には、ジャイアントである自分自身を載せる潜水艦を作りたかったのだろう。それで、海に向かいたかったのだ。人がまだ見ぬ場所―深海の世界へ。

「だが、ひとまずは君たちに譲ゆずろう。行きたまえ、諸君。見果てぬ闇の底で、何かを見つけて来るがいい」

　その言葉に、乗組員は一斉に前日覚えたソレイシア海軍式敬礼を返した。

「ようし、どんどん入れ！　モタモタするな、さっさとしやがれひよっ子ども！」

　ルイスが、カレンが、アーネストが、フィールタン兄弟たちが次々と〝イエスラス〟に乗り込んでいく。狭苦しい通路を早足で歩き、ルイスは司令室へ、カレンたちは機関室へと向かった。

　ワイズマンはコゼットとホワイトビュー以外の全員が乗り込んだのを確認し、二人に声を掛けた。

「それでは、ホワイトビュー……彼らをよろしく頼むぞ」

「任せておけよ、ワイズマン」

「ミス・コゼットも。よろしく頼む」

「はい、ミスター・ワイズマン」

　コゼットは掛けられたその言葉に、こくりと頷うなずいた。

「……くそ。コゼット、お前やっぱついてくるのか？」

「当然でしょう、ミスター・ホワイトビュー。あなたが降りるというのであれば、私も降りますが？」

「……あんたを死なせたら、セルマお嬢様に恨まれるんだろうなぁ、やっぱ」

「ふふ、その時は世界中を逃げ回る方がよろしいでしょうね」

「くそ、恨うらまれないためにも絶対生きて帰るぞ！　お前が死んだら俺も死ぬ！　……なんか、その方がマシな気がしてきた」

「プロポーズの言葉と受け取っておきましょうか？」

「……そうしてくれ、もう……」

　肩を落としつつ、ホワイトビューも〝イエスラス〟に乗り込んだ。

「それではミス・コゼット」

　ワイズマンが小指を差し出し、コゼットはしっかりとそれを手に握った。

「畏かしこまりました。彼をしっかりとお守りします。この──」

　コゼットが取り出したのは、かつて彼女が復ふく讐しゆうを為すために用いたというグロテスクな〝仮面〟だった。

「仮面にかけて」

　ワイズマンは顔をしかめて言った。

「だが、その仮面は確か──命を縮めるとか」

「かつてはそうでした。ですが、ミス・エルネスタのお陰でその呪いに関しては問題ありません。この禍まがが々まがしい仮面には、〝竜ドラゴン〟の祝福が篭こめられています」

　バジリスクの呪いから解放されたその骨の仮面はいま、ドラゴンの血によって新たな力を得た。最強の竜人ドラゴニュート、セルマ・フォルテンマイヤーの血によって。

「ふうむ、ドラゴンの──」

「元より、私は常人より寿じゆ命みようが短い身。なれば、今の内にこの体を役立てておきたいのです。どうか、ご心配なく」

　仮面を再び懐ふところに隠し、最後の乗組員──コゼット・レングランスが〝イエスラス〟に乗り込んだ。

　ワイズマンが見守る中、〝イエスラス〟は轟ごう音おんと共に動き出した。もう、彼らの顔を拝むことは当分ない。

「旦だん那な様」

　執事であるジーバスが声を掛けた。ワイズマンはしばらく、〝イエスラス〟をじっと見ていたが、やがて未練を断ち切るかのようにジーバスに顔を向けた。

「どうした？」

「フォルテンマイヤー様より、お電話が入っております」

「うむ」

　彼はドックに備え付けられている彼専用の電話──当然、ジーバスには抱えることも難しい──を手に取り、回線を繋つないだ。

「ワイズマンだ」

　高く、澄んだ綺き麗れいな声が耳元で響いた。

「おはようございます、ミスター・ワイズマン。……〝イエスラス〟の方は無事出航いたしまして？」

　その声に、ワイズマンは穏やかな笑顔を見せつつ応じる。

「セルマか、無事出航したよ。あとは我々に出来ることはない」

「そう、ですか……」

「コゼットが心配かね？」

「ええ、それはもちろん。……私が反対したと、彼女に聞きました？」

「いいや、聞いてない。まあ、予想はしていたがね」

「もう、本当に。こんな危険な任務に志願するなんて。コゼットったら、何を考えているのかしら……」

　少女の愚ぐ痴ちに、ワイズマンは顔を綻ほころばせた。口調からも、とても心配している様子がよく理解できる。彼女にとって、コゼットはとても大切な存在なのだろう。

「ふむ……いくつか理由は説明できるよ、セルマ」

「教えて下さい、ミスター」

「まず一つ目。君の役に立ちたかった。これは当然だろうね。君が困っているならば、助けたいと願うのは当然だろう」

「それは、分かりますけど──」

「二つ目。適役が自分だという自覚があった。彼女は君や私の執事のように、名前や顔が知られている訳ではない。実力も飛び抜けてい

る。いざという時、冷静に判断できるのは自分だという自負があるのだろう」

「それも、分かります。……正直、ＦＢＩでは荷が重かったかもしれませんし、荷が重くない人物には、それなりに重い仕事がありますから」

「ここまでは、多分セルマにも分かっていただろうと思う。三つ目はどうかな？」

「──分かりません」

「君とコゼット自身から、大まかな彼女の事情は聞いている。元々の体ではないこと、バジリスクの仮面でさらに身体能力を強化したこと……」

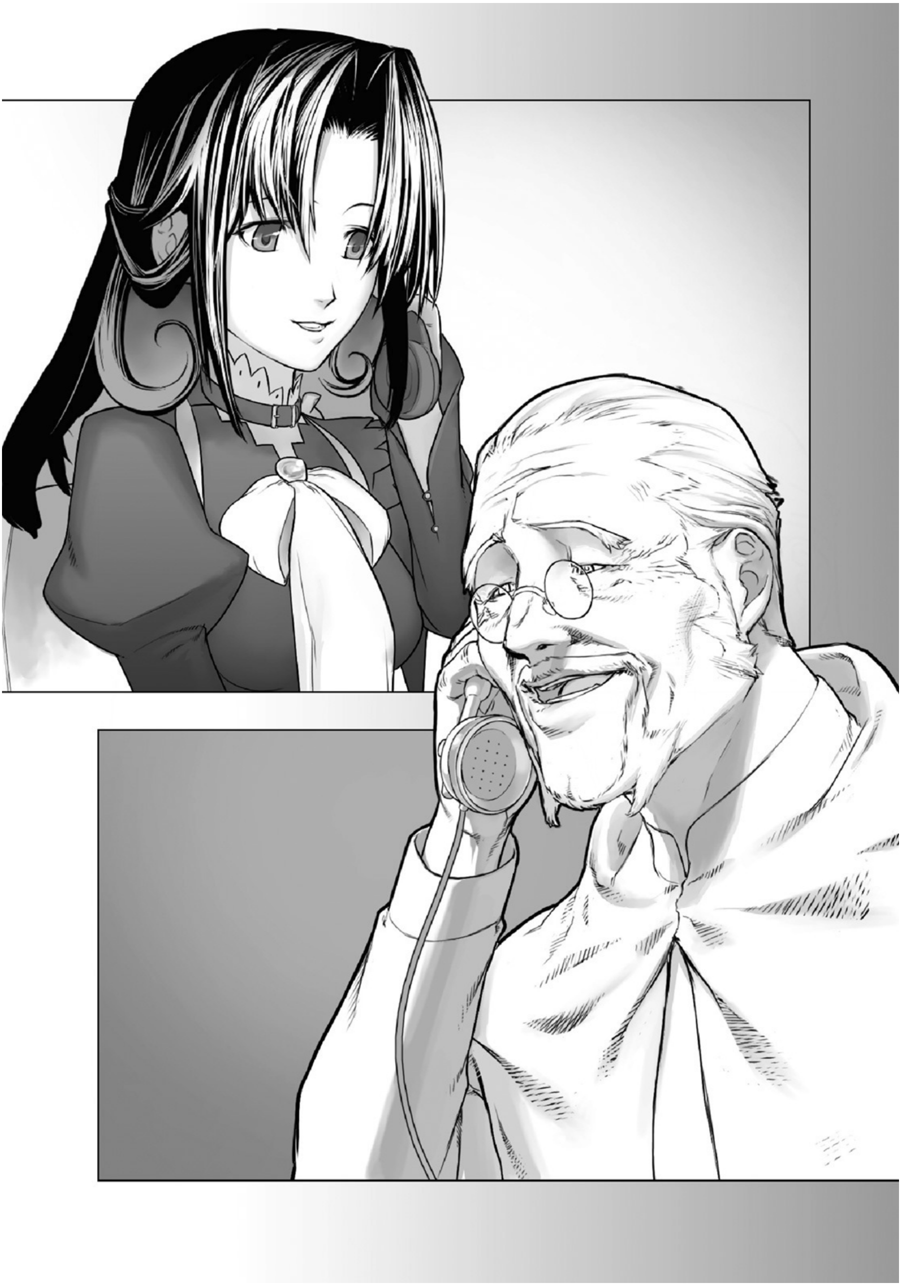
「それに、今はもう必要ない力であることも、です」

「それはどうかな？　コゼットにとっては必要ないのかもしれない、だがカウラにとって話は別だ」

「……カウラにとって……？」

「〝ひねくれ者〟から、カウラという存在については聞かされているね？」

　ワイズマンはひねくれ者、という言葉を妙に愛いとしそうに呟つぶやいた。ひねくれ者とは、ワイズマンやセルマと同じ〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟──ゴブリン、ザボン・ハブルの事である。



　コゼット・レングランスが禁きん呪じゅを使って交換したカウラ・ロイ・ラガスという肉体は、冒険家アドベンチユラーにして狂戦士バーサーカーだった。

　それは彼女が命を賭かけるに値する目的のためだった。しかし、もう終わったことだが。

「はい、それは知っています。でも……でも、コゼットは……」

　セルマの困惑した声。

「分からないかね？　カウラもまた、恐らく未知のものを好む冒険家アドベンチユラーだったのだよ。狂戦士バーサーカーとなってもなお、その心だけは失われなかった」

　しばらくの沈黙のあと、セルマはおずおずとワイズマンに尋ねた。

「つまり、コゼットは……カウラとしての冒険心みたいなものが、この危険な旅路に駆り立てたと？」

「そうだよ。危険を冒してでも……１０００ｍモールの海底に行ってみたかったのさ」

「はぁ」

　セルマは多少、納得いかないような返事を発した。

「コゼットは……家に居るのが好きな人だったから、ちょっとギャップに驚きました」

「未知の領域に挑もうとする勇気も、大切な場所を守りたいという勇気も、どちらも〝人〟としてなくてはならないものだよ、セルマ」

「分かりました。……これからしばらくの間は、毎朝毎晩、お祈りすることにしますわ」

「エル・アギアスに？」

「ええ、彼女に幸運を。〝イエスラス〟に幸運を」

「〝イエスラス〟に変わって礼を言おう。それでは、さらばだ」

「はい、ミスター。さようなら、次に電話するときが喜びのニュースであることを願います」

「ああ……もちろんだ」

電話を切ったワイズマンは、既に姿が見えなくなった〝イエスラス〟に想いを馳はせた。

しばらくの間は、潜航せずにそのまま海面を進むだろう。これが軍用潜水艦ならば、潜航する意味もあろうが、あくまで調査を目的とする潜水艦だ。既に海域周辺の国々の了解は得ている。無む駄だに潜航する必要もない。本番まではせいぜい、試験潜航が一度というところだろう。

夕陽が照らし出す中、海面を押し進む〝イエスラス〟の勇姿──それを頭に思い描きながら、ワイズマンはドックから立ち去った。

第二章

――――英雄暦１９３９年甲冑月（８月）ノ28日

〝イエスラス〟

　空は俄にわかに曇りだしていた。どんよりと濁った灰色の空だ。艦かん橋きようで景色を眺めていたルイスはため息をついた。

　海は青が濃すぎて、ほとんど黒色といってもいい。陰いん鬱うつ極まりない景色だった。

「教授――じゃなかった艦長。試験潜航の準備ができました」

　カレンの言葉に、彼はパイプから口を離して頷うなずいた。

「しばらく空と海は見納めだというのに、こんな色とは気分が塞ふさぐな。やれやれ」

「いいじゃないですか。名な残ごり惜おしいという気がなくなります」

　答えるカレン、ルイスは苦笑いを浮かべた。

「そうだな。次の空は青いと思うことにしよう」

　カレンの後を追って艦橋から降りた、その際ハッチを完全に閉じたことをカレンと共に確認し、梯はし子ごを下って気密室を通過した。カレンは機関室へ、ルイスは司令室へと向かう。

「ジャン、状態は？」

「ハッチ閉鎖確認。全システム異状なし、潜航準備よし」

「機関異状なし、精霊エレメンタルも限度レベルを３下回った状態で平静を保っています」

　ルイスは念の為に、電気、精霊、油圧の計器盤を確認した。

「では、潜航する」

　騒がしくサイレンが鳴り響き、乗組員が一瞬動きを止めた。だが、緊急ではなく潜航及び浮上を表わすものだと分かって、すぐに全員が作業へ戻った。

「潜航開始。メインバラストタンク、前部トリムタンク、注水。潜航

角度十度」

「潜航開始、角度十度！」

　ごぼごぼと音を立てて、〝イエスラス〟を海面に浮上させていた空気が追い出されていく。代わりに注入された海水がゆっくりと艦を沈ませる。

「20mモールまで潜航」

「50mモールで水平状態を保て」

「アイ、サー。50mモールで水平状態保て」

　〝イエスラス〟はルイスの指示通り、40mモール到達時点で艦尾と艦首の重量バランスを調節し、ゆっくりと水平状態へと移行していく。

「深度50mモール到達。水平状態」

「機関出力20％まで落とせ。速度は現状の二分の一を保て」

　その他の全ての場所で異状がないことを確認すると、艦長であるルイスは教官であるホワイトビューに改めて報告した。ホワイトビューはいくつか、質問をし、ルイスは澱よどみなくそれに応じる。

「よろしい」

　ホワイトビューは頷うなずいた。

　ルイスが艦内放送のマイクを手に取り、全乗組員に告げる。

「諸君、試験潜航は無事終了した。これから当面の間は海中を進むことになる。ディルビック海域に２００ｋｍセツトまで近づいてから、浮上して全箇か所しよをチェック」

「アイ、アイ、サー」

「観測手は二時間後に交代しろ」

　艦長の前方に座って、目を閉じている観測手──〝遠えん視し〟の魔法による、前方視界の確保を担当する者──が「アイ、アイ、サー」と告げた。

　観測手の〝遠視〟と、潜望鏡によって状況を判断するのがこの世界、この時代における潜水艦の常識だ。

観測手サティ・モントルフの視界には、狭苦しい艦内ではなく、無限の海が映っている。首を傾けて上方――つまり、海面を見つめた。どちらにも〝イエスラス〟の進行を妨げるような障害物は存在しない。

海面ではウミネコが船体の傍に寄って鳴いている、海中では魚の群れが〝イエスラス〟が近づくたびにビクリと震えて遠くへ立ち去っていた。

異状はない、その傾向もない。これが軍事作戦ならば、さすがにこのようなリラックスした状態で航行することはできなかっただろうが、彼らはあくまで調査のためにディルビック海域に向かっている。各国の海軍も承知の上なので、魚雷の奇襲に悩まされることもない。

――ずっとこんな調子だと楽でいいわね。

そんな事をサティは考えつつ、視界を左右に動かした。右う弦げん、左さ弦げん方向に異状はない。そして下……即すなわち海中を真下に、さらに深く覗のぞき込んだ。

「……？」

首を傾かしげたサティに、副ふく操そう舵だ手しゅであるマイケル・ソウヤーが声を掛けた。

「どうした？」

「何でもないわ。……かなり深いところに影が見えた気がしたの、気のせいよ」

サティはそう言って、再び前方を注視し始めた。

これから五日間は当面、この状態が続くだろう。サティは既に飽あきかけていた。潜水艦など、いっそソナーと潜望鏡だけで動かしてしまえばいいのに――と、彼女はうんざりしながら思った。

◇

カレンとアーネストは共同で、エンジンの調子を確認していた。アーネストがリストを持ち、カレンがそれらを一つ一つ確かめていく。

「精霊エレメント……状態チェック。限度レベルよりマイナス３。問題なし」

「ウィッチタービン……チェック。内ない燃ねん魔マカナの状態、クリーン。問題なし」

「バルブチェック……問題なし」

「精霊エレメントのご機嫌は？」

「許容範囲内かと」

　カレンは一か月を通して慣れ親しんだエンジンにちょっとした故障箇か所しよでも存在しないかと、目を皿のようにして眺めていた。アーネストはそれに合わせ、機関の調査箇所に次々とチェックマークをつけていった。

「アーネスト、艦長に定期報告。チェックリストオールクリア。現状エンジンに問題はありません」

「了解。チェックリストオールクリア、現状のエンジンに問題はなし」

　アーネストはマイクを摑み、艦長──ルイス・マクレーンに現状を報告した。

「了解。第二メンバーに交代だ。三時間の休きゆう憩けいのあと、復帰してもらう」

「第二メンバーに交代、休憩は三時間。了解しました」

　アーネストはカレンにそれを伝え、やってきたフィールタン兄弟と交代。二人して、居住地区へと向かった。

「どうしようか、アーネスト。シャワー浴びてから食事にする？　食事にしてから、シャワーを浴びる？」

「……それを決めるのは、お嬢様では？」

「だって、どっちでもいいもーん」

　そう言いつつ、彼女は油などで汚れたタオルで汗を拭ぬぐった。それではますます顔が汚れるだけだろう、とアーネストは慌あわてて替えのタオルでカレンの顔を拭う。

「んっ……ありがと」

「いえ……」

「綺き麗れいになった？」

「はい」

「……そこは、『お嬢様はいつでもお綺麗ですよ』と返すべきじゃないかしら」

「いつもお綺麗ですが、今はもっと綺麗になりました」

「ええと。……ありがとう」

　少し弛し緩かんしたような雰ふん囲い気きだった二人の間に、のんきな声が投げかけられる。

「おーい、悪いんだがイチャつくのは個室かどこかでやってくれ」

「……イチャついてなんかいないわよ、からかわないで、ホロウスキー」

　ムッとしたような表情で睨にらむカレン。声を掛けてきた男に、頭を下げるアーネスト。

　筋きん骨こつ隆りゅう々りゅう、クルーカットにタンクトップ。肩に刺いれ青ずみ、全身に引き攣つった傷痕、一見は軍人風だが、彼は軍隊経験はないと自称している、傭よう兵へいとしての経験があるのかもしれない。

　弟子とはいえカレン、アーネストとは大した交流があった訳ではないが、この一か月ですっかり互いに馴な染じんでしまった。

「教授がどっかのご令嬢を弟子にしたって聞いたときは、あのエルフめ、見た目と裏腹にとうとうボケが始まったのかと思ったが、どうしてどうして……」

「次の言葉は、当然褒ほめるのよね？　褒めてなきゃブッ飛ばすわよ？」

　カレンは笑顔を浮かべつつ、人差し指と中指をワキワキと動かし始めた。

　しばしの沈黙のあと、ゆっくりとホロウスキーが告げた。

「……どうしてどうして、大たい層そう才能のある冒険家アドベンチュラーで」

「いよし！」

　ガッツポーズと共に、カレンは上機嫌で立ち去り、残された二人はやれやれと肩を竦すくめた。

　食堂では、カレンが既にコゼットから渡されたランチを抱えてい

た。

「シャワー浴びる前に、とりあえず何かお腹なかに詰めておきましょ」

「了解です」

〝イエスラス〟の食料は、現在の搭とう乗じよう人員二十二名が三か月暮らせるだけの量を積載している。とはいえ、その内一か月分は緊急用の保存食であり、従って味はあまりお勧めできないものらしい。

「それで、アーネスト。これからの予定だけど……」

そう言いつつカレンはポケットから手帳を取り出した。

「順当に行けば、あと五日でディルビック海域２００ｋｍセツト地点まで到達するわ。そこから先はゆっくりと深度を下げながら航行する。もしこの時点で何らかの異状があれば、そしてそれが、深度の限界を示すものであれば、諦あきらめるしかないわ」

多分大だい丈じよう夫ぶだけど、と最後に付け加えてカレンは腕組みした。

「問題は──そこに何が待っているか、よね」

「〝何か〟についてですか？」

カレンは頷うなずき、口を開きかけたところで隣に佇たたずむ人の影に気付いた。

「いいかね、カレン、アーネスト？」

「教授……もとい、艦長。どうしたんですか？」

「おいおい、君たちは私のような老いぼれを二十四時間働かせるつもりかね？　私も休きゆう憩けいだよ」

よっこいしょ、と腰を下ろしつつルイスは言った。

とはいえ、外見だけは青年の域を越えないのでどこか老人のような仕草は些いささかギャップがあった。カレンはそれにいつまで経っても慣れることができない。

「それで、〝何か〟についてだが」

「あ、はい……それが、何なのか少しは見当をつけておこうと思っ

て」

「ふむ。幾度か話題に出た事は出たが、全員潜水艦を操るのに忙しくて、それどころではなかったしな。第一、手がかりが少なすぎる。だが、考えないよりは考えておく方が遥はるかに有意義だろう。」

「ええ。せっかくだから、暇な内に考えておこうかなって」

「ふむ。……では、カレン。君の考えを述べたまえ」

「はい。まず、ディルビック号を沈めるという点で並外れた怪物であることは推測されます。ただし、それが量によるものなのか、質によるものなのかは分かりませんが……」

「量の場合なら、凄すさまじい数の魚、あるいは魚以外の生物……」

「質の場合なら、それこそ20……いえ、30mモールを越える怪物ならば、そしてディルビック号のミスリル合金にある程度の衝撃を与えるだけの破壊力を持つならば……」

「……あの、お嬢様」

「なに？」

「そんなもの、この世に存在するのですか？」

「どちらが？」

「どちらもです」

「……そうね、まず量の場合は……可能性がなくもないわ。ただ……数千万、あるいは一億を越える魚あるいは怪物の群れが襲い掛かったはずだから、何らかの意識統一がされている可能性があるわね」

「意識統一？」

「億を越える群れの中のただ一匹……それが自然、あるいは何らかの要因による突然変異で知恵を授かり、彼の意思に群れの全てが従っている……」

「果たしてそれはどんな怪物ですか？」

「分からないわ、魚？　魚以外の海中生物？　蟹かに……は無理ね、海うみ蛇へび？　でも、海蛇が億単位で集まれば、さすがに周囲が気付くわよねえ……」

「では、質の場合はどうなるかな？」

　ルイスの言葉に、カレンは首をひねりつつ考えた。

「そうですね──あくまで推測ですが平均30ｍモールを越える怪物。それも複数匹でしょう、性質は極めて凶暴、狡こう猾かつ、残忍。あとは……そうですね、何らかの原因で魔マカナを扱えるようになったということが考えられます」

「ほう。──なぜ？」

「ディルビック号の船体は、ミスリル合金と鋼はがねが主です。ミスリル合金は確かにミスリルの純度こそ30％以下……Ｃランクですが、ミスリルと鋼の材質そのものは良質です。船底部分に関しては、ミスリル合金がフルに使われているはずです。生なま半はん可かな攻撃では破壊不可能です」

「つまりお嬢様、30ｍモールを越える怪物が……」

「魔力を伴いつつ、凄すさまじい速度で激突した……あるいは、何らかの武器を使用した……あたりかしら」

　三人は揃そろって考え込んだ。この広大な海においても30ｍモールを越える怪物となると、そうそう存在しない。

「シーサーペントはどうでしょう、お嬢様」

　シーサーペントとは巨大な海蛇だ、体長は20ｍモールから40ｍモールの間というところか。性質は極めて凶暴で、最近でも船乗りが襲われ、数人ほど丸飲みにされたらしい。

　だが、カレンは首を横に振った。

「30ｍモールは越えているでしょうけど、ディルビック号を沈没させるほどの力はないと思うわ。クラーケンは？　確か、記録によれば１００ｍモールを越えたのがいたそうですけど……」

　クラーケンとは、既に絶滅したという巨きょ大だい蛸だこである。頭脳はなく、海底に潜んでひたすらに通りがかる船を襲うという船乗りにとって厄やっ介かい極まりない怪獣であったが、固体数があまりに少ないことと、同じ海底に潜んでいた巨きょ大だい鮫ざめとの生存競争に敗れたという。

「私が知る限り、クラーケンはかれこれ三百年前に絶滅が確認されたようだが？」

「一匹くらい生きていたっておかしくないと思います」

「ふむ……良い、とは思うが……及第点には遠いな、カレン」

「どうしてですか？」

「あれは、海の水が比較的温かい南方の限られた海域にしか存在できなかったモンスターだ。ディルビック海域は通常よりやや低い温度でしかない。わずかな温度の差だが、クラーケンがそこにいるのは、少々問題があるんじゃないか？」

　先ほどからアーネストは口を挟はさめず、二人の顔を交互に、興味深そうに見つめている。

「私はそうだね……メガロドンを推おすね。推定体長30ｍモール、体重20ｔアガラツトという、まさに海の覇は王おうだ」

「サメ……ですか」

　メガロドン、二千年以上前━つまり、八英雄時代より遥はるか以前から生き残っているという巨きよ大だい鮫ざめである。なぜか、深海５００ｍモール以下でないと短時間しか生きられないという欠点を持っており、それが為に近年の技術発展による深海調査がなければ、伝説上の生物として扱われ続けていたに違いないという、まさに〝幻獣〟のような存在だった。

　最悪なのは鼻先に己の魔マカナを溜め込むという性質を持っており、その部分だけならば一角獣ユニコーンの角を越える硬度だという。クラーケンを多数仕留めたのも、その鼻の特性ゆえだ。

　〝海の覇王〟━凶暴性、戦闘能力、全てが陸上及び海中の一般的な生物を遥かに上回っている。これに対抗できるのは、陸では古の竜ファーヴニルくらいのものではないか、と言われているのだ。

「時速80ｋｍセツトを越える速さで獲物を追跡するんだ。たまたまディルビック号を獲物と狙い定め、船体に激突したのかもしれない。……ディルビック号の三分の一の大きさのサメが、高速で激突する……私はそこに、沈没の可能性があったと見ている」

「でも、メガロドンが船と激突するほど浮上したという記録はなかったと思います。確か、深度５００ｍモールより上には行かないという……」

「よく調べているね、カレン。しかし、未だメガロドンの詳細は不明だ。何かの拍ひよう子しに、海面に浮かんだとも限らない」

「だったら、クラーケンが低温の海域で生き残っている可能性もあります」

「……ふむ……」

　カレンとアーネストは、いつしか激しく睨にらみ合っていた……とはいえ、本気の敵意ではない。意見が対立すると、二人は互いに険しい表情を浮かべて議論への熱意を高めるのだ。

「メガロドンは生存が確認されている、クラーケンは生存が確認されていない。これは大きなアドバンテージだと思うがね？」

「メガロドンには仮定が多すぎます。たまたま今まで浮上したことのないメガロドンが浮上して、たまたまディルビック号を襲撃して、たまたまその一撃がディルビック号の船体を突き破って……。クラーケンは生存、という点さえクリアすれば問題ないはずです。かつて、帆はん船せんを幾度となく沈めたモンスターですから」

「ふうむ……」

「……ねえ、アーネストはどう思う？」

「………………え、私、ですか？」

　きょとんとするアーネストに、カレンとルイスが肘ひじを突いてぐいっと詰め寄る。

「そうだな、ここは一つ冷静な第三者の意見も伺うかがうことにしよう」

「…………はあ…………」

　アーネストは困ったようにぽりぽりと頭を掻かいた。否いな、実際に困っていた。

　彼にとっては、この手の議論は知識豊かな者たちが行うべきであり、自分のような無知な者が参加するべきではないと思っている。

　だが──二人の会話に出てこなかった微細な違和感。それが彼の胸中に引っ掛かっていたこともまた事実だった。

　しばらくして、ようやく俯うつむき加減に呟つぶやいた。

「では、あの……クラーケンみたいな、もの……というのはどうですか？」

「クラーケンみたいなもの？　クラーケンじゃないの？」

「私は、生物学が専門という訳ではないのでクラーケンに関して、ルイス様の言葉を全面的に信じることにします。そうなると、やはり絶滅したはずのクラーケンが生きていて、というのは無理があるような気がしまして」

　むぅ、と不ふ貞て腐くされたような表情を浮かべるカレン。だが、続きが気になるのかすぐに表情は好奇心を秘めたものに変わっていた。

「じゃあ、どうしてクラーケン『みたいな』ものなの？」

「……沈没の時間です」

「どういう事かね？」

　ルイスとカレンが揃そろって首を傾かしげるのを見て、ひょっとすると自分の推理は大間違いではなかったのか、と背中に汗を掻きつつもアーネストは懸命に説明した。

「つまりですね、沈没の時間が早すぎると思うんです。もし、メガロドン……その、巨大ザメが追突して、そのせいで船体に穴が開いて沈没したとします」

　アーネストは少し迷った挙あげ句く、たまたま手元にあったコップを手に取って説明した。

「船底にこう、穴が開いた訳です……。そこから水が入り込みます。その水はディルビック号の船内にくまなく侵入し、やがて重さに耐え切れなくなった船は……」

　アーネストはコップをゆっくりと下に降ろし、沈没を表現した。

「沈みます。ところが、この場合は水がよほど早い速度で浸入しない限り、なかなか沈むことはありません。ディルビック号はそういう風にできているのです」

「そっか！　船に穴を開けられて沈没した訳ではないのね！」

「はい。……途方もない、と叱しかられるのかもしれませんが……あのクラスの船が、ほんのわずかな時間で沈んだとすれば、可能性はただ一つです」

　アーネストは再びコップを持ち上げ、それを大きな手のひらでぎゅっと摑つかんだ。

「こういう風に、巨大な生物が何本もの腕を船体に絡ませ──」

　コップを勢いよく振り下ろす。

「一気に、海底へ沈ませた。……もっとも、メガロドンの開けた穴が、あまりに巨大すぎたという可能性もあります、が……」

　言い終わると、ルイスは感極まったかのように叫んだ。

「素晴らしい！　見事、かつ大胆な推理だ！　メガロドンの説を撤てつ回かいするのは、もう少し調べてからにするとしても、君の説は非常に重要だと思うね」

「……なかなかね、アーネスト。それでこそ、私の執事バトラーよ、うんうん」

「あ、ありがとうございます……」

　ぺこぺこと頭を下げるアーネスト。そんな三人に、厨ちゆう房ぼうから咳せき払ばらいと共にコゼットの少し哀しそうな声が聞こえた。

「申し訳ありません、出来れば温かい内に食べて欲しかったのですが……」

「あ……」

「む、こりゃいかん」

「す、すいません……！」

　三人は慌あわてて、議論に熱中しすぎたせいで忘れかけていた食事を再開した。

　────英雄暦１９３９年長なが槍やり月づき（９月）ノ１日

　その後、２００ｋｍセツト地点に到達した〝イエスラス〟は浮上し、再度全てのシステムチェックを行い、何もかもが完かん璧ぺきであることを確認した。

　五日目、ルイスが艦内放送で全員に通達した。

「乗員諸君、間もなく我々はディルビック海域に突入する。ここから先、一体何が待ち受けているのか、何が存在するのか、どうすればいいのか、即座の判断が要求されるだろう」

「だが──私は君たちを信じている。これは、ホワイトビュー教官も同意見だ。さもなければ、この〝イエスラス〟に乗り込んでこまい」

「……」

　ホワイトビューはルイスの隣で肩を竦すくめた。

「潜航準備！　バラストタンク、前部トリムタンク注水！　潜航角度５度！」

「アイ、サー！　バラストタンク、前部トリムタンク注水開始！　潜航角度５度！」

「潜航ダイブ！」

「潜航ダイブ！」

「観測手及びソナー員は再度全方位を確認！」

「アイ、サー！」

「機関室！　エンジン出力60％！」

「アイ、サー！　エンジン出力60％！」

　カレンがそうマイクロフォン越しに応じると、ぐっと〝イエスラス〟全体に力が湧き上がるような感覚を抱いた。エンジンの出力を上げたせいで、そういう錯さつ覚かくをするのだろうな──とルイスは思った。

「諸君。いよいよだ、健闘を祈る」

　その声の響きに、全員は気を引き締めて頷うなずいた。

　〝彼〟は自分の縄なわ張ばりに侵入した〝異物〟に直ちに反応して動き出した。

　彼の縄張りは凄すさまじく広かったものの、彼は５００ｍモールより上を自身の領域ではないと割り切っていたため、自分より巨大な存在が上に居る限りは手出しをするつもりは毛もう頭とうなかった。

　上に居る限りは。

　今、その〝異物〟はよりによって自分たちの縄張りを侵そうとしていた。彼らはきっと自分たちの獲物を食い荒らし、自分たちに害を及ぼすに違いない。

　そうはいくものか。

　──深青の海デイープブルーは我々のものだ。

　声を発することができれば、彼らは戦闘のための雄お叫たけびをあげたであろう。

　攻撃が開始された。二頭の雄おす、一頭の雌めすは猛たけりながら凄まじい速度で〝イエスラス〟へと突撃する。

体長30ｍモール、体重20ｔアガラツト。かつて巨きよ大だい蛸だこクラーケンを絶滅に追い込み、〝海の覇は王おう〟と称されるまでに至った巨きよ大だい鮫ざめ━メガロドンが。

━二時間後。

〝イエスラス〟は深度５００ｍモールに到達した。ディルビック海域到達まで、おおよそ数ｋｍセツト。

最初にそれを〝聴いた〟のはソナー員であるフリント・イエールであった。とてつもなく巨大な反応があった。しかも、それはぐんぐんとこの〝イエスラス〟へと向かってくる……！

「……前方30ｍモール　深度５２０ｍモールに反応！　極めて巨大、迅じん速そく！」

ルイスが応じる。

「観測手！　詳細を！」

「観測手了解！　……ッ！　艦長、メガロドンです！　前方に移動……浮上しています、狙いはこの艦です！」

ルイスは自分の予想がひょっとして当たったのかもしれない、とかすかな喜びが脳のう裏りを掠かすめた━だが、この状況では極めてどうでもいいことだ。

魚雷発射は間に合わないと判断する。潜水艦ならばいざしらず、相手は生物だ。しかも、海を時速80ｋｍセツトで泳ぐという凄まじい怪物だ。

「急速浮上！　前部トリムタンク開放、後部トリムタンク注水！　浮上角度三十！」

「アイ、サー！」

だが、観測手は悲痛な声で叫ぶ。

「間に合いません、ぶつかります、艦長！」

「警報鳴らせ！　衝撃来るぞ、備えろ！」

警報が鳴り響き、全員が固定されたものにしがみついた━大だい轟ごう音おん。世界が一瞬、浮き上がったように揺れた。

サティは眼前に広がる体長30ｍモールの巨大なサメを直視してしまった。あまりにも無む慈じ悲ひな黒い目、そしてその巨大な口。

大きく顎あぎとを開き、こちらを引き裂き喰らおうとしている。安全であるということをサティはすっかり失念して取り乱した。

「いや……いやあああああああああああああっ！」

　ガツン、という衝撃。サティは自身が飲み込まれたと錯覚した。

　傍はた目めには彼女がガクガクと揺れて悲鳴をあげたようにしか見えなかったが──彼女の精神はその恐怖に耐え切れず、昏こん倒とうを選択した。

　震動が収まった、立ち直ったルイスが叫ぶ。

「総員、被害報告！」

　マイクロフォンで応じたのはカレンではなく、アーネストだった。

「機関室……エンジン、精霊エレメント異常なし。出力維持しています……」

「後部操そう舵だ室しつ、異常ありません」

「前部魚雷発射管、異常ありません！」

「観測手……おい、誰か観測手を医務室へ運んでくれ！　第二観測手、船体の被害報告！」

「今やってます！」

　ルイスが誘った冒険者の一人、シェリー・ニキーティルが素早く魔法を唱えた。〝遠えん視し〟の魔法で、船底や船体を海中からの視点で観察していく。

　深海５００ｍモールでは、太陽の光もほとんど届かないが、魔法による視覚では、そんなものは関係がない。ただ、あるものをあるがままに見るだけだ。

「第二観測手！　被害報告！」

「……被害、ゼロです」

「被害ゼロ、了か──ゼロ？」

「はい！　船底にはわずかに掠かすれた傷がついているだけです。航行可能と判断します！」

　その言葉に乗組員は唖あ然ぜんとした。

突撃したメガロドンは、想像を絶する激痛に顔をしかめていた。

──何だ、この硬さは！　鯨くじらの骨より硬いなんて信じられない！

嚙かみ付こうとしたメガロドンは歯が欠けていた。憤ふん怒ぬの炎がメガロドンのちっぽけな脳のう味み噌そを包んだが──すぐにそれは鎮しずまった。

考えなければならない、この敵を倒す方法を。

統率者である雄は撤てつ退たいを選択し、三頭のメガロドンは一旦離脱した。

「メガロドンは⁉」

「メガロドンは───消失です。少なくとも周囲１００ｍモールには存在しません」

「そ、そうか……。よろしい、すまんがサティが限界のようだ。少し早いが交代してくれ」

「了解しました」

「浮上停止。深度はこのままでしばらく前進する、以上！」

通信を切って、教官であるホワイトビューと、ルイスは顔を見合わせた。

「想像以上の耐久力ですな、〝イエスラス〟は……驚きました」

「何、ミスター・ワイズマンの設計思想が優れていたというだけの話さ」

ホワイトビューはこともなげに肩を竦すくめて、くるりと振り返った。

「どちらへ？」

「機関室だ。さっきの応答、少し声の調子がおかしかった。様子を見に行って来る」

◇

メガロドンが襲撃する直前の機関室。

精霊が震え、魔マカナで動くエンジンの暴走を押し留める。アーネ

ストとカレンの耳に、奇妙な咆ほう哮こうが響いた。カレンが微妙に魔マカナを取り込む分量を調節するための目盛りを上げた。

「大だい丈じよう夫ぶでしょうか──？」

「少々ご機嫌斜めみたいだけどね。まだまだいけるわよ。90％を越えてからが本当の勝負」

「……はい」

「貴方あなたの力も、貸してもらうことになると思うわ」

「分かっています……」

　アーネストはスーツの袖そでを捲まくった。丸太のように太い腕が露あらわになる。

「そのバルブを回してちょうだい」

「了解しました」

　ぐい、と力を篭こめてアーネストがバルブを回すと、容た易やすくそれは回り出した。だが、カレンは知っている──アーネスト以外では機械や魔法などの補助がない限り、あれほど速く回すことは難しいだろう。

　パイプがガタガタと震動している。

「見てみるわ」

　機械油で顔を汚しながら、カレンはスパナを握った。寝転がり、火傷やけどしそうな蒸気を堪こらえつつ、どうにか緩ゆるんだナットを締め上げた。

「締めたわ、震動は？」

「大丈夫です、お嬢様。すぐにお戻りを」

「分かってるわよ……よいしょ、っと」

　警報レッドアラームが艦内に鳴り響いた。潜航の際に響くものではなく、緊急時にのみ使用されるものだった。

「え……!?」

　アーネストの全身に悪お寒かんが走る。咄とつ嗟さの判断でカレンの両足を掴つかみ、強引に引きずり出すと、彼女を力強く抱き締め、

背中で覆おおった。

　艦内放送で、ルイスの慌あわてたような声が響く。

「衝撃来るぞ、備えろ！」

　次の瞬間、凄すさまじい震動が二人に──いや、〝イエスラス〟に襲い掛かった。

　□□……。

　──…………あ。

　──………………アー。

　──…………アーネス。

　──……アーネスト！

　カレンは衝撃のせいか、わずかに意識を失っていたらしい──ほんの数十秒ほどだが、目を開けたときには、混乱が彼女の頭を包み、ぐるぐると振り回していた。

「アーネスト……？　アーネスト！」

「私はここです、お嬢様」

　言われて、初めてカレンは自分がしっかりと覆おおい被かぶさられていたことを理解した。どうやら、アーネストが自分を抱き締めているらしい。

「あ、ふ。よかっ、た……」

　大きく、安あん堵どの息を吐いてカレンはアーネストの背中をまさぐった。

「怪け我がはない？」

「……」

　沈黙するアーネスト。嫌な予感がして、カレンは改めてアーネストを見た。わずかながら、苦痛を感じているのが読み取れる。

「アーネスト！」

「だ、大だい丈じよう夫ぶです。かすり傷ですから……」

　カレンはアーネストを振りほどき、素早く背中を見た。かすり傷、

というレベルでないことは確かだった。カレンは思った。……たぶん、今の彼にとっては本当にかすり傷なのだろう。そう思い込むことで、痛覚を緩かん和わしているのだ。

　カレンが見た限り、彼の背中は自分を守って打ちつけた際に尖とがったもので深く切ったらしく、服ごと引き裂かれていた。

「とにかく……ここは任せて、あなたは居住地区の医務室へ行きなさい、ササキが怪け我がを看みてくれるから」

「お嬢様を一人にする訳には……」

「アーネスト、行け」

　突然、ホワイトビューが会話に割り込んできた。

「メガロドンが襲撃してきたが、激突したあとはほうほうの体ていで退却したらしい」

「教官もこう言っているわ。行きなさい」

「……」

　アーネストは不意に、またもあの膨大な敵意を知覚した。防衛反応からか、無意識に身構える。

「おいおい」

　ホワイトビューが笑う──が、目は彼の一いつ挙きよ手しゆ一いつ投とう足そくに注がれている。身構えたアーネストは、ゆっくりと拳こぶしを握り締める。

　喉のどが酷ひどく、渇いた。

　殺される前に殺してやりたい、そう思った。

「……アーネスト？　ねえ、何をやっているの？」

　カレンの声が響く──アーネストはギクリと動きを止めた。途端に、苦痛が蘇よみがえった。同時に、自身の思考も先ほどまでの熱狂的な感覚を忘れていた。

「……あ、いえ……その、何でも、ありません」

　何でもなかったのだ……とアーネストはそう思い込むことにした。

「本当ね？　それ以上、怖い顔したら怒るからね」

「……はい……」

　アーネストは悄しよう然ぜんとした表情で、顔を俯うつむかせた。

「執事たるものは？」

「いつでも笑顔、です」

「それが分かってんならいいわ。ほら、さっさと行きなさい！」

　自分が何をしようとしていたのか、今いま更さらながら自覚したアーネストは肩を落とし、とぼとぼとその場を歩き去っていった。

「……申し訳ありません、ミスター・ホワイトビュー。……その、別にアーネストは乱暴者という訳ではないのです。負傷していたし、気が立っていたのかも……」

　そう言いつつ、カレンは頭を下げた。ホワイトビューは気にするな、とばかりに手を振る。

「ベイビー。つまりあいつは、普段はとても大人しいって事かい？」

「虫も殺せないですよ、アーネストは」

　蜘く蛛もが部屋に迷い込むと、そっと摘つまみ上げて窓から放すタイプである。

「ふむ……そうか」

「先ほどの事に関してはお詫わびします、だから……」

「いいさ、ちょっと睨にらみ合っただけだ。それよりベイビー、さっさとエンジンのチェックだ。いくぞ」

「は、はい！」

　カレンは考え込むことを止めて、作業に注力することにした。アーネストが示した不思議な敵意──それは、単なる偶然であろうと安易に受け止めたかった。

「……ふむ、裂れつ傷しようだな。何かの金属……折れたパイプの先端みたいなやつじゃないか？　ともかく、それがずぶりと君の背中に突き刺さり、皮と肉を完全に切り裂いて血を噴き出させつつ、そのまま背筋を抉えぐりきったという訳だ」

　医務室に居たのは、ユウマ・ササキというドワーフだった。彼の詳細な説明に、アーネストは顔が青くなった。

「〝治療魔法ヒーリング〟をかける、少し痺しびれは残るだろうが我慢しろ」

　アーネストは無言で頷うなずき、彼の手が自分の傷痕に触れた痛さに歯を食い縛しばった。

　歯を食い縛ったアーネストは呻うめきの声を必死に堪こらえ、ほんの少し全身を震わせた。呪文スペルが詠えい唱しようされると同時に、彼の手が光る。その光はまるで傷口に入り込むようにして掻かき消えた。即座に、傷口が蠢うごめきだして肉体の再生が開始される。血管や筋肉が結合し、やがて炸さく裂れつ的な痛みは掻き消え、少しむずがゆい程度に収まった。

「終わったぞ。ただ、まだ完全に再生した訳じゃないからしばらく安静にな。再生が終わらないまま迂う闊かつに動くと、傷が開くぞ」

「……はい、分かっています」

　──嘘うそだった。それは彼が人間であるという前提の計算だ。ワータイガーの血を半なかば引いている彼にとっては、もうしばらくすれば全快するだろうと分かっていた。

「それでは……失礼します」

「……待て、少し話をしていかんか？」

　ササキが再び腰を下ろすようアーネストに促うながした。

「……？」

　訳も分からず椅い子すに座るアーネスト。ササキは周囲に誰もいないか確認すると、声を潜ひそめながら告げた。

「レイジ・グリムスターが集めてきた連中のことなんだがよ」

「……」

　アーネストの顔が引き締まる。

「連中の持ち込んできた道具ん中に、サブマシンガンがあった」

「サブマシンガン……⁉」

「正式名称Ｓ＆Ｒサーヴアンドロツツワイザー式短機関銃。三十発の銃弾をバリバリ飛ばす、極めて危険な代しろ物ものだ」

「……別に武器の携帯は禁止されてはいないですが……」

「持ち込む必要もねぇだろう、ええ？」

「……」

　アーネストは頷うなずいた。

　確かに彼の言う通り、そんな短機関銃を持ち込む必要はほとんどない。まさか潜水艦から外の生物に向けてバリバリ撃つ訳にもいくまい。

「教授……いや、艦長か。艦長にも伝えておいたが、とりあえず様子見ってことにされた。他の皆には、黙っておくように、ともな」

「あの、なぜ……俺に？」

「お前はぺらぺらお喋しゃべりしそうにないタイプだと思ったからさ。まあ、あのお嬢さんには報告しておけ」

「……」

「お前さん、執事だからな。アマチュアの冒険家アドベンチユラーよりは強つえぇだろ。いざって時は頼むぜ」

「……分かり、ました」

　アーネストは立ち上がり、ペコリと頭を下げた。

「うーん……軀からだはデカいし、一見は強そうなんだがどうにも頼りねぇなァ……。カレンお嬢さんも、あんな執事で大丈夫なのかね？」

　立ち去るアーネストの背中を追いつつ、ササキは一人呟つぶやいた。

　機関室までの道のりを歩きながら、アーネストは一人考える。
彼らが持つ短機関銃の意味を。たとえば――ルイスの推理した通り、彼らが美術品のサルベージを目的としていたとする。

　そうなると、帰りにはここに数千万ルードの価値がある美術品が保管されることになる。そう考えると、護衛用のためと考えるのは妥当かもしれない。逆の立場で、自分たちが武器を持っていたとしたら、まず間違いなく自分がサルベージした美術品を強奪しようと考えているのだと確信できるのだが――今回はサルベージする側が武器を装備しているのだ。

　わざわざ自分たちに手を出して、余計な災難を招くとも思えない。

　となると、やはり美術品の護衛のため、と考えるのが妥だ当とうなのだろうか――。

　機関室へと戻ると、フィールタン兄弟がせっせと働いていた。

「んー？　なーんーだ、アーネストかー」

「カレンなら、こっちには居ないわよ？　個室に戻るってあなたに伝えるように言われたわ」

「仲、いーよなー」

　キシシシシ、とゴブリン独特の軋きしむような笑い。アーネストは再び深々と頭を下げて、くるりと背を向けた。

「あんまり慌あわてると、つっかえちゃうわよ。アーネスト！」

「おーきーもんねー」

　二人のからかいに耳を貸さず、アーネストはカレンの下へとひた走る。

　個室に戻る、念のためにノックすると「どうぞ」という返事が聞こえた。ほっとして扉を開き、たちまち渋い表情を浮かべた。

　カレンは丁ちよう度ど服を着替えていたところだった。にもかかわらず、平気で「どうぞ」というあたりが、彼女の致命的にはしたないところだった。

「……あら？　アーネスト。お帰り。大だい丈じよう夫ぶ？　まだ痛みは残ってる？」

　そう言いつつ、彼女はひょいと残り一枚の靴くつ下したを脱ぎ捨ててショーツとシャツだけの極めて身軽……というか、無防備な格好になった。

「お嬢様……」

「大丈夫、大丈夫。誰も見てないからっ」

　長年行動を共にしているアーネストは何度となくその格好を嗜たしなめたが、どうも彼女は自分にはそういう魅力に欠けている（＝だから平気）――と思い込んでいる節ふしがあり、いくら言っても直りそうにはなかった。

「で、怪け我がは？」

「平気です」

　それを裏付けるかのように、アーネストは右腕をぐるりと回した。ほんの少し、微妙な痛みが残った程度だ。心配はない。

　だが、カレンはそのままアーネストにくっつくように近づくと、ぽんぽんと背中に手を回し、彼の表情を確認した。

「ごめんね、アーネストが平気だって言っても信じないことにしてるの」

「……信用されてないんですね……」

「うん。アーネストは、無茶するもの」

　アーネストのガックリした言葉をサクリと切り捨てて、カレンはニッと笑った。

「本当に大丈夫みたいね、よかった！」

　カレンは無邪気にアーネストを抱き締める。アーネストは、自分の言葉が信じられていないことを哀しく思えばいいのか、それとも「主は執事である己のことを善く分かってらっしゃる」と解釈して嬉うれしさを感じればいいのか、複雑な気分だった。

「……銃、ですって？」

　アーネストは頷うなずく。カレンの面おも持もちが陰いん鬱うつなものになった。アーネストは胸が痛んだが、黙っていていいものでもなかった。

　カレンはしばし考えたあと、気を取り直したかのようにアーネストに尋ねる。

「そう……。ねえ、私は銃についてあまりよく知らないんだけど……その銃はどういう用よう途とで使われるもの？」



「短機関銃は拳銃弾を発射する分、構造が簡易で生産が容易に行えます。ただし、その分威力は劣ります」

　専用のライフル弾を使用する機関銃マシンガンと違い、拳銃弾を流用して使うためにどうしても威力は低下する。

「でも、目的箇か所しよの制圧という点では拳銃よりも遥はるかに有利です。連射できますから」

　アーネストもまた、それほど銃について深い知識を持っていた訳ではないが、学院の授業ではこの程度のことは学ばされた。

「つまり、短機関銃というのは……」

「はい。基本的に塹ざん壕ごうや、建物の制圧に利用されるものです」

「──たとえば。この艦内のような？」

「……」

　意味するところを理解し、アーネストは沈黙した。

　今回、〝火焰の魔銃デイル・ワー・クラン〟や〝雷閃の魔銃グラトレーズ〟のような特殊な銃──つまり、魔銃を持ち込んできていないのは、艦内での戦闘を想定しているからだろう。

　魔銃は威力が大きすぎる。内側から外がい殻かくを破壊される可能性はさすがにまずないといっていいが、計器類やパイプを破壊する可能性は大いに存在する。

「……そういう可能性も有るってことよね？」

「はい……そうなる、かと」

　カレンは立ち上がった。

「詰きつ問もんしましょう！　何かしら行動を起こさないと……！」

「お嬢様！　お嬢様、その、お待ち下さい、艦長……教授も、既すでにこの事は知っています。知っていてなお、放置しているんです。きっと、何か考えがあるのでしょう」

「……むぅ……」

　不服そうにカレンが腰を下ろす。

「その……サルベージした美術品の護身のためとも考えられるのです。というよりは、そちらの方が可能性が大きいのではないか、と……」

「でも──」

　そこまで言いかけたとき、個室の扉がノックされた。

「俺だ。ホワイトビューだ。悪いが、ベイビー。ちょっと頼みがある」

「あ、はい。どうぞ、教官」

「……！」

　扉が開かれる。素早くアーネストがホワイトビューの前に立ち塞ふさがった。今はカレンの姿を見せられないのだ。

「……でかい人、どいてくれんか？」

「お嬢様！」

「え？　あ、そっか。すいません教官、ちょっとばかりお待ちください！」

「何だか分からんが早くしてくれ、ベイビー！」

　この時ばかりは、断固としてアーネストはホワイトビューの前に立ち塞ふさがった。

「〝遠えん視し〟の魔法が使えるな」

「ええ。使えますが──」

「よろしい。すまないが、観測手の代理を務めてくれないか？　〝遠視〟が使用可能な乗組員の中で、三番目に成績が良かったのが君だったんだ」

「本来の観測手は？」

「メガロドンを直視したときのショックが尾を引いて、失しっ神しんしてしまってね。もう一人には、船体の状況をくまなく見てもらっている」

　そう言ってからホワイトビューは付け加えた。

「ソナー手が、ここから１ｋｍセツトほど離れた場所に巨大な生物を

探知したんだ。それも複数だ」

「……分かりました、務めさせていただきます」

「ベイビー。しっかり頼むぞ！」

　アーネストは主を差し置いて休きゆう憩けいしている訳にはいかず、カレンの後をしっかりとついていった。

　司令室で、最前方の席に座り目を閉じる。

「ソナー手もいる。リラックスしてくれ、それから、視界をメガロドンにあまり近づけない方がいい。見て、気持ちのいいモンスターでもないからな」

　ルイスがそう声を掛けると、カレンは頷いた。

「はい、せいぜい気をつけることにします」

　カレンは呪文スペルを詠えい唱しようし、〝遠視〟の魔法を発動させた。

　〝遠視〟の魔法は修得自体は難しいものではない、冒険家アドベンチユラーであるならば、遠くのものを見ることが可能なこの魔法は、覚えておいて損はない──ただし、双眼鏡の発達と共に、その常識も終わりを告げつつある──と言われているが、やはり個人の才能や練習量によってその性能に格段の違いが出る。

　カレンは〝遠視〟が比較的得意な部類に入り、まったく光の差さない海中といえどもある程度ならば周囲を見渡し、視界を移動させることも可能だった。

　カレンの目はいま司令室の内部ではなく、光も差さぬ深海を覗のぞき込んでいる。

　だが、魔マ力ナで形成された彼女の視界は光がないことを苦にしない。不思議な感覚だが、暗闇であることを認識しつつも目視することができるのだ。ただし、これには少なくともカレン並に〝遠視〟が得意でなければならないのだが──。

　ゆっくりと視界を動かし、生物が存在しないかを確認する。

「……！」

　一瞬、それを目撃したカレンはぎょっと体が強こわ張ばるのを感じた。

魚だった。大きさは30ｃｍセルモールだろうか。もちろん、航行に支障はない。彼女がぎょっとしたのは、その奇怪な姿だった。

まるで痩やせて痩せて骨だけになったような姿の奇妙な魚……。だが、魚は平然としたままゆったりと泳いでいる。

ワイズマンが言うには、深海は陽光が存在しない分、独自の生態系が発達しているという。この魚とはまったく異なるのだが、彼はこの〝イエスラス〟の実地試験の際に赴おもむいた乗組員がいくつかスケッチした、奇怪な魚を見せてくれた。

—お嬢様、聞こえますか？

アーネストの声に、魚に目を奪われていたカレンはハッとした。

「ええ、聞こえるわ。……ちょっと変な魚がいて、驚いただけ」

右手が握り締められる感触が伝わってくる。

「アーネスト……ありがとう、しばらく握っていてね」

カレンは気を取り直して、再び視界のコントロールに神経を集中させる。暗闇の中、動くものを見つけるために視界をぐるぐると移動させていく。

————————————いた。

「艦長！　見つけました、メガロドンです！　……何てこと！」

「どうした!?」

「三頭です！　三頭、我々の約50ｍモール上、後方から突進してきます！」

「何い時つの間に回りこんだ……!?」

続いてソナーマンが叫んだ。

「ソナー、確認！　観測手の発言に間違いはありません、艦長！」

「分かった！　反転して魚雷を……」

「いや、間に合わん艦長！　全速前進、かつ急速潜航だ！」

「潜航ですか!?」

「もう間もなく本艦はディルビック海域に到着する！　潜航しつつ引

き離せ！」

「……分かりました。機関室、エンジン出力全開！　急速潜航だ！　魚雷発射管室！　魚雷を装そう塡てん後、すぐに注水しろ！　正面に来たときのみぶちかますぞ！」

「アイ、アイ、サー！　潜航ダイブ！　潜航ダイブ！」

　ホワイトビューがルイスから艦内放送用マイクを譲ゆずり受けた。

「諸君。いよいよあと数分でディルビック海域だ。現時点を以もつて、あらゆる遊ゆう戯ぎ行動は禁止する。休きゆう憩けい時間は休息及び食事の時間のみに費ついやせ、以上！」

　〝イエスラス〟は精霊封印式エレメンタルシールスタイルエンジンをフル出力し、凄すさまじい速度で動き出した。

　その後方を、海の覇は王おうたるメガロドンが三頭襲い掛かっていく――内一頭は、先ほど強したたかに鼻を打ちつけたメガロドンであった。

　彼の怒りは、そのまま同族である二頭にも伝わっており、生かして帰すものか、という凄まじい殺意に満ち溢あふれていた。

　――だが、その為に。

　三頭は、普段ならば必ず本能で避けて通る海域に足を踏み込んだことに、まるで気に留めていなかった。

　〝イエスラス〟に追いすがるメガロドンたち。たまたま進行方向にいた気の毒な深海魚たちは、全てが彼らの犠ぎ牲せいとなった。

　メガロドンは、自分の突撃ではあの『巨体の生物』を食い破ることはほぼ不可能だ――そう考えていた。だが、メガロドンは経験から知っている。あの内側なかみは凄まじく脆ぜい弱じやくなのだと。

　突撃を二度、三度、四度、いやいや――死ぬまで繰り返せば倒しうることは可能だ。

　メガロドンはそう考えていた。これほど高度な思考ができる深海の生物――否いな、海の生物はこのゴルトロック広しといえども、そうは存在しない。メガロドンは殺意に猛たけっていてもなお、海の頂点に立つ生物なのだ。

　遍あまねく海中の生物に畏い怖ふされるが故ゆえの称号――〝海の覇王〟。

だが、メガロドンは知らなかった。

この海域には、世界の王キングが棲すんでいる。そして彼は、迷い込んできた愚かな者たちを等しく自身の王国へ迎え入れようとしている。

ディルビック海域到達まであとわずか――深度６００ｍモール。

「艦長、追跡されています！　信じられない…………向こうの方が速い！」

「エンジン出力１００％……時速１００ｋｍセツト到達！　本艦、ディルビック海域に突入します！」

突入した瞬間、アーネストの握っていたカレンの手がビクリと震えた。

「お嬢様！」

カレンは、見ていた。

ディルビック海域に突入――カレンの全身に緊張が走る。最初は自分の視覚が惑わされているのではないか、と考えた。

次に、神経を集中して確認した。大きさを推測し、それが何であるかを確認しようとした。せめて、巨大な魚程度であれば良いと願った。

だが近づくにつれて、それはありえないという事を理解した。それは深海の底――即すなわち、深度１０００ｍモール付近に広がる光だった。

まるで、そこに何かがあるように。何か……何だろう？　あの光が、〝何か〟とでも言うのだろうか？

カレンは徐々にその光に向けて近づいていくことに本能的な恐怖を抱いた。

「教授……教授！　このまま真っ直ぐに行くと、危険です！」

カレンの叫びに、マイクで指示を下していたルイスは怒ど鳴なるように応じた。

「どうした！　何が危険なんだ!?」

「その、よく分からないんですが……正面に、正体不明の〝光〟が見えるんです！」

「幻覚じゃないのか!?」

　その時、マイクの向こう側からシェリー・ニキーティルの混乱した声が飛び込んできた。

「司令室！　こちら、第二観測手！　前方に光が！　光が見えます！」

「なっ……!?」

「停止して下さい、教授！　あの光に飛び込むのは──！」

　ルイスが判断するより早く、教官が咄とっ嗟さにマイクを引ったくり、機関室に繫つないだ。

「機関室、エンジン停止ッ！　出力10%まで落とせェェッ！」

　急激な停止。アーネストはしっかりとカレンの体を抱き締める。

「メガロドン、三頭とも追いついてきます！」

「……クレーン室、操作して撃退しろ！」

　再び教官が指示を出す。艦長は、彼の判断を信じるしかないと息を止めて見つめている。

「アイ、サー！」

　クレーン室にはサルベージ補助のためのクレーンが取り付けられている。クレーン操作手はジェシー・マグワイア。ミノタウロスである彼は、〝遠えん視し〟を使用して限定された視界を確保したあと、その剛ごう力りきでクレーンを動かし始めた。

「アーネスト！」

「はい！」

「魚雷発射管室に行け！」

「アイ、サー！」

　アーネストはカレンからそっと手を離し、魚雷発射管室へと走った。

　……メガロドンは急激に〝獲え物もの〟が動きを鈍らせたのを見て、人間ならばほくそえんだだろう。理由は分からないが、ともかくこちらのチャンスだ。

彼らは遠えん慮りよなく突進していった。先ほど、体の底に突撃して痛い目に遭あった。では、左右から突とつ貫かんしてみよう――。

リーダーであるメガロドンがわずかに首を傾け、指示を出した。左右に散ったメガロドンが獲物に襲い掛かる。

一撃、二撃――メガロドンたちの顔が苦痛に歪ゆがむ。だが、その顔にはまだ戦意が溢あふれている。最後に残ったメガロドンも攻撃に参加しようとして――獲物の口が開いたことに気付いた。

彼は左右への攻撃を二頭に任せ、自身は舌を伸ばした口に立ち向かった。その口は開閉した割りにはさして大きくなかったが、途と轍てつもなく長い舌のようなものを二本兼ね備えていた。

それを食い千ち切ぎろうと、メガロドンは急速旋回し、獲物と正面から向き合う。

舌が動いた――が、当然ながら舌の起点は動かない。メガロドンは勢いよく顎あぎとを開き、舌を噛かみ千切ろうとした。

だが、今まで味わったことのないあまりにも硬い感触にメガロドンは戸惑った。その戸惑いが、次の瞬間の攻撃を察知できないという事態に陥おちいることとなった。

もう一本の舌――正確にはクレーンアームだが――が、正確無比に動き、メガロドンの目玉を握りつぶした。

苦痛の悲鳴をあげるメガロドンが思わず大きく口を開けた――逃れ出たもう一本のクレーンアームは間かん髪ぱつ容れず、フックを顔面に叩きこむ。

メガロドンは予想以上の頑強さと、攻撃能力に舌を巻いた。撤てつ退たいするべきだ、と本能が主張する。だが、殺意に塗り潰つぶされていた彼は目を失ったことで怒り狂った。もう一度噛み付こうと、大きく口を開き――。

「今だ、クレーン室。メガロドンを放せ！」

「アイ、サー！」

クレーンアームがメガロドンを放した。目を潰つぶされて怒り狂っていた彼は、方向転換するとぐっと速度を変えて一旦間合いから離脱した。

「魚雷発射準備！　発射管扉開け！」

ルイスの声。メガロドンの武器は魔マカナを秘めた鼻だ。怒り狂っ

ていることと、左右に彼の手下らしき存在がいることから判断するに──。

　魚雷発射管制手であるホロウスキーと共に、アーネストは大急ぎで作業に当たっていた。

　給気停止弁を全速力で開き、発射用空気タンクに圧縮空気を注入する。そのあと、機関室のフィールタン兄弟に向けてアーネストは連絡した。

「機関室！　こちら魚雷発射管室！　精霊の魔マカナをこちらに！」

「アイ、サー！　今から送るわよ！」

　その言葉と共に、通常の魚雷発射管には存在しないパイプから精霊が走り、魔力をフルに充じゅう塡てんさせた。

「魚雷発射準備完了！　いつでもいけます！」

　アーネストの応じる声。

　メガロドンは、確実に自分たちの正面にやってくる。なぜなら、メガロドンはこの〝イエスラス〟を生き物だと信じているが故ゆえに。

「我々の頭を狙うだろう？　──来い、メガロドン」

　メガロドンが襲い掛かってきた。

「発射！」

　その連絡を聞き取ったアーネストが勢いよく発射弁に手を掛けた。

　魔法の力によって通常の魚雷を遥かに上回る、ロケット弾並みの速度で魚雷が発射される。

　魔法陣が〝イエスラス〟前面に展開された瞬間──メガロドンは、全身に死の悪お寒かんを抱いた。慌あわてて彼は、見み栄えも外聞もなく逃げ出そうと体を転換させる。だが、さすがにその速度は放たれた魚雷が彼の腹を直撃するより遅かった。

　だが、苦しみもがいたせいでもう一発は外れた。

　それを〝遠えん視し〟で見ていたカレンが叫ぶ。

「一番命中！」

　歓声、だがカレンは見ていた──魚雷が発光する空間に到達すると同

時に、巨大な壁にブチ当たったかのように爆発したのを。

「二番魚雷は、外れました。発光する空間に直撃。爆破しました！」

「なに？　どういう事だ……!!」

　ルイスの問いかけに、カレンは叫んだ。

「分かりません！　ただ……私が見ているあの空間には、何かしらの防衛機能が存在しているという事だけは分かります！」

〝王国〟

　少年がはしゃぎながら、暗い海を指差した。

「ほら、ほら！　また来たよ！　今度は海の中から！　よかった！　ひょっとしたら、もう誰も来ないかと思っていたし──。呼んじゃおう！」

「……ギリィ、でも……大だい丈じよう夫ぶ？」

「何が？」

「……だって……また、この人たちみたいに」

　少女は肩を落とす。周囲の人々は二人に見向きもせず、ただうろうろしているだけだ。

「大丈夫だよ。……僕が、きっと何とかしてあげる！　絶対、絶対にだ！」

　少年の自信ありげな答えに、少女ははにかんで頷うなずいた。

「ありがとう。ギリィ…………好きだよ」

　少年はその屈くつ託たくがない好意の表明に、ひどく赤面しつつも彼女を振りほどいた。

「ごめんね、少し時間がかかるから……別の場所で待ってて」



「うん、わかった」

　少女はそう言って、こちらを振り返りつつ、その場を立ち去った。彼女が完全にいなくなったことを確認する。

「さて、と。サメさんも、人間も、エルフも、ドワーフも、みんなみんな──ようこそウエルカム！　僕の王国キングダムへ！　次は！　次はきっと上手くやってやる！　やってやるさ！」

　声と同時に凄すさまじい土煙があがり、かつてディルビック号を海底へ沈めた赤い蔦つたが一斉にメガロドンと〝イエスラス〟に向けて襲い掛かった。

　〝イエスラス〟は混乱しながらも潜航を続けていた。

　メガロドンが左右に交互に追突してくるたび、船体が凄まじい震動を起こした。だが、ミスリルとアダマンタイトという世界最上の金属で構成された船体には悪くてもかすり傷程度しかつかない。もっとも、内部の人間は大変だった。一撃当てられるたびに震度四か五クラスの震動が彼らに襲い掛かっていた。

「食堂で火災発生！　コゼットとササキが消火作業中です！」

「機関室よ！　兄が怪け我がをしたの！　悪いんだけど、誰か看みてちょうだい！」

「第二観測手、メガロドンが水圧に苦しんでいる様子は見受けられません、どうしますか、艦長⁉」

「このままだ……観測手！　前方の発光空間の詳細は分かったか⁉」

　その言葉を耳にするまでもなく、カレンは先ほどからメガロドンのことを頭から追いやり、〝遠えん視し〟で発光する空間を注視していた。

「……？」

　発光していた空間がわずかにゆらぎ、暗くなった。もっと確かめようと、〝遠視〟をギリギリの距離まで近づけ──凄すさまじい速度で接近してくる、それに気付いた。

「教授！　何かが……何かが、来ます！」

「こちら第二観測手、とても奇妙な物体が……！」

　二人の観測手の混乱した報告に、ルイスは素早く判断を下した。

「エンジン出力全開！」

　次の瞬間、メガロドンが左右から揺さぶるように放っていた衝撃が突然止まった。

「なん、だ……」

　答えを知るのは、二人の観測手のみ。

「いや……いや、いやよ……何、何よこれ……！」

　第二観測手シェリー・ニキーティルの恐怖の呟つぶやき。彼女は自分が見ているものが信じられなかった。

「これ、は……クラーケン……違う……」

　カレンはアーネストが首を捻ひねりながら主張した説を思い出していた。

　──クラーケンではない、と思う。だが、それに類するような〝何か〟。

　これだ、とカレンは確信した。彼女の視界は今、無数の赤い蔦つたが覆おおっている。彼女は蔦を間近で観察した。植物のようには見えない、どちらかというと動物的なものに見える。だが、確かに自分が主張していたクラーケンの脚とはほど遠い代しろ物ものだった。

　視界の横で暴れ狂う瀕ひん死しのメガロドン──ソレの体中に、魚雷が直撃して抉えぐれて臓はらわたが剝むき出しになっている部分に至るまで、赤い蔦が突き刺さっている。赤く紅く染まっていく軀からだ、メガロドンはその巨体を必死に左右に動かして脱出しようとするが、数百本の蔦が完全に体に食い込んでいたため、それもままならない。

　〝イエスラス〟の左右にいたメガロドンは、猛たけり狂いながら自分の周囲にある蔦を嚙かみ千ち切ぎる──が、千切った端からその蔦はサメの口に侵入し、絡まり、暴れ回る……！

「艦長……本艦は捕獲されています！」

　カレンの叫びと同時に、艦がぐいと横に傾いた。

「振り切れ……エンジン出力１００％！　面おも舵かじいっぱい！」

　〝イエスラス〟のスクリューが凄まじい勢いで周囲の海水を撒まき散らしながら、必死に蔦から逃のがれようとする。

「機関室！　現状１００％からさらに上昇中……精霊が暴れ出しているわ！　限度レベルを上回ったの！　このままだと手がつけられなくなります、艦長……！」

「もー、だめだー！　抑えきーれーなーいー！」

　フィールタン兄弟の悲鳴じみた報告。

「くそ……！」

　既にクレーン室では、ジェシーが懸けん命めいにクレーンを操作し、片っ端から蔦を断ち切ろうとしていたが、数百、数千――否、ひょっとしたら万を越える蔦の群れでは、焼け石に水だった。

　カレンはなおも、何かこの状況を打破できる手がかりはないかと〝遠視〟の視界を広げ――。

　――お姉ちゃん。

　そう、脳に直接語りかけられた。

「あなた……誰!?」

　魔法の〝遠えん視し〟で海中を見ているカレンに呼びかけたのは、海中に浮遊している少年だった。

　啞あ然ぜんとしながら、彼女は少年を注視する。少年は、どうやら〝遠視〟をしているカレンのことも理解できるらしく、彼女が視界をわずかに動かすと少年もわずかにその場を移動した。

「ねえ、お姉ちゃん」

　耳で聞いているのではなく、一種の念話テレパスであることにカレンは気付いた。

　赤髪の少年はあどけない顔立ちで、じっとカレンを――カレンの視界を見つめている。

「ようこそ」

　その笑顔には悪意はなかったが、それだけに背筋が凍りつくほどの恐怖を抱いた。

　何故なら、ようこそという言葉は彼らの置かれた状況を承知の上で放った言葉であり、他に該がい当とう者しやが存在しない以上、眼前の少年の役回りは一つだ。

「あなた、が……!?」

　カレンの絶叫。この眼前の幽霊ゴーストが、この赤い蔦つたを絡ませているのか？　彼は幽霊ではなく、精霊スピリットなのか？　それとも、それ以外の何かか？

「何が僕なのかは分からないけど、とにかく僕は僕だよ。ギリィ──名前、覚えておいてね」

「ギリィ……？」

「とりあえず、みんなより先にこっちの大きいのを〝加工〟しないといけないんだ。こんな大きいサメたちなら、やりがいがあるなあ！」

　くすくすとギリィが哂わらう。

「加工、ですって？」

「その内分かるよ。……ところで、お姉ちゃんの名前は？」

「……カレン・グリムスター」

「そう。カレンお姉ちゃんたちが乗って来た乗り物って、水中じゃないと動けないんだよね？　だから、また後でゆっくり会いに行くよ。とにかく本当に忙しいんだ、たくさん造らなきゃいけないのに、まだ追いつかないんだから、本当に、もう！」

「どういうコト──」

　だが、それ以上少年に何かを言うことはできなかった。彼らの潜水艦〝イエスラス〟は凄すさまじい速度で引き摺ずられていく──────。

「お嬢様！　お嬢様！」

「あ──今、のは」

　魚雷発射管室から戻ってきたアーネストが呆ぼう然ぜんとするカレンを揺さぶり、現実に帰還させる。

　その間も、〝イエスラス〟は凄まじい速度で引きずられていく。ついに深度１０００ｍモール、即ち海底へと到達した。

「……ひッ！」

　誰かが悲鳴をあげた。それを叱しかれないほどに、〝イエスラス〟はパニックに陥おちいっていた。一度激突して、少し浮き上がったあ

と、また海底に激突し、そのままずるずると引きずられる。

　だが〝イエスラス〟はこの状況においてもなお、外壁が砕けたりはしなかった。被害はあくまで内側の人間や部品でない部分のみ。

「機関員！　エンジンを強制停止だ。このままでは、再浮上のときのチャンスがつかめなくなる……！」

　ルイスの命令に、慌あわててフィールタン兄弟がエンジンの出力を最大限に低下させた。

　観測手は自分たちに何が起こっているのかを、恐怖と絶望と共に理解しながら。

　司令室の者たちは、観測手が見ているものが信じられないと驚いて、

　司令室の者たち以外は、一体この〝イエスラス〟に何が起こっているのかと不安と恐怖に駆られながら――――。

　〝イエスラス〟は、深度１０００ｍモール、ディルビック海域において座礁した。

◇

　――世の中には、まだまだ不思議が多すぎる。

　いつか、ルイス・マクレーンが呟つぶやいた言葉だった。その言葉は正しいとカレンも思う。

　遺跡へ侵入するなり、秘境に到達するなり、カレンは様々な『不思議』を見つけていた。

　それは例えば、兵士たちの剣が無数に突き刺さったニヴェンの墓地であったり（その道具は、決して錆さびない）、あるいは巨大な水晶の洞窟ダンジョンであったり、止まることを知らぬ、海の巨大な渦うず巻まきだったりした。

　だが、今見ているものをカレンは生涯忘れられそうになかった。震えながら、〝遠えん視し〟の視界を移動させる。

　そこは、先ほどまで見えていた発光した空間だった。〝イエスラス〟は船体をその空間に丸ごと突っ込んだという形になる。

　少年の姿は見えない。だが、この明るいぼんやりとした空間には少年の行方ゆくえどころではない異常さが存在した。

「機関、オールチェッククリア！　エンジンの中ちゆう枢すう部ぶももう少しで落ち着くわよ」

「魚雷発射管室……念の為、魚雷は装そう塡てんしたままです。注水作業が不可能になっています」

「クレーン室……クレーンの傷は酷ひどいですが、機能に異状はありません」

「居住地区……食堂の火災は消し止められました。ササキが治療に回っています」

「後部操そう舵だ室しつ……こちらも問題ありません」

「こちら司令室。全て了解した。本艦はディルビック海域の真ん中で現在停止中だ。……不明な点は大至急調査している。追って報告するまで、全員しばらく待機。以上だ」

　艦長は〝イエスラス〟にさしたる被害がないことにわずかな安あん堵どを抱きつつ、カレンに声を掛けた。

「第二観測手！　その……我々はまだ〝何か〟に捕ほ獲かくされているのか？」

「…………いいえ、艦長。赤い蔦つたは、どこかに逃亡したようです」

「メガロドンは？」

「三頭、共に消失しています。先ほどと同じく姿が見受けられません」

「ふむ……第一観測手」

「第二観測手と同じく、我々の周囲に赤い蔦もメガロドンも存在しません。ですが……」

「ですが？」

　カレンは少しだけ口ごもった。

「艦長、教官……己の目で見なければ、信じられないと思うのですが──報告します」

「何だ？」

「我々の艦体が存在するこの発光空間ですが、前方に……何かしらの

建造物が見えます」

「海に沈んだ古代の遺跡か何か──か？」

「いえ。……古代の遺跡がディルビック号と名付けられたりはしません」

　司令室の全員が、息を呑んだ。教官ですら、啞あ然ぜんとした表情でカレンを見つめた。

「前方にある建造物……それにディルビック号のプレートが貼り付けてあるのが見えます」

「ディルビック号の……」

「それから──これは、幻覚かもしれないのですが」

　カレンは司令室全員に聞こえるように、先ほどのギリィという少年の会話を報告した。その不可思議な会話を全て。

「艦長……コゼットも含めて全員を仕事が終わり次第、集めてくれ」

　カレンの報告を聞きながら考え込んでいたホワイトビューが、ルイスに言った。

「はい」

　ルイスが艦内放送用マイクで集合を呼びかけた。

　深海の不可思議な空間、その大地で三頭のメガロドンがもがいていた。全身に赤い蔦つたが突き刺さり、彼らをギリィの意思に従う生物へと作り変えていく。

「本当暴れるなぁ……まあ、無理もないか。魚は呼吸ができないだろうし。あー、でも、この一頭はダメだなぁ、おなかがないし。……こんな怪け我がでよく生きていられるなあ、こいつ」

　ギリィはため息をつきつつ、赤い蔦が彼らを変えていく様を見守っていた。二頭はこの〝王国〟で暮らしていけるように脳と呼吸器官などを弄いじくることにした。

　さて、もう一頭はそろそろ死んだだろうから材料にでもしようか、とギリィは考えていたが──メガロドンはまだ生きていた。これにはさすがにギリィも驚き、興味深そうにそのグロテスク極まりない姿を見つめている。

「ふぅん……」

　苦しむメガロドン。ギリィはしばし考え、脳のう味み噌そは残してやろうと考えた。だが、他の二頭のように呼吸器官を弄くって肺呼吸できるようにするには、肺を一から作らねばならない。それはいかにも面倒そうな作業だった。

　それくらいなら、生きる屍リビングデッドにしてしまった方が都合がいい。

「うぅん……うーん、うーん……うーぬ、うー、うー……うーむ……」

　ギリィはしばらく考え込んだものの、たちまち少年特有の飽あきっぽさを発はつ揮きした。つまり、面倒くさくなって放り捨てることにしたのである。

　さて、どこに捨てるべきか。ギリィはすぐに、悪いた戯ずらっぽく笑って放ほう棄きする場所を決定した。

「驚かせちゃえ」

　全員が司令室に集合したのは呼びかけから三十分後だった。

「狭苦しくて済まんね」

　ルイスはそう謝りつつ、教官──ホワイトビューの方を見やった。

　ホワイトビューは頷うなずき、機関室などから改めて一人一人報告を受け、全員が情報の共有を成し得たことを見計らって、懐ふところから水晶玉を取り出した。

　彼らの中には、未だに自分たちがいる場所が海中ではないということを信じきれない者もいる。一人一人に潜望鏡を見せるよりも、こちらの方が手っ取り早いとホワイトビューは考えていた。

「これを見てくれ。障害物を通過する軽い〝遠えん視し〟を発動できる水晶球だ。至近距離しか視認できないので、観測手がいなくなったときのバックアップ程度に考えていたんだがね」

　古代のマジックアイテムなのだろう。水晶球の台座は古びてボロボロになっていた。どうしてそんなものを、彼が持っているのか、などという疑問はホワイトビューが呪文スペルを唱えて、水晶球が光りだすまでだった。

　光りだした水晶球は映画を上映するかのように、前方に映像を投射した。曖あい昧まいだった映像は、次第にクリアになっていく。

「本当、だったのか……」

誰かが低く呻うめき、ほぼ全員が同意した。

障害物──即ち、潜水艦の外壁を通過して覗き込んでいる風景ならば、その場所は海中でなければならない。暗闇でなければならない。あるのは砂と岩程度でなければならない。

だが、眼前に広がる風景はまったく異なっていた。

まず、深海との絶対的の違い──明るかった。空全体が発光していると考えればいいのだろうか。薄ぼんやりと、まるで空一杯に蛍けい光こう灯とうが敷き詰められているようにその空間が照らし出されていた。

「明るいのは〝遠えん視し〟が原因ですか？」

「違う、今から百八十度回転させるぞ」

その問いかけに、ホワイトビューは命令コマンドを口で呟つぶやき、水晶球の風景をゆっくりと回転させた。白い発光した空間は、潜水艦の最後尾あたりで真っ二つに断絶されていた。

そこからは途方もない暗黒が広がっている。その暗黒こそが本来正しい深海の姿だ。

つまり、この発光している空間には海水が侵入していないのだ。

ホワイトビューは全員が認識したことを見計らうと、再び視点を先ほどと同じ場所に戻した。

「あそこに見えるものが何か、分かるか？」

ホワイトビューが指差したのは、何かが積みあがったような黒い建造物だった。〝遠視〟でより詳細にあのオブジェクトを見た者たち以外は、よく分からないというように首を横に振った。

「観測手、あれが何だったのかを教えてくれ」

その言葉に、カレンが応じた。こうして目まの当たりにしても、やはり信じ難い状態であることは間違いない。

「あの積み重なっているものは、もっと近くで見ないとハッキリしたことは分かりませんが。……少なくとも、あの建造物に張りついていたものは何か分かります。あれは、ディルビック号の名前が刻まれたプレートです」

カレンは記憶を掘り起こしながら答える。確か、あのプレートは大広間の上、一ひと際きわ目立つ場所に飾られていたものだ。

「じゃあ、あれはディルビック号の残ざん骸がいか？」

「分かりません。調べてみないと何とも──」

　カレンは首を横に振った。この距離では、恐らく本来の第一観測手であるサティでも不可能だろう。

「ですが教官、もし本当にこの空間に海水が存在しないとなると、〝イエスラス〟ではこれ以上進めませんよ」

　当たり前の話である。潜水艦は地上を進むようには設計されていない。

「外に出てみるしかない──か」

　ホワイトビューの呟きに、全員が青ざめた。

「待って下さい、教官。……それは、余りにも早計では？　海中ではないという保証もありませんし、人が呼吸するための大気が存在するかどうかも分かりません」

　ルイスは続けて言った。

「極端な話、これら全てが〝幻影イリユージヨン〟だったらどうします？　こんな大規模なものはさすがに聞いたことはありませんが、それでも『深海に世界を一つ作り出す』よりはずっと簡単なはずです」

　ルイスの言葉は、全員の意思を代弁するものだった。

「……ふむ」

　ホワイトビューは自分への賛同者がいないことを確認すると、ため息をついて言った。

「……冒険しようぜ、ベイビー」

　カレンはキッパリと応じた。

「冒険の意味が違います」

　確かに──とアーネストは思った。付け加えるならば、搭とう乗じよう口ぐちを開くということは自分だけではなく、他の全員も賭けに巻き込む可能性が大いにあるということだ。

　この空間に踏み込んでみたくはある……だが、全員の命が懸かかっているとなると話は別だ。

「……待って！　みんな、あれを見て！」

　カレンの叫びに、ホワイトビューへ視線を移していた一同が一斉に振り向いた。

　水晶球が映し出す、向こう側の映像に先ほどは無かったものが映っている。

「……メガロドンだ」

　赤い蔦つたに絡まったメガロドンが、宙空を浮遊している。既に暴れてはいない、疲労したのか、それとも死んでいるのかまでは判断できなかった。

　全員が息を呑のんで、それを見つめる中──不意に、赤い蔦はメガロドンを無む造ぞう作さに放り投げた。一瞬、宙に浮いたメガロドンは重力に従って地面に叩きつけられ、ピクピクと痙けい攣れんしていたが、やがて顔を起こして動き始めた。

　だが、泳げない。いつもならば、水を蹴けって浮かぶであろう巨きょ軀くはまったく、これっぽっちも動かなかった。ただ、無様に頭を振っているだけだ。

　傍はた目めには滑こつ稽けいであったが──笑う者は誰もいなかった。アーネストには、その滑稽さが悲しく見えた。海上であれほど無敵を誇ったメガロドンが、地表で（今や海中でないことは明らかだった）あれほど無様に動き回るとは……。

　メガロドンはもがき苦しみ、暴れている。頭を振って体全体を動かそうとするために自然と地表を回転するような動作になっていた。そのため、メガロドンの体は少しずつズレていき、先ほどまで乗組員には見えなかった彼の腹部が晒さらけ出された。

　──そこには、何もなかった。

　腹部に当たる部分には、鱗うろこも、肉も、その中にあるはずの骨や内臓も、一いつ切さいが存在しなかった。まるで、そこから中身を引きずり出して用はないとばかりに放り捨てられたように。

「あれは……先ほど魚雷が直撃した、メガロドンです」

「まさか」

「本当よ！　だってほら、片目が潰つぶれてる！　あれはクレーンで潰した痕あとのはずよ！」

　サメの生命力は、海上を冒険したものならば誰でも知っている。心

臓さえ残っていれば、半日以上は暴れ続けるという説もあるくらいだ。

　だが、メガロドンの場合は力は一向に衰えることはなく、まるでこれからも生き続けるぞという意志を表明しているかのようだった。

　長い沈黙の後、ホワイトビューがポツリと呟いた。

「……さて。俺は行こうと思う。他に行きたい者は？」

「行きます！」

　カレンが真っ先に手を掲かかげた。驚きの表情を浮かべる周囲を他よ所そに、彼女は言った。

「ギリィ、という少年が私の幻覚でないかどうかを確認したいのです。もし、幻覚でなければ、ディルビック号沈没の手がかりは、あの少年が握っています」

「もし、幻覚だったらどうするんだ？」

　ホロウスキーの声に、カレンは平然と応じた。

「その時は、気が触れた女が艦内からいなくなるだけよ。望ましいことだわ」

　カレンに続いて、アーネストも当然のように手を掲げた。それを見てカレンの表情が痛ましいものに変わったが、アーネストは無言で首を横に振り、強固な意志を露あらわにした。

「……わたしも行こう」

「俺も行く」

「そうだな、俺も行こうじゃないか」

　カレンたちに続いて幾人かが互いに目配せしつつ手を掲げた。その目には恐怖と、そしてそれ以上の好奇心に満ち溢あふれていた。

　この光の空間は異質で異常だ。だが、それゆえに未知であり、まさに究極の秘境だった。

　──ならば、命を賭かけてみる価値はある。

　この場にいる冒険家アドベンチユラーの誰もがそう思った。

◇

　航海艦かん橋きよう昇降筒。気密室を完全に閉鎖すると、ホワイトビューが念押しするように全員に告げた。

「──準備はいいか？」

「はい」

　念のために、外に出る者には〝水中呼吸〟の魔法が唱えられた。万が一、大気が地上と異なっていたときの対抗策としてだ。もっとも、水圧で押し潰つぶされるのは避けられないので意味がないといえばないだろう。

　それにしても──と、アーネストは不安げにカレンの後ろに立つ女性を見た。

「……あ、あの……」

「はい？」

　コゼットが応じて振り返った。カレンの次に出るのは彼女であり、つまりこの無む謀ぼうな冒険に参加したということだ。服装も軽快なものに着替えており、奇妙な篭こ手てまで装備している。

「あなたは、どうして？」

　アーネストの問いかけにくすり、とコゼットは笑った。

「……見てみたいから、ではいけませんか？」

「いけなくはないですが……」

　心配です、という一言をどうしても告げることができず、アーネストは俯うつむいた。

「コゼット、アーネストは心配なのよ。あなたのことが」

「……お嬢様！」

「ふーんだ」

　アーネストが慌あわててカレンに顔を向けると、彼女はぷいと背中を向けた。どことなく、不機嫌そうなオーラが漂っているようにも思えた。

「行きましょう、教官」

　そう言って、さっさと昇降筒への扉を開いた。

「おい、ベイビー。頼むから、色恋沙ざ汰たを持ち込まないでくれよ？」

「イロコイなんかじゃありません、さっさと行って下さい。行け」

「わ、分かりました……はい、分かりました」

　物もの凄すごい目でギロリと睨にらまれたホワイトビューは、感かん慨がいに耽ふけることもできずに慌あわてて梯はし子ごを昇る羽目になった。

　弾倉マガジンの弾数を確認して、きっちりと差し込んだ。

「ディルビック号は見つかると思うか？」

　遊底ボルトを引く。薬室に弾丸が一発だけ送り込まれる。

「さて……だが、可能性は高い」

　セーフティかどうかを確認する。敵もいないのに、銃ひき爪がねを引いただけで銃弾がばら撒まかれるなどという状態は百害あって一利もない。

「なあこの領域は──一体何なんだ？」

　質問には応じない。

「分からん。その謎なぞを解くのは冒険家アドベンチユラーか、学者の仕事であって俺たちが関わり合うべきものでもないだろう」

　革製のベルトで肩に掛ける。重量おおよそ４ｋｇダイラツト。ズシリと重い。

「幸運を祈ってくれ……開けた途端に即死なんてことのないように」

　手を合わせる。

「ああ、祈っているとも。任務を果たして、帰還してくれ」

　一旦離して、拳こぶしを突き合わせる。

「ヤー、コピー、了解」

　互いに別方向へと立ち去る。

　ホワイトビューの手が、鎖を外したハッチにかかる。彼は軽い声で告げた。

「それじゃ開けるぞ。一、二の、三……はい、開けた」

　至し極ごくあっさりと、ホワイトビューはハッチを開いて艦かん橋きょうに出た。さすがにカレンやアーネストも唾つばを飲むほど緊張したが、海水が流れ込むことも頭を出したホワイトビューが水圧で潰つぶれることもなかった。

「……酸素がある。安心していいみたいだぞ」

「度胸があるというか……」

「ただの愚おろか者ものですよ、教官」

　ホワイトビューは笑いながら言った。

「俺はこういう事に関しては勘かんが鋭くてね。自信があったのさ。本当だ、嘘うそじゃない」

「──信じておりますよ、教官」

　コゼットがニコリと笑った。アーネストはその笑みに親密さよりも、何故だか空恐ろしさを感じていた。

第三章

　最初に外に出た四人━ホワイトビュー、カレン、アーネスト、コゼットは呆ぼう然ぜんとその風景を眺めていた。彼らは少し前まで水圧とメガロドンの恐怖を乗り越えつつ海中を深く潜り、暗闇の中を這はい進んでいたはずだ。

　だが眼前に広がる風景は、自分たちのこれまでの道程を覆くつがえさせるものだった。荒涼たる大地には草木の一本もない。遥はるか向こうに暴れるメガロドンが見える他は道もなく、ただただ自身の矮わい小しようさを感じさせるほどに大地が広がっているだけだ。

　ところどころに霞かすみがかっているように見えるのは、目の錯さつ覚かくではないようだった。まるで自分たちの行く先を意図的に隠しているかのように、霞はこの大地のあちらこちらを覆おおっていた。

　広大だ。

　あまりに広大すぎて、しばらくは呆然と風景を眺めているだけしかできなかった。

「……」

　カレンはようやく背後を振り返ることができた。そこには延々と続く暗闇の壁がある。こちらもまたぞっとするほど巨大で、見ているだけで押し潰つぶされそうな感覚を抱く。全員に少し待ってくれるように申し出てから、カレンとアーネストはその壁の前に立っていた。

「ナイフを当ててみてちょうだい。慎重にね」

「はい」

　アーネストが取り出したナイフの尖せん端たんが、そっと壁に触れた。ほんの少し、刃を海中に突っ込んでみようと力を入れる。だが、どれだけ力を入れても刃は海水に触れることはなかった。

　カレンが手のひらで触れてみたが、やはり海水に濡れることはない。

「原理的には魔法の障シー壁ルドみたいなものかしら。ほんの少し、薄皮一枚程度の壁が張られているみたいね。でも、深海の水圧をものともしないなんて……」

　しばし呆あきれたように、その闇色の壁をカレンは眺めた。目を凝

こらしてもほとんど何も見えない。わずかな濃淡の違いが、『何かがある』と判断させる程度だ。

　そのまま、空を見上げる。果てしなく眩まぶしく光る空──これは果たして空なのか？──に終わりは見えなかった。

　無論、終わりはあるはずだ。ここは深海１０００ｍモール。つまり、１０００ｍモール上は海面のはずなのだ。だが空は高くなるにつれて極めて曖あい昧まいな状態になり、薄く白い膜まくが幾重にもべっとりと貼られているようだった。地上の空ではないことは、多分間違いないと──少なくともカレンはそう思った。

　アーネストが地面に潜り込んでいた何かを発見し、土を掘って取り出した。

「何それ？」

「魚のようです……ただし、骨だけですが」

　まるで食い尽くされたかのような骨だけの魚は、土に汚れていた。だが、骨だけでもある程度の輪りん郭かくは分かる。アーネストが拾い上げたものは、カレンが先ほどみた骨だらけの魚とほぼ同じ形をしていた。

「深海魚ね」

　カレンの言葉に、何い時つの間にやってきたのかホワイトビューが頷いた。

「やはり、地上ではないな。瞬間移動テレポートしたとか、そういう話ではなさそうだ」

「この壁を見ているだけで、それは分かります」

　はぁ、とカレンは嘆たん息そくしてある意味で分かりきったことを告げた。

「ここはディルビック海域の海底１０００ｍモール地点。それはまず間違いないでしょう」

「さて。……分かったところで、進もうじゃないか！　この先に何があるのか、確かめてみようぜ、冒険家アドベンチユラー諸君！」

　はりきった調子でホワイトビューが言った。片腕を振り回し、興奮を鎮しずめようともしないその様をカレンたちは呆あきれたように見守っていた。

「まるで冒険家アドベンチユラーみたいね、教官」

　カレンの呟き、アーネストは同意しつつ両肩を竦すくめた。

　カレンが念テレ話パスを使い、空間に酸素があることや、どうやら安全であることを伝達する。

　航海艦かん橋きようのハッチが開いて志願したメンバーが新たに現れる。志願したのはマイケル・ソウヤーとフリードマン・フッカー、フリント・イエール、ジェシー・マグワイアにマーティン・レーマン、ラット・ジェイの六人だった。

　彼らは至し極ごく当然、というように短機関銃を装備していた。

　Ｓ＆Ｒサーヴアンドロツツ社製のワイザー38式短機関銃。弾倉に篭こめられた数は三十二発。フルオートで掃そう射しやすれば一瞬で屋内の人間を皆殺しにできるだろう。

　彼らの銃をじっと見ていたホワイトビューに、ジャンは肩を竦めて応じた。

「用心に越したことはないと思いまして。こんな状況は想定していませんでしたが」

「ああそうかい」

　ホワイトビューはやや不機嫌そうに応じた。

「アーネスト、あの六人だけど持っている銃の種類が全部同じね」

　カレンの言葉に、アーネストは頷うなずいた。

「……なりふり構ってはいられない、という訳かもしれません」

　と言いつつも、アーネストは心の何ど処こかで彼らの持っている兵器を歓迎もしていた。確かにジャンの言う通り、用心に越したことはない。ここは擬ぎ似じ的な地獄ダロマグルのようなもの、自分たちが足を踏み入れたことはおろか、夢想したことすらない完全なる異世界だった。

「いいだろう、降りて来い。とっとと行くぞ。まず、あのメガロドンを確認してみよう。それから、先ほどカレンが言っていたあの建造物に向かう」

　ホワイトビューは再び前を見据えた。遥はるか向こうに未だ暴れるメガロドンが、そしてさらにその向こうにうっすらとしか見えない建造物がある。

「ところでベイビー、それにアーネスト。お前さんたち、武器は持ってきてるのか？」

「私は武器を持たない主義なんです。平和主義という訳ではありませんが。まあぶっちゃけて言いますと、私の武器は知恵と勇気と美び貌ぼうと、そして何といっても１９０ｃｍセルモール、85ｋｇダイラツトのアーネスト・ヒギンズが主要武器にして必殺技です」

　カレンは自信満々にそう言い放った。

「ちょいとちょいとアーネストさん、あなたヒデぇこと言われてますが」

　ホワイトビューが肘ひじでアーネストを突っついた。

「光栄です、お嬢様」

　深々と一礼するアーネスト。その表情は実に誇らしげだった。

「あれ、光栄なんだそれ⁉」

「まあ、アーネストは執事ですから……。ところでアーネスト、あなたの武器は？」

「……これ、です」

　コゼットの問いかけに、アーネストは背中から巨大なナイフを取り出した。

「銃の類たぐいは？」

　アーネストは無言で首を横に振った。

「アーネストにナイフ以外の武器は必要ありませんわ、教官」

　カレンは断言して、ちらりとアーネストを見た。彼女のアーネストに対する信頼は並々ならぬものがあり、それは何らかの要因に基づくものだろうとホワイトビューは見当をつけた。つけたはいいが、何をもって信頼しているのかが分からなかった。

　ルイスを除くと、アーネストがハーフ・ワータイガーであることを知っているのはカレンだけだ。

「やれやれ。確かにあの六人は正解かもな。短機関銃の一いつ斉せい掃そう射しやなら、大抵の事態に片をつけられる」

「……ですが。短機関銃程度では対処しきれない事態が起きるかもし

れません」

　コゼットが醒さめた声で付け加えた。

　アーネストはその醒めた声にどことなく、今までのコゼットとのイメージのズレを感じた。それと同時に、首をひねるような疑問が湧いた。

　──なぜ、ホワイトビューはコゼットに武器の有無を聞かないのだ？

　疑問はすぐに「料理人に武器の有う無むを聞くのも無む駄だだと判断したのだろう」という答えを得たが、胸に小さい棘とげが刺さったような感覚は解消できなかった。

　先ほども言った通り、この大地はとても広大でおまけにところどころ霞かすみがかっている。ただ、よくよく目を凝こらせばその霞越しにぼんやりと、何かしらの影も見えた。

「その影が、先ほど私が見た建造物で間違いないみたいです」

〝遠えん視し〟で改めて確認したカレンにより、メガロドンを最初の目標とし、その影を第二目標とすることにした。

　十人が歩き出す。

　一部の者たちは、聖地を目指す巡礼者のように。

　一部の者たちは、まるで観光気取りであちらこちらをきょろきょろと眺めながら。

　ひたすら歩く。

　次第に観光気分の者は少なくなっていき、ちらりと前を見る以外はただ黙々と歩き続ける者がほとんどになってしまった。

　カレンは景色を眺めている内に、どうにも自身の気が滅め入いるのを感じていた。ここはカレンの知る世界ではなかった。カレンの知る現実リアルではなかった。

　だのに、こうして歩いているのは紛れもない現実だ。現実と、非現実の境目が曖あい昧まいで、自分は本当に歩いているのか、それすらも自信がなくなってくる。

　夢、それもとびきり悪夢の世界だ。カレンは反射的にアーネストの袖を握り締めた。そうして、少しでも現実を感じなければ心が壊れてしまいそうだった。

「……まるで、地獄ダロマグルだな」

　ホワイトビューの呟つぶやきに、コゼットが振り向いた。

「行ったことがあるような口ぶりですね」

「子供の頃、よく想像したのさ。悪人が行くべき場所とは、どんなところかを、ね」

　どこまでも荒涼たる風景が続き、周囲は高い高い壁に囲まれ、押し潰つぶされそうな──。

「よし。メガロドンにあまり近づくんじゃないぞ。噛かまれただけであの世行きは間違いないからな」

「あの世はここじゃないのかしら、ねえ？」

　カレンはそう呟き、アーネストは苦笑した。

　ルイスは潜望鏡で彼らが歩き出す姿を見届けた。ここからでは会話の内容はよく聞こえないが、ともあれ口を開いているということは酸素が充分に供給されているということだろう。

　やきもきしているであろう乗組員に、艦内放送を使って先ほどの十人が無事に外へ出たことを伝えた。あちらこちらで甲かん高だかい口笛と歓声が聞こえた。

　ルイスは安あん堵どのため息をつき、歩き続ける十人の背中が見えなくなるまで潜望鏡を覗のぞき込んでいた。

　メガロドンに辿たどり着くなり、ヒュウとホワイトビューが口笛を吹いた。

「こいつはスゲぇ」

　その言葉に、アーネストも同意せざるを得なかった。体長30mモールを越える怪物が暴れ狂う様は陰いん惨さんで、それ故ゆえに目が離せなかった。

　悲鳴はない、鮫さめにそういう声を発する機能は存在しない。故に、ただ無言でじたばたするだけだ。

　カレンを除けばいずれもメガロドンを間近で見るのは初めての経験だった。もっとも、そんな経験を持った人間は世界でも滅多にいないだろうが──と、アーネストは後ろに逃げたくなるのを必死で堪こらえつつ、カレンの前に出た。

　メガロドンは先ほどと同じように、じたばたと跳ね回っている。そして抉えぐり出された腹部の部分はこの場にいる十人が入り込んでも、まだ余よ裕ゆうがある大きさだった。

「ここで遭そう難なんしても、当分の間食料には困りそうにないな」

「少々アンモニア臭ぇけどな」

　フリードマン・フッカーやジェシー・マグワイアは引き攣つったような笑顔で冗談を発しているが、他の四人はそれに付き合う余裕もなく、ひたすらに畏い怖ふの眼まな差ざしを持って巨きよ軀くのサメを眺めている。

「……どうして、生きているのかしら。このサメは」

　カレンの呆あきれたような呟き。アーネストは自信なげに応じる。

「サメは生命力が強いと聞いていますが……」

「私の見たところ、内臓が全て摘てき出しゆつされているようです。心臓が無くなれば、さすがに生き続けることは不可能ではないかと──」

「魚雷が直撃して、呼吸ができていないのに生き続けていることが可能なの？」

「不可能に、極めて近いでしょうね」

「では、ありゃ何だ？　屍兵ゾンビか何かか？」

　ホワイトビューが発したその単語に、全員が硬直する。そうだ……このサメは死んでいなければおかしいのだ。

　にもかかわらず生きているということは、何らかの──魔力的な力で生きる術すべを与えられているということだ。

　つまり〝屍兵構築クリエイト・ゾンビ〟のような禁断の魔法だ。もちろん、真っ当な魔法使いはそんな魔法を取得することもおぞましいと考えるだろう。そういう魔法を使用するのは、暗黒に魂たましいを売り渡した連中だけだ。

　それはたとえば、聖せい導どう評ひよう議ぎ会かいのような。

　しかし──そんな者たちが、ここに居るとはアーネストには思えなかった。深海１０００ｍモールに潜る技術を、彼らが取得しているのか？　世界最先端の技術を入手可能であろう、ワイズマンがようやく成功させただけだというのに？

それとも、知られていないだけで、１０００ｍモールの海底にはこうした空間が存在するものなのだろうか？

それも違う一気がアーネストにはした。この空間は、あくまで人じん為い的なものであり、決して自然が造り出したそれではない。

「行きましょう。こいつはたぶん死んでる、でも動いてる。何故かは不明、理由を探るために……私たちは、もう少し先に進みましょう」

その言葉に誰もが頷うなずき、彼らは再び歩き始めた。

建造物に近づくにつれ、一人、また一人と顔をしかめ始める。最初に不快そうな表情を浮かべたのは、嗅きゆう覚かくの鋭いホワイトビューとアーネストだった。

「……腐くさってるな」

「そのようですね……」

ホワイトビューが不快な表情を浮かべているのを見て、自分の嗅いでいるものが気のせいではないと確信したアーネストは、深く頷うなずいた。

「どうしたの？」

二人の不快そうな表情に気付いたカレンが、交互に顔を見る。アーネストは無言でそびえたつ建造物を指差した。

近づいていくと、建造物が黒、というよりは濃緑であることにカレンは気づいた。何かを無数に積み重ね、崩れそうになるたびにそれを強引な力で整えた……そんな感じがした。

さらに近づき、理解した。同時に、酷ひどい嫌悪感と吐き気を抱いた。

「魚の群れ……？」

建造物を構成しているのは、おぞましいほど醜しゆう悪あくに溶けた魚たちだった。骨、皮、肉、腐汁……それらが強大な力で固められて、家のようなものを作っている。

一ようなもの？

否いな、まさしくそれは家だった。ぽっかりと開いた入り口があった。中はほとんど暗闇で、まったく見ることはできないが、それでもどうにか家らしい形を整えていた。……材料が、腐くさった魚でなければ、だが。

カレンやコゼットは反射的に口を押さえて、こみ上げるものを我慢した。ラット・ジェイは我慢できずに胃の中のものをぶちまけた。

「……これは、誰が作ったんだ？」

マイケル・ソウヤーの呟つぶやきには、紛まぎれもない恐怖が混じっていた。この〝家〟の存在そのものが創・造者の混沌ぶりを表しているかのようだ。

「ベイビー、一つ頼みがある」

「……嫌です」

カレンは即答した。ホワイトビューはなぜ？　というように首を傾かしげる。

「あの家か何か分からない代しろ物ものに入れって言うんですか、私に！」

「ベイビーは冒険家アドベンチユラーだろう⁉」

「う、ぐ……」

痛いところを突かれたカレンは、心底嫌気が差したという表情でわずかに後あと退ずさる。

「……私が行きます」

アーネストは腕を伸ばして、彼女が前に進もうとするのを制止し、ホワイトビューを少し睨んだ。どうせこうなる事は分かっていたくせに、という恨みを篭こめつつ。

カレンがついていく、と言い出さない内にさっさと足早に家に向かっていく。

「待ちなさい！」という声を背中に受けたが、その言葉だけでありがたいと〝家〟の床を一歩踏みしめた。予想通り腐液がぬめって、足場はひどく不安定だった。この不快な床をしっかりと踏み締めなければならない。

呼吸はなるべく控えた。鼻で息をしては、失しつ神しんしかねない。失神は大おお袈げ裟さにしても、吐き気を催すことは避けられないだろう。

絹きぬのハンカチで鼻と口を押さえ、片手でナイフを引き抜いた。真っ暗な入り口に──魔法でもかけているのか、少し暗すぎるとアーネストは思った──踏み込む。

「……」

　かなりの暗闇だった。だが、元来夜行性であるワータイガーの血を引くアーネストは人間を遥かに上回る速度で、その暗闇に完全に順応した。火をつけることは、念のために避けておく。何しろ、腐臭を放つ魚から、可燃性のガスが出ていないとも限らない。

　そして順応してみると、これはまた絶句するしかない代しろ物ものだった。

　外と同じく、内部もまた魚の死体がフル活用されていた。壁はべっとりとした魚の骨で覆おおわれ、骨製のカウンターが一つ。骨製のテーブルが三つ、一つのテーブルには四つの椅い子す（これもやはり骨製だった）が存在する。

　当然ながら、いずれもボロボロで座ることも不可能のように思われた。

　とりあえず、家というよりはそう……酒場をイメージしたのだろうか。そんな気がした。

　もちろん、イメージしたからといってそれが成立するとは限らない。いや、何しろ材料が材料だ。腐くさった魚の骨と肉はそもそも材料ですらない。

　悪趣味な芸術品、悪趣味な玩おも具ちやだった。ふと陰影の加減が気になって右側のテーブルに注目する。

　──人がいた。

「……！」

　思わず後あと退ずさりしつつ身構える。暗がり過ぎて気付かなかったが、入って右側奥のテーブルに一人の男が突っ伏していた。手には回り転ボ式ル拳バ銃ーを握っている。服装から、ディルビック号の乗組員と判断──さすがに生きてはいまい。

　だが、すぐに先ほどのメガロドンがアーネストの脳裏に蘇よみがえった。

　生死を確認しなければならない。生死を確認するために、彼の後頭部をしっかりと摑つかみ、顔を見なければなるまい。

「……」

　アーネストは深呼吸しようとして、自分が今どんな場所にいるかを思い出し、慌あわてて口を塞いだ。ゆっくりと、慎重に彼の後頭部を

摑み（アーネストは自分が執事であり、白手袋を装備していることに心から感謝した）――持ち上げた。

　ねっとりとした糸を引きながら、男の顔が露あらわになる。

　虚ろな瞳で、男は舌を突き出していた。醜く、それ故ゆえに悲しい表情だ。だが、こめかみには小さいながら孔あなが穿うがたれていた。そっと、彼は後頭部から手を離して、顔を下ろした。

　その後、死体の背後に回ったアーネストはポケットを片かたっ端ぱしから点検して、そこから財さい布ふとディルビック号における身分証明証を入手した。さらに、胸ポケットから手帳も手に入れた。カレンたちに渡せば、調査が進展するかもしれないとアーネストは喜んだ。

　死体は動かない―まったく。

「……？」

　気のせいだろうか、とアーネストは目をまたたいた。ほんの少し、男が顔を起こしたような……。

　ナイフを握り締め、じっと彼の様子を窺うかがう……五秒……十秒……唾つばを飲む。

　いいや、ピクリとも動いてないはずだ。

　気のせいだ。恐怖心がそう見せたのだ、そうに決まってる……アーネストはナイフをゆっくりと下ろした。

　男がむくりと上半身を起き上がらせた。

「……」

　アーネストは絶句した。震えることも、悲鳴をあげることも忘れた。怯えることすらも忘れたのは、如い何かなるときも平静であれ、という執事として正しかったかもしれないが。

　ごくりと唾を呑み、それから再びナイフを構えた。

　男は……虚空を見つめたまま、ゆっくりと右手の拳銃をアーネストに―いや、自分の口に咥えこむ。

「……？」

　男は挑戦的な目つきで、自分が咥くわえた銃を睨にらんだ。アーネストのことなど、まるで眼中にないようだった。

　アーネストは止めようと動いた──どんな状態であれ、眼前で自殺を行われる訳にはいかない、それは少し後味が悪すぎる。正義を気取りたくはないが、無関心な悪は御ご免めんだった。

　だが、男が銃ひき爪がねを引く方が遥はるかに迅じん速そくだった。どん、と鈍い音。男の後頭部が散らばり、腐りかけた脳のう漿しようがびちゃびちゃと音を立ててぐずぐずに崩れていく。

「アーネスト！　何があったの!?」

　駆け込んできたカレン、その表情はどうにも心配でたまらないというようだった。だが、こんな情景を見せる訳にはいかない。アーネストは慌あわてて腕をぶんぶんと振った。

「何でもありません、お嬢様！　それより、表に出てください、速く！」

「一体何、が──！」

　カレンがへたり込みそうになるのを、ギリギリで支えた。

「お嬢様、離れて！　離れて下さい！」

「し、死体……!?」

「彼は死んでいます！」

　あれが果たして〝死〟といえるものかどうかはともかくとして、彼は確かに死んでいた。

　恐らく、こめかみに向けて撃ったときは銃弾が脳まで到達することなく逸それていったのだろう。

「……」

「死んでいます。確実に。死体は見ない方がよろしいでしょう」

　そう言いつつ、彼はカレンを無理矢理〝家〟から引き離した。そうして、心配そうなコゼットやホワイトビューの元へと戻る。

「……アーネスト、あなたは大丈夫？　怪け我がは無い？　息苦しいとか、そんな事は？」

「大丈夫です、お嬢様。それよりこれを──」

　手帳と身分証明証をカレンに手渡し、アーネストはようやくまともに空気を吸った。

「ん。……手帳と、これは乗組員の身分証？」

「はい。……中に、男が一人テーブルに突っ伏して死んでいました。死因は銃です。たった今起き上がり、自分で命を絶ちました」

「たった今……？」

　コゼットの啞あ然ぜんとした問いかけに、アーネストは信じろとばかりに頷うなずいた。

　信じるしかなかった──先ほどのメガロドンを見てしまっては。

「……この身分証の写真の人が、死んだ人？」

　アーネストは頷いた。表情があまりにも違っていたとはいえ、男が同一人物であることは疑いようがない。

「一等航海士。名前はヘンリー・ロース。……会った事あるかも。手帳は……航海日記ね」

　ホワイトビューやコゼットだけでなく、六人も集まってカレンが読み上げる日記の内容に聞き入り始めた。

「篭こ手て月づきノ13日までは航海が順調だったようね……無線の記録からも、それは確認されてるから。彼が13日までは、マトモな精神状態であったことは間違いないようですね」

　カレンの言葉は、少なくとも彼は記録者としてそれなりの信用が置けるという事を指し示している。

「問題は次からよ。篭手月ノ14日──」

　ここから先は私ヘンリー・ロースが自身に宛てた日記ではなく、他者がこれを見ることを希望して書き記すものである。始まりは……海域に到達した途端、あまりにも突然の嵐が巻き起こったことだった。嵐はたちまちディルビック号の周囲を取り巻き、蹂じゅう躙りんし始めた。

　だが、それより恐ろしいのは〝赤い蔦つた〟だった。

「……私たちが〝遠えん視し〟で見たあれのことね」

　同じく〝遠視〟でそれを見たジェリー・マグワイアは恐怖に怯えた表情を見せつつ頷いた。

　〝赤い蔦〟は意志を持っている。邪悪な意志だ。もうこの通信室ももたないだろう。隣のジョンは泣いている……。我々は見てし

まった！　三等航海士だった男が、肉体を玩おも具ちゃのように弄もてあそばれ、変えられる様を！　そうだ、私も蔦つたが腕に突き刺さった瞬間理解した！　我々は死ぬより恐ろしい目に遭うと察知したのだ。これは死者を冒ぼう瀆とくするもの、死者を死者でなくするものなのだ。

　そこから、日記の字体が乱れていた。『通信』『遮しゃ断だん』の二文字がかろうじて読み取れるが、それ以外はほとんど書き殴なぐりだ。

　数ページそうして進んだあと、再び冷静な字体に戻った。

　ディルビック号は海の中に引きずり込まれている……私はいま、自分の体が侵食される恐怖に怯えている。不思議なことに、水圧は平気らしい……魔法のせいとは思えない。そこまで強力な魔法でもない。この、赤い蔦が持つ力なのだろうか……ひどく、眠い。

　奇跡が起きて、私は逃げ出すことができた。体の半分は腐り果てている。だが、脳はあまりいじられていないようだ。だから、理性が、残って、いる。時間の感覚が消えている、脳をいじられたせいだ。ゆだん、すると、どうし、ようも、なくなる。

　銃が手元にある、これで死のうと思う。これが最後だ。はやく決意しなければ、死にたくない、などと思ってしまう。

　助けてくれ――解放して――ここはおぞましい地獄ダロマグルだ――ギリィ、というコドモ――ヨウ、ジョン、ゲンキダッタカ――バーテン、ビールヲイッパイクレ――オレノオゴリダ――オレノオゴリダ――オレノオゴリダ――ダメ―ヒキガネヲ――ヒカナクテハ――。

　後は、訳の分からない……乱れすぎて読み取れない単語が延々と続いているだけだ。

「ギリィ……？」

　カレンの呆ぼう然ぜんとした呟き。確かに、この手帳にはギリィと書いてある。子供、という言及も。

　やはり自分の見たものは、幻覚などではなかったのだ……！

「教官……！」

「……ああ、ギリィだったな。お前の見た子供も」

　カレンの頷きに、ホワイトビューはしばし思考に耽ふけった。

「沈没時における状況は大体理解できた。嵐に遭あい、赤い蔦に絡まれた。そして、一気に海中へ引きずり込まれた。……となると、この空間は元々存在したのか？」

「この空間は元々存在して、ここにディルビック号が引きずり込まれた──？」

「いずれにせよ、鍵かぎはギリィという名の子供ですね」

　コゼットの言葉に、全員が頷うなずいた。

「よし、教官。進みましょう」

　マイケル・ソウヤーが短機関銃を構えて言った。ホワイトビューはやや渋い表情を浮かべたが、五人も彼に従うつもりのようだ。

「少し待て。カレン、念テレ話パスでルイスに定期報告してくれ」

「はい」

　カレンはルイスに念テレ話パスを飛ばし、現状の報告を述べた。

　──ふむ……。

　──報告は以上です、教授。……もとい、艦長。

　──教授でいいさ。了解した、カレン。アーネストと共に一度こちらに戻ってくれないか？

　──申し訳ありません、もう少し前に進もうと思います。

　──仕方ないか。健闘を祈る。それからアーネストと、教官によろしく。危険なときは、すぐにこちらに戻って態勢を立て直せ。いいね？

　──はい、分かりました。

　カレンは念テレ話パスを断ち切った。

　一同はひたすら荒野を進んでいく。途中、〝家〟もいくつか点在しており、そこに踏み入ってみたが、ほとんどの〝家〟は骨のテーブルと椅い子す以外に目立つものもなく、時にはそれすら無い、ただの空き部屋な場合もあった。

「ここは一体、どういう世界なのかしら」

「……分かりません」

　アーネストは首をひねった。海底に存在する、大気のある空間──それだけで、異常であることは明らかだ。

　加えて、この建造物がまた異常だ。便べん宜ぎ上〝家〟と呼称してはいるが、魚の体で作り上げられたものを果たしてそう呼んでいいものかどうか、疑問が残るところだった。

「あの〝家〟ですが……なぜテーブルと椅子があって、ベッドはないのでしょう」

　コゼットの疑問に、彼らは顔を見合わせ、首をひねるか肩を竦すくめた。

「さぁ……」

「分からん。この世界を作ったイカレ野郎の心情なんて知りたくもないね」

　ラット・ジェイはそう言って肩を竦めた。

「……俺たちが考えるべきことでもないだろうよ」

　マイケル・ソウヤーは唾つばを吐き、やはり興味のない様子だった。あとの四人──つまり、フリードマン、フリント、ジェシー、マーティンも同じような意見らしい。

「……ベッドがない、という事は住人が眠らないのかもしれません」

　アーネストのぼそっとした呟つぶやき。あの〝家〟に対してはそれなりの興味があるらしい。

「そもそも、住人がいないという線はない？」

　カレンは相あい槌づちを打つように、そう言った。

「では、この〝家〟は何のために存在するんでしょうか？　カレン様」

「……存在するために、存在しているのかもしれない」

「それはどういう──？」

「……要するに、中身はどうでもよかったのよ。この家の製作者は。ただ、あるだけでいいの。この世界に〝家〟という存在があれば、それでよかったんじゃないかしら」

「なるほど、ベイビー。つまり〝家〟が沢山あれば、それでよかった

と。中身は別にどうでもいい……って事は、あれだ」

　カレンは両肩を竦すくめた。

「あくまで予想です。予想ですが──」

「……そうか、街……」

「こら、アーネスト。私の台詞せりふ取るな」

「街──？」

「つまりね、コゼット。あれはこの世界を作るための一要素でしかないのよ。家が沢たく山さん集まれば、それは街と呼ばれるでしょう？　古代の王ライアーが墓の内部に自分の王国を模した話とか、有名なのよ」

「ふむ……ラドリースにも、確か似たようなものがあると聞きました。もちろん、この世界より遥はるかに規模は小さいですが……」

「そういう類たぐいの世界じゃないのかしら。この家は──」

「これ以上の手がかりがない以上、予想はそこまでにしておいた方がいいんじゃないか？　それよりカレン、〝遠えん視し〟を使ってくれ。この道のりはまだまだ続きそうか？　時間的には、そろそろ四時間を過ぎる頃だ。この光が消えることはなさそうだが、疲労も考えると何もなければ、一度撤てつ退たいするべきだ」

　ホワイトビューの提案に、カレンは〝遠視〟を発動させた。

　視界が歪み、酩めい酊ていしたような感覚を抱く。疲労が溜まっているのか、少し普段より〝遠視〟の映像が霞かすんでいるが、この先の道に何があるのか調べるだけならば問題なさそうだ。

　すぐに目についたものがあった。今までの〝家〟などとは比較にならない巨大な建造物が、３ｋｍセツトほど先に存在している。

　かつての優雅で豪ごう奢しやだった船体はあちこちが破損しており──船体のあちこちに巨大なクレーターのような穴が開いている──何より、船体は真っ二つに裂かれていた。今、彼女の目に見えるのは真ん中より前の船首だけだ。

　その優美なデザインの船体を、見間違うはずもない。

「ディルビック号───！」

　全員が、反射的にカレンの視線の先を見やった。

　カレンはしばらく船体の後部を捜索したが発見できず、やむなく〝遠えん視し〟を打ち切って報告した。

「……それがあるのならば、行かねばならないだろうな」

　全員、満場一致で先に進むことを決定した。

　３ｋｍセツト先に行くまでに、次第に〝家〟を見かける回数が増えていった。二、三軒ちらほら存在する程度だったそれは次第に増ぞう殖しよくして立ち並び、カレンの言う通り、まるで街のような様相を呈していた。

　一軒一軒チェックするのは止めて、何かの気配でも感じない限りはひたすらに前に進むことにする。相変わらず、〝家〟の材料は腐った魚が主だったが、ちらほらと別のものが入り混じっていた。どうやら材料の中に鉄製の船体や、一ひと際きわ大きな生物──たとえば人間サイズだろうと見当をつけた──の骨が使用され始めたのだ。

「ディルビック号……じゃないわね。ただの船みたい」

　たまたま壁に使われていた船体を、ノックするように軽く叩いたカレンが呟いた。

「救助船の一部では？」

　アーネストの返事に、カレンは首を横に振った。

「……もっと前かも。錆さびが酷ひどいもの」

　彼女の言う通り、鉄かどうかもあやふやだった。一体、いつの時代の船なのかすら定かではない。

「一体、この『街』はいつ頃から作られ始めたのかしら……百年？二百年？」

「……分かりません。そしてお嬢様、見えてきました」

　アーネストの言葉に、カレンははっと前方を注視した。巨大な船体の影が、遥はるか前方に見えた。間違いなく、彼女が〝遠視〟で見たものだ。

「ディルビック号」

　彼らは緊張の面持ちで、ディルビック号に向けて足を速めた。

　ディルビック号が真っ二つに裂かれている、というのはカレンから既に情報を受け取っていたとはいえ、こうして改めて見ると

あまりにも凄せい惨さんで、そして途方もない光景だった。

　下に〝家〟だったものの名な残ごりが複数あるせいか、やや上方に船首を傾かしがせている。この世界における、巨大な墓標というか、宗教的建築物というか──そういう感じをアーネストは抱いた。

　六人は気が逸はやるのか、今にも駆け出しそうだ。

「人の気配はない──かねえ」

　ホワイトビューのその言葉に、アーネストは頷うなずいた。自分の嗅きゆう覚かくに、何か生物の気配は捉とらえられない。あるのは、そこら中に漂うおぞましい死臭だけだ。

　あるいは、死臭を放つ〝何か〟が動けばそれはそれで捉えられる自信がある。

「よし、それでは二手に分かれるぞ。マイケル、お前そこの五人を連れて裂けた船底から侵入しろ。俺たちは船首に昇ってから、一階ずつ降りて調査する」

「……了解」

「気をつけろよ、その短機関銃が役に立たないように祈ってるぜ」

「俺も祈りますよ」

　マイケルは笑い、五人と共に船底へと向かっていった。

「さて、と。俺たちも船首に向かおうぜ」

「昇るんですか？」

「先に俺とコゼットが昇って、ロープを降ろす。アーネストはベイビーを抱えるなり何なりして、ゆっくり確実に昇って来い」

「……」

　カレンとアーネストは、今しがたの言葉がいまいち信じられなくて互いに顔を見合わせた。

「あの……コゼットが、先に昇るんですか？」

「はい。まあ、この高度ならば何とか」

「はぁ……」

「では、レディファースト──お先にどうぞ」

　おどけた仕草で一礼するホワイトビューに苦笑し、コゼットは走り出した。

「え、何？　ロープを使わな…………え、えぇ!?」

「な──!?」

　コゼットは、船体を駆け昇っていく。

　あまりの光景に、カレンとアーネストはあんぐりと口を開き、ロープすら使わず、垂直に走るコゼットを眺めている。

　十秒──経過したかどうか。コゼットは昇りきると同時にくるりと前転して着地。カレンやアーネストたちに向かって、手を振る。

「……あれ、コゼット？」

「……」

　アーネストは少しショックを受けていた──奇妙な悔くやしさがあった。それから、何となく騙だまされていたという不快感も。

　だが、それらはすぐに消えた。

　何か必要に迫られて実力を隠していたのだろうが、現状においてはそれらが必要ないと判断したのだろう。

　カレンはアーネストを肘ひじで突っついた。

「意外な女性の意外な一面を見たわね」

「……驚きました、まったく」

「じゃ、俺も行くぜ」

　ホワイトビューもまた、コゼットと同じように駆け出していった。そして、コゼットが垂らしたロープにしがみつき、あっという間に昇りつめた。

「蜥リザ蜴ードというより野モン猿キーみたいね、あの人も」

「それではお嬢様…………お摑つかまりください」

　アーネストはロープの前まで来ると、両手を広げてカレンを迎え入れた。

「一応言っておくけど、私だって昇ろうと思えば昇れるんですからね」

　カレンの不ふ貞て腐くされたような声に、アーネストは穏やかな笑みで応じた。

「……はい、存じております」

　ロープをしっかりと摑み、ゆっくりと昇っていく。アーネストの昇り方は一歩一歩、まったくもって油断がなく、安定感があった。このまま眠ってしまえば、起きる頃には目的地に着くだろう──さすがに、眠りはしないが。

　ロープを摑んだとき、わずかにぎぃぎぃと軋きしむのは、まるでゆりかごをゆらゆら揺らす音のようだった。

　アーネストが心配そうに囁ささやく。

「お嬢様、苦しくはないですか？」

「ないよ……ありがとう、アーネスト」

　優しく、大きな執事に包まれながら、カレンは無事に船首へと辿たどり着いた。

「さて、と。一階ずつ調査していくが……コゼット。お前さんは先行して、船倉にいった連中を監かん視ししてくれ」

「……はい、分かりました。ミスター・ホワイトビュー……どうか、無理はなさりませんよう」

「ああ」

　ホワイトビューは大きく口を開いて笑った。

「分かっているとも」

「あ、あの……大だい丈じよう夫ぶ、なん、ですか？」

　アーネストが眉まゆをひそめて、コゼットを見た。コゼットは申し訳なさそうな表情を浮かべ、不安そうなアーネストを見やる。

「……色々と秘密にしていてごめんなさい。私は大だい丈じよう夫ぶです、あなたはあなたの主を守ることに、全力を尽くしてください」

　しばしの沈黙のあと、アーネストはゆっくりと頷うなずいた。

「分かりました。信じます、あなたを」

「……ありがとう」

　コゼットがさっと船体の断面部分から軽快に降りていく。もう、昇ったときほどの驚きはなかった。アーネストは、コゼットが去ったあともぼんやりと先ほどまで彼女がいた場所を眺め続けている。

　その後ろ姿を、カレンはどこか複雑な面おも持もちで見つめていた。

（──ひょっとすると。アーネストは、コゼットに好意を抱いているのかしら）

　まさか、と思い直す。彼が今まで、女に愛情を注いだことなどあったか？

　もちろん、もちろん自分は例外としてだが──。

　ああ、でも。今まで違ったからといって、今度もそうだとは限らなくて。

「……お嬢様？」

「あ、え？　あ、うん。ごめんなさい、その、何でもない……何でもないの」

　かぶりを振って、カレンは一歩前へ進んだ。

　綺き麗れいさっぱりと忘れることにした。

「さ、行きましょう！」

　三人と別れたコゼットは一人、軽快に船を駆け下りていた──。足音など、今の彼女にはごくごくわずかな雑音を立てる程度だ。

　思考を前方と聴覚に集中しつつ、先ほどのアーネストの不安そうな表情を思い出した。

　くすり、と笑みを零こぼす。自分はあのような純粋で、無む垢くな好意を与えられるべき存在ではないだろうに、とやや自じ嘲ちよう的に思う。

──それにしても、あれは異性としての好意と解釈していいものだろうか。

　拙つたない経験ながら、それは何となく違うような気もしていた。

　ふむ、とコゼットはますますアーネストの事を考えるのに思考を偏かたよらせた。カレン、という少女は言うまでもなく主であり、アーネストに好意を抱いているのは理解できる。自分の主より素直な分、丸分かりである。いや、自分の主も相当分かりやすかったが――。

　カレンは冒険家アドベンチユラーである、危険な行為も沢たく山さんこなしてきただろう。アーネストはそのたびにハラハラと、あのような表情を見せていたのではないだろうか。

　だが、その不安は次第に薄れていく。慣れたのではなく、主を信じられるようになったのだろう。

「ふぅむ……」

　……なるほど、だんだんと読めてきたぞ。あの様子では、カレンは仲間の冒険家アドベンチユラー以外に女性の友人はいないと見て間違いない。

　冒険家アドベンチユラーならば、やはり多かれ少なかれ頼りになる存在であり、死ぬ覚悟もしている。いちいち心配をしていられない。

　ところが、自分――コゼット・レングランスは料理人という触れ込みで、ここにやってきた。普通の料理人は戦わないし、冒険もしない。だから、アーネストは……アーネストは、心配だったのだろう。

　単純に、自分を死なせたくない――そう思ったのだろう。アーネストはただ、ひたむきにお人よしで、優しいだけなのだ。きっと、しょっちゅう外見のことで勘かん違ちがいされたのだろうし。

「いや待て、となると……」

　コゼットは自身の言動を思い出した。彼と初対面で、思わず「優しそうだ」と言ってしまった。あれは思っていたことをストレートに出してみたまでのことだが、少なくともアーネストにとっては――結構、好感度を高める発言だったのではないだろうか。

　何だか、彼は照れていたようだし。

「――そうなると、私にも少しはチャンスがあるのだろうか」

　そんな事を少し嬉うれしそうに呟いてから、慌あわてて首を横に振った。

　何しろ、今の自分には仕事が一番大事だ。恋愛ごとにかまけている場合ではないのだ。

　多分、きっと、必ずだ。

　だから、ちっとも惜おしくなんかないのだ。他人の執事を奪い取る趣味なんてない。

「無いんだってば、こんちくしょうだ」

　複雑な想いを抱えつつ、コゼットはひた走り──ついに、彼らの背中を目に捉えた。

　素早く立ち止まり、巨大な柱の陰にその身を隠す。

　ピリピリとした雰ふん囲い気きが、こちらまで伝わってくるようだ。いくら何でも、ここまで気を張らなくとも──と思う。彼らが真っ当な冒険家アドベンチユラーならば、だが。

　既に、コゼットは彼らの歩法からある程度正体を看かん破ぱしている。

　秘密工作員だ──それも一流の。

　単独ではなく、複数人でチームを組んで目的を遂とげるタイプ。

　そして、彼らが銃を構えつつ手で合図を送る場面を目撃して、彼らの所属組織も大まかながら理解した。

（ＮＣＩＡか、動いているとは聞いていたが……）

　彼らの組織は軍隊とも警察とも違うためか、その手の合図も独特だ。それに従い、残りの五人がテキパキと動く様は、一つの巨大な生物を思わせた。

　彼らに気け取どられぬよう──特にエルフであるフリントに注意を払いながら──そっと後を尾つけていく。

　前方を行く集団は、目的地を定めているようだった。ほとんど迷うことなく進み続けている。

「右う舷げん……第一金庫室。よし、ここだ！」

　一斉に銃を構えつつ、ラット・ジェイが素早く呪文スペルを詠えい唱しようした。

（あのラットとかいう男、魔法使いだったか……）

　彼が唱えた魔法は〝暗号開かい錠じよう〟。特殊な合言葉を元に封印ロツクされた扉を開くための高等魔法だ。封印された側と、封印を開く側で合言葉の疎そ通つうが成立していなければならないが、それさえ通じていれば物理的な力で開くことは滅めつ多たにない。

轟ごう音おんを立てて、錠が開いた。

重い鋼鉄の扉を開く、コゼットがいる柱の陰からでは中の様子は窺うかがえない。

わずかに逡しゆん巡じゆんした末、彼女はもう少し接近しようと決意して――。

「よし。〝ガーゴイル〟発見！　これより、警戒態勢に入る」

その言葉に、ギリギリで踏み止まった。惜おしいが、ここから離れる訳にもいかない。彼らの組織は、軍人以上の非情さを持ち合わせている。見られていたと知れば、こちらに銃を向けかねない――その結果は、彼らの死体が転がるだけだという事になるだろうが。

「フリント！　……ロングの死体だ。この金庫室に閉じ篭こもったまま、餓が死ししたらしい」

「データファイルは？」

「ああ、あった。ロングが抱えていたスーツケースの中に、一いつ切さい合がつ財さい収められている」

ジェシー・マグワイアの理知的な声――荒々しい声や仕草は作り物だったのだろうか？　ご苦労なことだな、とコゼットは思った。

少し悩んだが、やはり様子は窺うかがった方がいいと決意したコゼットは柱の陰からわずかに顔をずらし、気付かれないように祈りながら慎重に金庫室の中を窺った。

２ｍモール以上はある長方体の鉄箱の前に、マイケルがいる。彼は箱の蓋ふたに手を掛けていた。蓋が開かれる――コゼットは声も出さなかった自分を褒ほめたいと思った。

直立した箱の中に入っていたのは、いわゆる全身鎧スーツアーマーだった。色はあますところなく黒。今にも動き出しそうなほどの圧倒的に禍まが々まがしい存在感に、コゼットは目を奪われていた。

兜かぶとは何かしらの生物――恐らく鳥類――を模しているらしく、それも異形さを一層に強調させていた。何しろ、視界を確保するべき部分が一いつ切さいない。

さらに、兜の後ろには足下に至るまでの長さを誇るたてがみ。

〝ガーゴイル〟という名らしき鎧よろいの隣には、武器らしきものが二つ鎮ちん座ざしている。

　一つは曲刀シヤムシールだった。やや湾わん曲きよくした片刃の剣だが、サイズは鎧に合わせたかのように巨大化している。刀身も極めて分厚く、ほとんど戦斧バトルアツクスの雰ふん囲い気きを醸かもし出していた。人を斬きるのではなく、人を殴って引き千切るための武器だ。

　もう一つは、異常なまでに銃身バレルが長い銃器だった。単なるライフルではない、ライフルにしては、あまりに銃身から銃尾までの機関部が複雑すぎた。銃口は漏じよ斗うごのように、些いささか奇妙な形をしていた。

（重機関銃……か？）

　さすがのコゼットにも、その銃がコードネーム〝電動鋸チエーンソー〟、正式名称はＳ＆Ｒサーヴアンドロツツ三十九式ルベルチオンと呼ばれる、極秘に開発された最新鋭の重機関銃であることまでは知らなかった。

「データ及び〝ガーゴイル〟を確保、撤てつ退たいする！」

　マイケルが篭こ手ての部分を取り出した。別の箱に詰めて、分割して運ぶのだろう──コゼットはそう思いながら撤てつ退たいしようとしたが、次の瞬間、凍りついたように身動きが取れなくなった。

「おい、マイケル。何しているんだ？」

　ラットの声。

　その所作に、五人がぴたりと動きを止めて不思議そうに彼の顔を眺める。

「何しているかって？　お前たちを撃つに決まっているだろう。あれ？　撃たなきゃならないのか。ええと、とにかく、撃つんだ俺は、うん。撃たなきゃならないんだ。よし、撃つぞ」

　その言葉に五人は呆あつ気けに取られていたが、次の瞬間、マイケルが構えたワイザー式短機関銃によってことごとく薙なぎ倒された。

（……！）

　コゼットは反射的に飛び出した。

　気配に気付き、振り返ったマイケルは呆ほうけた表情を浮かべながらこちらに銃口を向ける。元より己の仲間を問答無用で撃つなど、敵であろうが味方であろうが不愉快な存在だ。敵と断定していいだろう。

「奴隷abdの━月qamar！」

　右腕の重たげな篭手が輝いた。

　呪文スペルに応じて、彼女の手に戦輪チヤクラムが召しよう喚かんされる。だが、それを投とう擲てきするよりマイケルの銃ひき爪がねを引く速度の方が勝った。

　コゼットは横に跳んだ、直後に床を複数の９ｍｍミリパラベラム弾が打ちつける。マイケルは銃を振り上げようとしたが、コゼットはその時点で戦輪チヤクラムを投擲していた。

　鋭い音と共に彼の右手首が切り裂かれた。マイケルは苦痛の悲鳴をあげつつも、片手でワイザーを構えて再び撃った。コゼットは柱の陰に隠れて、銃弾をやり過ごす。

「痛いてぇぇぇぇぇっっ！　ああ、畜ちく生しよう痛い痛い痛いぃぃぃっ！」

　金属が軋きしむ音━金庫の扉を締めている！

　コゼットは柱から飛び出したが間に合わず、金庫の扉は閉じられた。扉のハンドルを摑つかんだ。魔法を掛ける暇はなかっただろうから、この扉は単に閉じられただけだ━そう願いつつ、彼女はハンドルを急いで回し始めた。

　マイケルは激痛に泣き叫んだ。

「チクショウ。畜生、畜生、畜生！　どうしてこんな事になっちまったんだ!?」

　マイケルは頭を抱えたくなった。先ほどまで、作戦はスムーズに進行していたのに！

「何で撃ったんだ？　くそ！　訳が分からない。何で俺はこいつらを撃ったんだよう……！」

　右手首を切断された耐えられない痛みに泣き喚わめきながら、不気味に佇たたずむ〝ガーゴイル〟を封印されていた箱から引っ張り出す。

　マイケルはなぜ自分がそんな事をしているかは、切せつ羽ぱ詰つまっていてさっぱり分からない。

　マイケルはなぜ自分が仲間を殺したのかは、切羽詰まっていてさっぱり分からない。

「コード、コード、解除コード……くそ、解除コードが思い出せない！」

「コードとは何だ？」

　マイケルはその問い掛けに答えた──。

「いいか？　〝ガーゴイル〟のような全身鎧スーツアーマーを単独で装備するには、途と轍てつもない時間がかかる。そのため、〝ガーゴイル〟には開かい錠じようの亜あ種しゆ魔法がかかっており、コードを唱えることで、一瞬で装着と着脱が可能なんだ……くそ！　覚えているはずなんだ、覚えているはずなんだ！」

「分かった、私も手伝おう」

　マイケルはその言葉に笑みを浮かべた──。

「ああ、ありがとう。感謝する…………………………そうだ、思い出した！」

　マイケルは駆け寄って右手を差し出そうとして、手首から先が無いことに気付き、左手を鎧よろいの胸部に当てた。

「〝朝焼けと共に梟ふくろうは飛び立つべし〟」

　〝ガーゴイル〟が光り、背部が音を立てて開いた。

　マイケルは慌あわてて〝ガーゴイル〟の中に滑り込もうとして──ようやく気付いた。

「おい、お前は誰だ？」

「何だって？」

「おい、待てよ、おい！　何で、何でお前は俺の脳の中にいるんだ!?」

「……早くしたまえ、彼女がやってくるぞ？　死にたくなかろう」

　彼は内な側かで暴れ、命令し、再びマイケルの脳を支配下に置いた。

「あ、ぐ……くそ、チクショウ！　ヂグジョヴ……！」

　喚わめきながら、泣きながらマイケルは〝ガーゴイル〟の内部に入り込んだ。自動的に背部が閉じられ、魔法によってロックがかかり、起動する。

　対魔銃兵装計画アンチウオーロツクウエポンプロジエクトが産んだ怪物〝ガーゴイル〟──初の実戦投入である。

　同時に、マイケルの脳は完全に支配された。これが彼の狙いだった。

　完全に支配下に置くのは容た易やすかった。だが、問題は〝ガーゴイル〟の封印をどうやって解くかだった。完全に支配下に置いた時点で、マイケルの記憶と精神は粉々だ。封印を解くことができなくなる。

　マイケルは気付いていなかったようだが、彼はとっくに尾行するコゼットに気付いていた。

　正体こそ分からないものの、彼女が料理人でもなんでもないということにも気付いていた──もっとも彼女の料理は素晴らしい味だった、それには議論の余地がない。

　残念ながらマイケル・ソウヤーは銃弾が当たれば死んでしまう。あの時、傍にいた五人がいてはさすがに装着することは難しい。その前に制止させられるだろう。

　だが、もし。

　もし、五人を瞬時に短機関銃で殺害することができれば。



　もし。

　コゼットがそれを見て慌あわてて飛び出し、戦いを挑んでくるのであれば。

　そうであれば、マイケルは怯えて〝ガーゴイル〟に縋すがるだろう――。穴だらけの計画だし、失敗しても構わなかった。だが、自分はどうやら幸運の女神がついていたらしい。

　彼は不意に〝マグダラ〟と名乗った彼女を思い出した……自分にとって、彼女こそが幸運の女神というべきか。

　マグダラの舌の感触を思い出しつつ、彼はコゼットと対決するために銃を背部に装着し、大曲刀シヤムシールを手に取った。

　では――コゼット・レングランスを蹂じゆう躪りんするとしよう。

　もしそれが出来ないならば、この〝ガーゴイル〟は無価値のガラクタだ。

　マイケルの全身に狂った力が迸ほとばしる。アーメットヘルムは本来の視界を零ゼロにしていたが、体内の魔マカナが活発に動き出し、感覚が３６０度に広がった。

　五感を増幅させ、それらを人が知覚しうる形に統合するという新種の魔法である。

　今のマイケルには、たとえ自分の背後からまったくの無音で襲撃されたとしても、感知することが可能なのだ。

「――素晴らしい」

　彼は感かん嘆たんの息を漏もらした。

　金庫の扉が開いた、そこに立っていたコゼットを確認した〝ガーゴイル〟は曲刀シヤムシールを握り締めて走り出した。

　金庫の扉が開くなり、こちらに向けて走り出してきた〝ガーゴイル〟を見て、コゼットは一瞬唖あ然ぜんとした。装着者のいない状態ですら禍まが々まがしい存在だった〝ガーゴイル〟は、動き出すと一層その兇きよう悪あくさが増したような感覚を抱いた。

　甲かん高だかい凶鳥のような鳴き声が聞こえる。

〈キィァアアアアアアァッ！　シィアアアアアッ！〉

否いな、実際には声ではない。彼が突進すると、複雑な形状をした鎧よろいに当たった風が、金属を擦こすり合わせて厭いやな音を立てているだけだ。

だが、今のはまるで悪魔ガーゴイルの鳴き声だ。

「ちぃっ……！」

慌あわてててコゼットは後方へと退がっていく。それを追い求めて、〝ガーゴイル〟が跳躍した。

くるりと鮮やかな宙返りを見せつつ、曲刀シヤムシールを構えて斬きりかかった。

軽やかだった。あれほど重量がありそうな鎧を装着しているとは思えなかった。コゼットは肌に魔マカナを感じて、素早く彼の全身を検査した。

「踵かかとからか……！」

踵から白い炎が噴出している。外界から取り込んだ魔マカナを取り込み、それを炎の属性を加えて噴出することによって、爆発的な推進力を生み出しているのだろう。おまけに、その推進方向は固定されていない。〝ガーゴイル〟が望む方向、進みたい方向に自動的に誘導されるらしい。

だが、コゼットとてただの人間ではない。右手後方にあった柱へ跳躍すると、それを蹴けりつけて一気に〝ガーゴイル〟との間合いを遠ざけた。

ほっとするのも束の間、すぐにコゼットは恐ろしい事実に気付かされることになる。つまり、〝ガーゴイル〟は━まだ本気で飛翔してなどいなかった。

コゼットが両手の戦輪チヤクラムを構え直した瞬間━標的を定めた〝ガーゴイル〟がそれこそ爆発的な勢いで突進した。

ホワイトビュー、カレン、そしてアーネストはゆっくりとフロアを降りていく。人の気配は皆無で、死体も見当たらなかった。ただ、何かが起こったことだけは明めい瞭りようだった。壁のあちこちに、穴が開いている。

「例の蔦つたでしょうね」

「……はい」

カレンはあの時、海中で見た蔦の太さを考こう慮りよに入れて穴の

大きさを測定した。穴はどれも、カレンが想定している蔦の太さとほぼ一致していた。

「あの蔦の数なら、多分ディルビック号の乗員全てを攫さらえたでしょうね」

「恐らく、そうではないか、と」

　アーネストは周囲を見回し、血の痕跡が全く存在しないことを確認した。

　まったく存在しないことが、かえって恐ろしいとアーネストは思った。何故なら、それは彼らのことごとくが抵抗もできず、殺されることもなかったと推測できるからだ。

　殺されることなく――どうなったのだろう。あの蔦の本体に喰われたのか、それとも改めて殺してから、どこかに打ち捨てられたのか。いや、あるいは、あるいは……。

　あの、メガロドンを思い出してアーネストは喉のどが詰まるような恐怖を抱いた。

　――あるいはああいう風に造り直されたか？

「このフロアであと見てないのは……向こうの洗面所と、ブティックだな。洗面所は俺がチェックしておこう」

「では、ブティックは私とアーネストが――教官？」

「何だ？」

　ホワイトビューは、やや内股気味にもじもじしながら洗面所に向けて少しずつ接近しようとしていた。

「様子が変ですが、どうかしましたか？」

「……い、いや。別に。さっさと調べて、次のフロアに行きたいな、そう思うだけです」

　なぜ丁てい寧ねい語なのか、カレンには分からない。

　もちろん、アーネストにも。

「一人が不安ならば、やはり三人一いつ緒しよに……」

「い、いやいい！　さ、さあ迅はやく！　迅く、迅く、迅く！」

　ぱたぱたと手を振って、ホワイトビューは駆け出していった。

　ぽかんと口を開けてそれを見守るアーネストとカレンは、しばらくしてのろのろと顔を見合わせ、納得いかないと首をひねりながらもブティックへと向かうことにした。

　二人は気付かなかった──そのフロアにあった豪ごう奢しやなレストランに入ったとき、彼が二人の目を盗んで、食料のハムをこっそりと頂ちよう戴だいしたことを。

　この海底の不可思議な世界にも微生物は存在し、それが食料を食料として成立させないように活動──結果、あらゆる食料は腐敗する。

　平たく言うと、彼が食ったハムは腐くさっていた。

◇

　カレン・グリムスターとアーネスト・ヒギンズは共にブティックの前に立ち、互いに顔を見合わせた。そこには隠し切れない恐怖の表情がある。

（……聞こえる？）

（はい）

　目と指で己の意思を伝え合う。そして、互いに幻覚でないと知り、ゆっくりとブティックのドアに耳を当てる。ドアには遮しや光こう用のカーテンがかかっており、中の様子をうかがい知ることはできなかった。

　音。

　音が聞こえるのだ。

　先ほどから、このブティックから音が聞こえてくるのだ。

　それは……がさがさと、ひっきりなしに。

　アーネストはナイフを引き抜いた。カレンはゆっくりとドアに近寄る。

　カレンがドアを開き、アーネストが飛び込む──身振りと手振りで、その作戦を決定した二人は、頷うなずき合った。

　カレンはドアノブを摑つかみ、一気に開く。同時にナイフを構えてアーネストが飛び込んだ。

「え――――？」

アーネストは驚きよう愕がくに目を見開く。カレンも同じだ。部屋を見た瞬間、驚きのあまり全身が凍りついた。

確かに、そこには〝何者か〟がいた。だが、それはアーネストたちが予想し得たどんな存在でもなかった。赤い蔦つたでもなければ、虚うつろな目をした死人でもない。

栗色の髪の毛がふわりと揺れた。ブティックの服を胸元に握り締めたまま、おどおどとした瞳は驚愕に見開かれている。

少女……少なくとも外見は、人の姿をした少女だった。これほど表情が豊かで、これほど生に満ち溢あふれた者は果たして死者と呼べるのだろうか？　死者なのだろうか？

アーネストは問い掛ける。

「君は、誰だ――？」

◇

ソレイシア・スピアケイブ

ソレイシアの広大な森林地帯の奥深くに、槍の洞窟スピアケイブと呼ばれる洞どう窟くつがある。由来は鍾しよう乳にゆう石せきの長く、そして尖せん端たんの極めて鋭い形状からだ。特に大ホ広ー間ルと呼ばれている空間では、いつの日か天井の槍が自重に耐え切れなくなり、雨のように降り注ぐだろうと推測されている。

冒険家アドベンチユラーや政府によってあらかた内部は探られた後ということもあって、好んでここを訪れる者もおらず――今では聖せい導どう評ひよう議ぎ会かいの拠点の一つとなっている。

降り注ぐ鍾乳石などまったく意に介さない魔人たちが集う場所だ。

大広間ホール――あまりにも広大すぎて、闇がみしみしと音を立てて締め付けてきそうなほどの圧迫感を人に抱かせる場所、その中央に。

淡い光と共に一人の少女が立っていた。聖導評議会〝連絡役〟のマグダラだ。彼女は手のひらを宙に差し出している、そのすぐ上には巨大水レ晶ン体ズが浮遊していた。

水晶体は、ぼんやりと〝イエスラス〟の乗組員が映し出していた。

巨大な水レ晶ン体ズを通して、マグダラは彼らを見つめていたのだ。

「いや～……ビックリしたなあ、こんな深海にこんな世界が広がっているなんて！」

　大きな目をぱちぱちとさせながら、マグダラは己の戦器〝惨劇の水晶体レビスタル・シェラ〟が映し出す光景に見み蕩とれていた。

「さあて、〝ガーゴイル〟は動き出した。彼らはどう出るかな？　逃げる、戦う……ま、どっちでもいいや！　データが多いに越したことはない！」

　ケラケラと心底楽しそうに――――マグダラは笑った。

（つづく）

東出祐一郎

Yuichirou Higashide

２００５年「あやかしびと」でソロデビュー。

本作は２００７年７月に発売された「Ｂｕｌｌｅｔ　Ｂｕｔｌｅｒｓ」のノベライズ。

これだけ書くのに一時間悩むってお前はどんだけ語るべきことが存在しないんだ。

小学館ｅＢｏｏｋｓ

Bullet Butlers

～虎は弾丸のごとく疾駆する～１

２０１５年10月９日　電子書籍版発行

者　東出祐一郎

作　propeller

行人　立川義剛

集人　野村敦司

集　望月充

行所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２００７年11月21日　初版第１刷発行

　ISBN978-4-09-451036-2